

国際日本研究

第十一号 二〇一九年二月

論文

- Almas DISSYUKOV
“Central Asia Plus Japan” Dialogue: From Idea to Implementation
- 渡邊 絢夏
台湾におけるナショナル・アイデンティティ
—日本統治下における「台湾」の萌芽—
- 平沢 照雄
地方電球メーカーのスピンのアウトと事業展開
—秋田におけるSKY・AFC社の事例—
- ショリナ ダリヤゲル
非実用的学習環境における日本語教育の意味付け
—大学教師のライフストーリーから—

研究ノート

- 津城 寛文
来たるべき多言語世界における日本語の翻訳発信のために
- Elisa Ivana PELLICANÒ
Representing Japanese Hospitality: Takigawa Christel's Speech
for the 2020 Tokyo Olympics

筑波大学大学院 人文社会科学研究所国際日本研究専攻

ISSN 2186-0564

『国際日本研究』は、筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻により年に1回発行される、国際的視野を持った日本研究のジャーナルです。

本ジャーナルは、国際比較、国際学の観点から広義の日本研究領域（政治、経済、社会、メディア・情報研究、文化、言語学、言語教育、芸術、文学研究）に関する専攻内外の先端的な研究成果を公表することによって、開かれた議論を促進するために刊行されています。

『国際日本研究』を通じて、日本研究・日本語研究をはじめ、国際比較研究、国際学研究がさらに発展することを期待しています。

著作権について

本紀要・ウェブサイト (<http://japan.tsukuba.ac.jp/research/>) の掲載内容（著作者を明記した論文等を除く）に関する著作権は、筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻に帰属します。掲載論文等の著作権は著作者に属し、引用や使用許可を含む各論文等の内容に関する責任は著作者にあります。

国際日本研究 第十一号

〔編集委員会〕

タック 川崎 レスリー（編集長）

生藤昌子

ヴァンバーレン・ルート

関能徳

田川寛之

.....
2019年2月8日発行

編集・発行 筑波大学大学院人文社会科学研究科

国際日本研究専攻

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学大学院人文社会科学研究科国際日本研究専攻

TEL：029-853-4037

FAX：029-853-4038

Eメール：jiajs@japan.tsukuba.ac.jp

筑波大学
国際日本研究
第11号
2019(平成31)年2月

目次『印刷版』

論文

- Almas DISSYUKOV 1
“Central Asia Plus Japan” Dialogue: From Idea to Implementation
- 渡邊 絢夏 23
台湾におけるナショナル・アイデンティティ
—日本統治下における「台湾」の萌芽—
- 平沢 照雄 45
地方電球メーカーのスピン・アウトと事業展開
—秋田におけるSKY・AFC社の事例—
- ショリナ ダリヤゲル 61
非実用的学習環境における日本語教育の意味付け
—大学教師のライフストーリーから—

研究ノート

- 津城 寛文 73
来たるべき多言語世界における日本語の翻訳発信のために
- Elisa Ivana PELLICANÒ 89
Representing Japanese Hospitality: Takigawa Christel’s Speech for the 2020 Tokyo Olympics

目次『オンライン版』 ISSN 2189-2598

<http://japan.tsukuba.ac.jp/research>

研究ノート

- Bakhrom RADJABOV 99
A Critical Analysis of UNDP-Supported “Social Innovation”
Projects in Local Governance in Armenia, Ukraine and Uzbekistan
- Elyor A. MAKHMUDOV and Elmira A. ASHIROVA 121
Japan’s Practice in the Tourism Development of Uzbekistan:
Tourism Strategy in the Japanese and Uzbek Economies

レビュー・エッセイ

- Liliana MORAIS 139
Traditional Japanese Arts and Crafts:
Historical and Political Trajectories from the Meiji Period until Today

『国際日本研究』 投稿規定

(H 30. 2月改訂)

- (1)本紀要は、筑波大学大学院人文社会科学研究所国際日本研究専攻により発行され、国際比較、国際学の観点から行われる広義の日本研究領域（政治、経済、社会、メディア・情報研究、文化、言語学と言語教育学、芸術、文学研究等）の専攻内外の先端的な研究成果を公表することによって、開かれた議論を促進するために刊行される。
- (2)本紀要は、(1)の目的にかなう原稿、また本専攻の教育研究活動に資する原稿の投稿を受け付ける。
- (3)本紀要に投稿できる原稿は、以下のものとする。
 - ①未投稿・未発表の原稿。
 - ②口頭発表の要旨などをプリントしたものであり、その旨を明記した原稿。
- (4)他の学会誌、研究紀要等への投稿原稿と著しく重複する内容の原稿を本紀要に並行投稿することは、これを認めない。
- (5)本紀要に投稿できる原稿の種別は、以下のものとする。
 - ①研究論文：「研究論文」とは、新規性を有する研究を報告するものであり、その原稿は、序論、当該研究分野に関する文献及び当該研究に用いられた理論上の構成概念又は枠組みに対する批評、研究を行うために使用した方法、研究のデータ及び結果、そして分析結果及びその含意について論じた結論部分を含んでいることを要する。
 - ②研究ノート：「研究ノート」とは、研究論文のように厳密な構成の文書である必要はないが、学会誌の読者の目に新たな見解をもたらす、理論的な視点、研究計画又は方法論的アプローチを進展させることを試みるものであることを要する。
 - ③その他：書評論文、研究調査の内容を資料として提供するもの、教育研究活動についての報告、研究プロジェクトの報告、オーラルヒストリー（史・資料の紹介に重点を置きつつ、考察を加えたもの）等。
- (6)本紀要に投稿することができる者は、次の者とする。
 - ①大学教員（国内・外を問わない。投稿の際、所属・肩書、住所、電話番号、所属機関から発行されている投稿者のメールアドレス（Gmail などのフリーメール、自宅のメールは不可）が明記されていること。）
 - ②当専攻に所属する研究員、学生および修士、短期プログラム等に参加中もしくは参加経験のある学生
 - ③その他本紀要編集委員会が認める者
- (7)本紀要に投稿する者は、以下の責務を負う。
 - ①投稿者は、大学が定める CITI Japan、eL CoRE の e-learning 等の研究倫理教育を、最低5年ごとに受講する。但し、これらの e-learning 教育を受けることができない者は、これと同等の研究倫理教育を受講することで代替することができる。
 - ②投稿者は、iThenticate 等の論文剽窃検知ツールによりチェックを行い、投稿原稿に既存の著作との類似がないことを確認する。
 - ③投稿者は、投稿原稿に剽窃、データの捏造、改ざん、個人情報の不当な扱い等の不適切な作成方法が含まれていないという誓約書を提出する。
- (8)同一投稿者が複数の原稿を投稿することは、特に禁止しない。
- (9)原稿は、日本語または英語を使用し、ワープロ(A 4 サイズ)にて横書きで作成する。執筆は原則として執筆要領で指定した形式(国際日本研究専攻ホームページ参照)に合わせることにする。
- (10)日本語で執筆された原稿には、日本語と英語の双方で、

- 氏名、論文タイトル、プロフィール（所属・肩書）、要旨(300語程度の英文要旨および800字程度の和文要旨)、キーワード(日本語と英語各3～5語程度)を添付する。
- (11)原稿が共同執筆の場合には、本文末にそれぞれの執筆分担箇所を明記する。明記できない場合は、役割分担を明記する。
 - (12)英文原稿は英語母語話者のチェック、和文原稿は日本語母語話者のチェックを受けておくことが望ましい。
 - (13)一度提出した原稿の差し替えは原則として認めない。また、投稿原稿は返却しない。
 - (14)投稿原稿に対する査読は、以下の規定に従って行われる。
 - ①投稿原稿の全てについて査読を行い、本紀要編集委員会は、査読者の意見を考慮して、投稿者に原稿の加筆・修正を求めることができる。
 - ②査読者は、投稿原稿1件について2名以上とし、当該原稿が該当する研究分野を専門とする者とする。
 - ③査読は、本紀要編集委員会が、原則として人文社会系構成員に対して依頼する。人文社会系構成員に適任者がいない場合には、人文社会系以外の教員又は学外者に対して、国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長が依頼する。
 - ④査読者は、査読結果について、国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長に報告する。投稿原稿に不適切な作成方法が含まれている疑いがあると判断する場合は、その旨を国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長に報告する。
 - ⑤本紀要編集委員長は、採否及び加筆・修正の要求についての査読結果を、その理由を付して投稿者に通知する。個々の査読者の判定結果及び査読者の氏名は、投稿者に対して通知しない。
 - ⑥投稿者は、査読結果について、別途定める手続きにより、本紀要編集委員長に不服申立てをすることができる。
 - (15)投稿原稿の採録、条件付き採録または不採録に関する裁定は、査読結果に基づき、本紀要編集委員会が行う。投稿原稿の採否について査読者の意見が分かれた場合、国際日本研究専攻長及び本紀要編集委員長は、別の査読者に査読を依頼し、本紀要編集委員会が最終的に採否を決定する。
 - (16)採録決定者は、査読結果に関する通知を受けた後、入稿用の原稿を作成し、電子ファイルをメール添付で指定された日時までに提出する。
 - (17)『国際日本研究（印刷版）』に掲載された原稿の著者には、『国際日本研究（印刷版）』紀要2冊を配布する。また、『国際日本研究』の印刷版またはオンライン版に掲載された原稿は、筑波大学つばりポジトリ等で電子化され、保管され、本専攻のHPにおいても、PDF形式で公開される。
 - (18)発行回数は年1回以上とする。紀要別冊を設ける場合もある。

原稿提出先・問い合わせ先

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学大学院人文社会科学研究所国際日本研究専攻
『国際日本研究』紀要編集委員長宛
jjajs@japan.tsukuba.ac.jp

※原稿募集および執筆要領については、以下のウェブサイトをご参照ください。

<http://japan.tsukuba.ac.jp/research/>

Journal of International and Advanced Japanese Studies

Submission Guidelines

(Revised February 2018)

1. The *Journal of International and Advanced Japanese Studies* is published by the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. The *Journal* aims to promote open debate through publishing the results of leading research in Japanese Studies and welcomes submissions from the perspectives of cross-national and international studies (encompassing politics, economy, society, media and information studies, culture, linguistics and pedagogy, the arts, and literature).
 2. Manuscripts that contribute to the purpose outlined above and to the Programs' educational practice and research activities will be considered.
 3. The following manuscripts will be considered for publication:
 - A) Unpublished manuscripts that are not being under review elsewhere.
 - B) Manuscripts that are clearly identified as based on oral presentations.
 4. Manuscripts that significantly overlap in content with those submitted to other academic journals or research bulletins will not be accepted.
 5. The following types of manuscripts will be considered:
 - A) Research Articles: A "research article" is a fully structured academic paper that reports on original research. The manuscript must include an introductory section, a critical review of the literature in the field and any theoretical constructs or framework used in the research, the method(s) employed to undertake the research, the data/results of the research, and a concluding section discussing the findings and implications.
 - B) Research Notes: In terms of content and structure, a "research note" may differ from a research paper. However, it should attempt to advance a new idea, theoretical perspective, research program, or methodological approach.
 - C) Other papers: Review articles, research survey reports, reports on educational or research activities, research project reports, and oral histories (with a focus on introducing and discussing historical and factual materials), etc.
 6. Those who are eligible to submit to the *Journal* are as follows:
 - A) University-affiliated faculty members (in Japan and abroad); contributors must provide their affiliation, title, phone number, and institutional email address. In order to confirm affiliation, free email addresses such as Gmail and private email addresses are not acceptable.
 - B) Researchers, students, and short-term program students who are affiliated with the Programs or alumni of the Programs.
 - C) Other contributors as deemed eligible by the editorial committee.
 7. Authors intending to submit manuscripts for consideration by the *Journal* have the following responsibilities:
 - A) Authors must demonstrate that they have taken an educational course on research ethics, such as those provided online by the University of Tsukuba that include CITI Japan and eL CoRE, within the past five years. Those potential authors who are unable to take the University of Tsukuba's online research ethics courses are allowed to submit proof that they have taken one or more equivalent courses.
 - B) Authors must undertake the task of checking their manuscripts with anti-plagiarism software (such as iThenticate) to confirm that the content of their submission does not significantly overlap with that of previously published research.
 - C) Authors must be prepared to attest that their manuscripts are not plagiarized, that the data referred to within the manuscript has not been falsified, and that there has been fair and legal treatment of any collection of personal and identifiable data.
 8. There is no limit as to the number of manuscripts that may be submitted.
 9. Manuscripts must be written in either Japanese or English and formatted for A4-size paper using word processing software. Manuscripts are required to follow the formatting guidelines that are available on the Program's website.
 10. Each manuscript must be submitted with a cover sheet that includes: (1) Author(s) name(s), (2) Paper title, (3) Affiliated institution(s) and title, (4) Abstract (about 300 words in English or about 800 characters if written in Japanese), and (5) Keywords (3 to 5 words or character combinations).
 11. Co-authored manuscripts should include a statement as to the contribution by each author (pages or sections) or, if difficult to specify pages, note the contributions of each author at the end of the manuscript.
 12. Prior to submission, it is highly recommended that English-language manuscripts be checked by a native English speaker and Japanese-language manuscripts be checked by a native Japanese speaker.
 13. In principle, originally submitted manuscripts may not be replaced by updated versions, and submitted manuscripts will not be returned.
 14. Submitted manuscripts will undergo the following peer review process:
 - A) The Editorial Committee will review all manuscripts and may ask authors to supplement or revise the content of their manuscripts, taking into consideration the opinions of the peer reviewers.
 - B) Each manuscript will undergo a peer review process by at least two peer reviewers who are specialists in the academic field appropriate to the content of each manuscript.
 - C) In principle, the Editorial Committee will request reviews from researchers affiliated with the Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. If necessary, the Program Chairs of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and the Editorial Committee will request reviews from researchers affiliated with other programs within the University of Tsukuba or from researchers affiliated with educational institutions outside the University of Tsukuba.
 - D) Peer reviewers will report the results of the peer review process to the Program Chairs of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and the Editorial Committee. Any issues that may arise concerning inappropriate creation methods (including plagiarism, data falsification, or breaches in the handling of personal and identifiable information and/or data) will be reported to the Program Chair of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and the head of the Editorial Committee.
 - E) The head of the Editorial Committee will inform the author(s) of the decisions of the peer review process, as well as reasons for acceptance, amendment, or rejection. Neither individual peer reviewers' results nor their names will be communicated to the authors.
 - F) Authors may appeal the results of the peer review process to the head of the Editorial Committee through a separate set of procedures.
 15. Decisions as to acceptance, conditional acceptance, or rejection, based on the results of the peer review process, will be made by the Editorial Committee. In cases where there is non-agreement between peer review results, the Program Chairs of the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies and/or the head of the Editorial Committee may request further peer reviews of the manuscript under consideration. The final decision as to acceptance, conditional acceptance, or rejection will be. Inclusions of other manuscripts will be decided by the Editorial Committee.
 16. Authors whose papers have been accepted for the *Journal* must prepare the manuscript for publication and submit it through email by the due date designated by the Editorial Committee.
 17. The authors of the papers appearing in a volume of the print edition of the *Journal* will receive two copies of the volume. In addition, papers published in both the print edition and online editions of the *Journal* will be stored electronically in the Tsukuba Repository (University of Tsukuba Library). The papers will be also available in PDF format on the Program's website.
 18. The *Journal* is published at least once per year. Supplements may also be published.
- Address for submissions and/or inquiries: Editorial Committee
Journal of International and Advanced Japanese Studies
Master's and Doctoral Programs in
International and Advanced Japanese Studies
Graduate School of Humanities and Social Sciences
University of Tsukuba
Tennodai 1-1-1, Tsukuba-shi, Ibaraki-ken,
JAPAN 305-8571
jjajs@japan.tsukuba.ac.jp

* For the CFP and Formatting Guidelines, please refer to our website: <http://japan.tsukuba.ac.jp/research/>

Article

“Central Asia Plus Japan” Dialogue: From Idea to Implementation

Almas DISSYUKOV

University of Tsukuba, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Ph.D. Student

To date, the issue of multilateral cooperation between Japan and Central Asian countries has not been widely covered by the international academic community. Indeed, the absence of this particular research casts doubt on the existence of initial publications about the presence of a full-fledged Japanese foreign policy strategy in Central Asia. Nowadays, in a narrow sense, the “Central Asia plus Japan” dialogue is the only dialogue platform between Japan and Central Asia. The dialogue is also a unique example of how Japan and the Central Asian republics cooperate on critical issues of the regional and international agenda.

The present article is aimed at evaluating the current role of the “Central Asia plus Japan” dialogue from the Japanese perspective. The goal is to examine the activities of the dialogue from 2004 to 2018, starting with key stages in the formation of Japanese strategy towards Central Asia (1991–2018), including those that led to the creation of the dialogue.

Constructivism is the primary theoretical framework used in this thesis, drawing on the sub-theory of “conference diplomacy” for a more in-depth analysis of the dialogue as a communication mechanism. The research questions were answered by the author using discourse analysis and desk research of relevant documents belonging to the dialogue, including speeches, presentations and outcome documents. In addition, the author conducted several interviews with former officials and scholars who directly participated in the dialogue’s formation.

The uniqueness of the present work lies in the fact that the case of the “Central Asia plus Japan” dialogue has not been considered before in such detail. This study helps reveal the essence of the dialogue, including its principles and *modus operandi*. The author also could trace the process of the transformation of the dialogue and its perception from the Japanese perspective. Through this, the author found specific “norms” which guide the multilateral nature of Central Asia–Japan cooperation.

Keywords: “Central Asia+Japan” Dialogue, Central Asia, Japanese Diplomacy, Japanese Foreign Policy, Conference Diplomacy

Introduction.

Currently, Japan’s foreign policy is undergoing a noticeable upsurge. After 2012, the incumbent Prime Minister of Japan Shinzo Abe has primarily revived the political and academic debate on the further role of the Japanese foreign strategy. Even though Abe mainly focused on Japan’s closest allies and neighbors, including the United States (US), China (PRC), Russia, North and South Korea, and Southeast Asia, his efforts led to the expansion of Japanese diplomacy in other essential directions. Central Asia, which is located between Russia and the PRC, is not the last in this process. In October 2015, Abe became the first Prime Minister in the modern history of Japan, who visited all five countries of the region. During his speech at the Nazarbayev University,

in Kazakhstan, Abe proclaimed new messages that aimed at further development of Central Asia–Japan cooperation, i.e.: (1) “drastic” strengthening of relations; (2) Japan’s active involvement in efforts to address universal for the region challenges; (3) deepening partnership in the global arena (2015). At the same time, speaking about the role of Japanese initiative—the “Central Asia plus Japan” dialogue (after this–dialogue)–Abe pointed out that Tokyo would continue to play the role of a catalyst in this process. However, it must be admitted that the assessment and forecasts regarding the further role of Japan in the region are impossible without a comprehensive analysis of the current volume of multilateral cooperation.

The first official strategy of Japan on Central Asia appeared in 1997 under the administration of Ryutaro Hashimoto, who initiated the launch of so-called Eurasian diplomacy. Moreover, Hashimoto (1997) also dubbed the countries of Central Asia and the Caucasus as the “Silk Road region” and identified three key pillars of Japan’s cooperation with the region, namely: (1) development of a political dialogue; (2) economic cooperation; (3) interaction for peace. Despite the serious differences in assessing the goals and objectives of the strategy, this step helped to consolidate the importance of the Central Asian effect in Japan’s foreign policy.

The new strategic direction was further developed under the administration of Junichiro Koizumi, mainly thanks to the efforts of his Foreign Ministers, Yoriko Kawaguchi and Taro Aso; the Minister of Economy, Trade and Industry Akira Amari; and other politicians. During her visit to Central Asia in the summer of 2004, Kawaguchi initiated the creation of the “Central Asia plus Japan” dialogue, which is still viewed by many experts as an important element of Japanese engagement into regional affairs. In August 2019, this initiative will celebrate its fifteenth anniversary, which demonstrates its important role and longevity in the process of building Central Asia–Japan partnership. Moreover, a number of experts (Tanaka, 2018; Kawato, 2018; Starr 2017) believe that the dialogue had played a unique historical role for Central Asia as a prototype for posterior dialogue platforms with the Republic of Korea (ROK), the European Union (EU), and other international partners. Accordingly, the dialogue acts as “knowledge,” which Central Asian countries use today in their diplomatic craft.

Nevertheless, it must be acknowledged that many of the works devoted to the dialogue are related to its initial stage. There were significant changes in Japanese domestic politics, namely the change of the ruling parties in 2009 and 2012, which to some extent affected Japan’s foreign policy. Despite such peripeteia, the dialogue continued to function and produce informative documents that have not been completely studied until now. From time to time, independent authors have used fragments of the dialogue-related activities in their publications, which, by-turn, only lead to a limited and sometimes subjective evaluation of the process.

With this article, the author intends to demonstrate an important facet of Japan’s relations with Central Asia, i.e. to reveal the essence of Tokyo’s multilateral approach. In fact, the author scrutinizes the content of the multilateral cooperation between Japan and Central Asia and already existing outcomes. As a result, the author attempts to assess activities and transformation of the dialogue since its inception in 2004. Based on Kaufman’s “Conference diplomacy” (1996), the author has attempted to understand the structural changes in the framework of the dialogue and relate it to relevant domestic and international events, while clearly defining the principles, norms, and identities that determine and influence Japan’s multilateral stance on Central Asia. The study is built on the following research questions: 1) What lies behind the idea of creating a dialogue? 2) What is the role of the dialogue in the Japanese foreign policy? 3) What are the unique features of the dialogue? Is the dialogue a capable platform for communication between Japan and the region?

Further, after reviewing all previously published documents about the dialogue, the author analyses the formation and launch of the dialogue, based on multilateral cooperation between Japan and Central Asia. Next, comes a detailed overview of dialogue’s structure and its content. After receiving specific empirical data, the author proceeds to an analysis of the dialogue and its strengths and weaknesses.

1. Theoretical framework and literature review

At present, there are many academic and analytical publications devoted to political, economic, military and even ideological aspects of Japan's foreign policy. Thanks to the efforts of individual authors, Central Asia occupies its unique place in the study of Japanese diplomacy and its basic approaches and values. The main flow of these publications related to the perception of the Central Asian vector through the prism of Japan's relations with Russia, the PRC, the US and the EU. In this context, the reader can imagine the role of Central Asia in Japan's foreign policy strategy, as well as learn about further cooperation opportunities. Thanks to such authors as Dadabaev (2014, 2016), Kawato (2008), Komatsu (2004), Len (2008), Uyama (2008), Tsunozaki (2007), Yuasa (2007, 2008), and others, readers can become well informed about Japanese political and economic interests in the Central Asian region and familiarize themselves with those unique strategies and methods that Tokyo employs to achieve its goals in Central Asia.

Almost all authors stressed the role of the "Central Asia plus Japan" dialogue, which was created three years after the 9/11 events. At the same time, the analysis of these publications shows that the detailed assessment of the dialogue's activities was carried out only at the initial stage of the forum's creation. The authors were most interested in the transformation of Japanese foreign policy in Central Asia in the early 2000s, as well as the choice of the current form of the dialogue. Such authors also make frequent comparisons between the dialogue and the Shanghai Cooperation Organization (SCO), which, unfortunately, do not consider such critical criteria as their legal status, membership, founding documents, and organizational structure.

Yuasa (2007) indicates in his work several unique factors that significantly contributed to the formation of the dialogue's ideas through early attempts of the Hashimoto administration to develop a multilateral approach towards Central Asia. Former Japanese Ambassador to Uzbekistan, Kawato (2008), also contributed to the description of the dialogue's creation based on his memories. In addition, he identified several important factors, e.g. the lack of support from the side of the Prime Minister's Office and the National Diet, which resulted in the dialogue's low profile. Contrariwise, the former Japanese Ambassador to Kazakhstan, Toshio Tsunozaki (2007), gives an exceptionally positive impression of his participation in the launch of the dialogue. Another author, Len (2008), identified a year of dialogue's establishment as a starting point for a new period in Central Asia-Japan relationship. At the same time, Len raises critical issues in front of readers that can indicate the dialogue's possible politicization and its deliberate inefficiency. On the other hand, Uyama (2008) highlights the importance of the dialogue and the non-confrontational efforts of the Government of Japan towards Central Asia. Dadabaev (2014) also pays considerable attention to the process of the dialogue's formation. He is one of those rare authors, who argue about the direct link between the dialogue and other multilateral dialogue mechanisms in Japanese diplomatic practice. However, he avoided detailed comparison or in-depth study of such platforms. In his other work, on the foreign policy of the Central Asian countries, Dadabaev (2016) provides a detailed analysis of numerous strategies and initiatives that Japan successfully use in the region. Curiously, this time the author mentions the dialogue less frequently; briefly covering it during the comparison of China/Japan foreign policy approaches and Japanese assessments of possible water-related inter-action in Central Asia. Among young researchers, who showed great interest in this initiative, it is worth to mention the doctoral thesis of Mahmudov (2017) that covers the dialogue analysis in a broader sense, based on interviews with direct participants of the dialogue meetings. At the same time, the author takes a critical stance on the dialogue's expediency.

The use of constructivism as a theoretical framework makes it possible to reveal behavior, beliefs, practices and values of Japan and the Central Asian nations in the framework of a specific initiative with high geopolitical contour. Therefore, the academic community obtain additional data on the identities of Japan and the Central Asian countries, as well as norms that identify their behavior in the framework of a joint multilateral platform.

During the interviews with numerous participants of the dialogue's creation, including Kawaguchi, Tanaka, Kawato and others, the Japanese speakers repeatedly noted that the idea of the dialogue was built on the basis of Japan's fruitful cooperation with the Association of Southeast Asian Nations (ASEAN), a model close to ASEAN Plus Three (after this—APT) format. The author was also interested to know how Japanese experts see the Japanese role in the framework of the APT and Japan's relations with the Association.

A concept of the conference diplomacy regime for ASEAN was first proposed in 2003 by the Japanese author Sato in his book, "The ASEAN Regime: Development and Challenges of the ASEAN Foreign Policies." Other scholars of ASEAN–Japan relations also supported this approach. This new approach, based on the original idea of "conference diplomacy" (Kaufman, 1996) and its posterior applications, was applied for Central Asia–Japan studies for the first time. To avoid inaccuracies during the research process, the author relied exclusively on original Japanese documents, using English and Russian texts for comparison only. The author also used the opportunities provided by the Foreign Ministry of Japan (MOFA) to participate in the meetings of the Tokyo Intellectual Dialogue (TID) and Working Group (WGM) in 2018.

2. The way to the dialogue's creation

Twenty-eight years have passed since Japan recognized the independence of the Central Asian countries. During this period, the countries of the region and Japan were able to establish close relations and create various mechanisms of bilateral cooperation. Nevertheless, the "Central Asia plus Japan" dialogue is the first and so far the only instrument of their multilateral cooperation in a narrow format.

The author believes that the prerequisites for the formation of this tool appeared long before its actual emergence, and that it marched in step to the development of Japan's bilateral relations with Central Asia. As it turned out, prior to 2004, Japan had initiated large-scale international conferences that were directly related to different challenges for Central Asia's sustainable development.

In October 1992, Japan organized the Tokyo Conference on Assistance to the New(ly) Independent States, which brought together representatives of 70 countries and 20 international/regional organizations (IO/ROs). This meeting was held eight months after a similar conference in the United States. As a result of these meetings, Japan began to provide technical assistance, humanitarian aid, and to promote economic relations with the countries of the former USSR on the "help for self-help" basis (Miyazawa, 1992). In September 1999, two years after the launch of the Eurasian Diplomacy, Japan organized the Tokyo International Conference on Semipalatinsk, which brought together representatives of 24 countries and 12 IOs, and was designed to help Kazakhstan in its efforts to deal with the consequences of nuclear testing on the territory of former Semipalatinsk Nuclear Test Site, located in eastern part of Kazakhstan. In January 2002, one of the first for Japanese conferences on Afghan issues—The International Conference on Reconstruction Assistance to Afghanistan—was hosted by Tokyo.

In 1999, a group of well-known Japanese scholars submitted the report "Challenge 2001–Japan's Foreign Policy Toward the 21st Century" to the leadership of the Japanese Foreign Ministry. This report highlighted the importance of strengthening the mechanisms of diplomatic frameworks, including the creation of new frameworks for building a safe and prosperous world.

In 2002, the Prime Minister's Task Force on Foreign Relations recommended the Japanese Government include Central Asia and the Caspian Sea countries in the priority list of its Official Development Assistance (ODA) in order to support projects aimed at the regional integration. The task force also pointed out the importance of pursuing Japan's foreign policy in accordance with national interests based on such notions as: (1) the maintenance of the peace and security of Japan; (2) the maintenance of the free trade system; (3) protection of democratic values; (4) people-to-people exchanges and (5) the development of human resources.

Until 2004 before the dialogue was actually established, the Japanese Government initiated numerous

diplomatic frameworks for various organizations and countries, including the EU (1991), the North Atlantic Treaty Organization (NATO) (1993), the Central American states (1995), the Southern Common Market (MERCOSUR) (1996), ASEAN (1997), China and the ROK (1999), the Organization for Security and Cooperation in Europe (OSCE) (2000), the Caribbean Community (CARICOM) (2000), countries of the Islamic world (2002), the Andean Community (2002), and Arab States (2003).

The presence of such a colorful set of frameworks suggests that Japan had a substantial experience of interacting with these groups in a more extended format. The choice of dialogue partners was determined by the political (e.g., NATO, OSCE) and economic interests (e.g., MERCOSUR, CARICOM) of Japan. Moreover, given the fact that Japan has observer status among a large number of IOs and ROs, these frameworks allowing Tokyo to monitor and analyze specific developments in various parts of the world. An analysis of the internal content of these mechanisms suggests that Japan does not have the "one-size-fits-all" model that Tokyo applies to its partners. It indicates that Japan is flexible in this matter, although this can also be dictated by the specific interests of Japan and possible restrictions for external partners. For example, in 1981, Japan and ASEAN established a new international organization in Tokyo—the ASEAN Promotion Center for Trade, Investment and Tourism (ASEAN–Japan Center)—in order to jointly solve different economic issues. In 2011, Japan, China, and the ROK launched the Trilateral Cooperation Secretariat in Seoul (South Korea).

According to Kawato (2008; 2018), the dialogue's idea was first presented during a joint meeting of Japanese Ambassadors accredited in Central Asia and the leadership of the MOFA's European Bureau in Tashkent, Uzbekistan in September 2003. Tsunozaki, the Japanese Ambassador to Kazakhstan, and Kenji Shinoda, then Deputy Director General of the European Bureau, presented this idea together. At that time, Japanese Foreign Ministry officials considered several options that included the possible participation of Japan in the activities of the SCO or the Organization of Central Asian Cooperation (CACO). The first option was unlikely due to the absence of other Western powers in the SCO. In 2004, during the CACO business forum in the city of Almaty, in Kazakhstan, Tsunozaki announced Japanese interest in establishing direct contact and cooperation programs with the CACO, i.e. in water, energy and transport sectors. However, this option lost its attractiveness after Russia's accession to the CACO in the same year. Finally, the "Central Asia plus Japan" dialogue on the APT model turned out to be the most acceptable solution for Japan. Apparently, the launch of a new initiative could not take place at all, which again indicates the uniqueness of the decision made by Japan.

Yuasa (2008) indicates that the process of the dialogue's formation was connected with numerous messages from the so-called "epistemic community," especially academic circles, as well as representatives of the Central Asian countries to create an interactive platform for Central Asia–Japan communication. In March 2003, the Japan Institute of International Affairs (JIIA) published a report, "Development of New State of Affairs in Central Asia." In the document, Japanese scholars mentioned the necessity in a new strategy for Central Asia, e.g. during a possible visit of the Prime Minister of Japan to Central Asia. According to Sudo (1998), who is a prominent scholar on ASEAN–Japan relations, the Fukuda doctrine, which was indicated in the aforementioned report as a model concept, in fact, was "the first Japanese policy initiative that identified ASEAN as the most important direction (of its foreign policy)."

Yuasa also notes that the Foreign Ministry officials played the central role in this process. However, the chief author of the dialogue idea, former Japanese Foreign Minister Kawaguchi (2017) pointed out that the original idea was born after her meeting with Tetsuji Tanaka in the summer of 2003. As a result of their meeting, the question arose about the appropriate form of new Central Asia–Japan cooperation dialogue. As a result, the MOFA staff was responsible for the practical implementation of the new task.

Kawaguchi's choice in favour of Tanaka as a main interlocutor for discussing the Central Asian theme was surprising. However, this step could be related to Tanaka's professional background, i.e. his former affiliation to the Bank of Japan and his personal contacts with the Central Asian government officials as their personal advisor. Before taking up the post of the foreign minister, Kawaguchi had extensive working experience in the

Ministry of International Trade and Industry (now the Ministry of Economy, Trade and Industry), the World Bank, and the private sector. During the interviews, Kawaguchi and Tanaka focused mostly on economic issues that led to the dialogue's creation. Tanaka (2018) also designated Kawaguchi's work history as an essential element in the dialogue's success at the initial stage. Kawaguchi also noted that the dialogue's formation was lean on two notions, i.e. regional cooperation and economic development. Such emphasis was related to the desire to promote the development of projects that would advance intra-regional cooperation and economic prosperity of the region. In this connection, the author is convinced that the "economic" factor was one of the main pillars behind the dialogue's creation.

According to Kawato (2008; 2018), the final idea was first presented to the Uzbek Foreign Minister Sodik Safoyev during his visit to Japan in December 2003. After that, Japanese plans was also discussed with representatives of other Central Asian countries. In March 2004, the MOFA hosted a symposium, "The Current State and Future of Regional Cooperation in Central Asia." During the event, Parliamentary Vice Minister Isao Matsumiya stressed the importance of reviewing the Japanese strategy in Central Asia. He also hinted about the formation of a new strategic approach towards Central Asia.

According to Kawaguchi, the timing of the meeting was chosen as a result of her informal conversation with the then Foreign Minister of Kazakhstan Kassym-Jomart Tokayev at the Asian Cooperation Dialogue's (ACD) meeting in China in 2004. Tokayev proposed to organize the meeting around the time of the CACO Foreign Ministers' gathering in Astana in August 2004. Tokayev also promised Kawaguchi to discuss the date with his Central Asian colleagues. Dadabaev notes (2016:22) that Japan has decided to present the initiative in Uzbekistan before the first official meeting in Astana, taking into account the competition between Uzbekistan and Kazakhstan for regional dominance. These facts also indicate that the Japanese side treats their reputation and attitude towards the Central Asian countries very carefully.

During her visit to Uzbekistan in 2004, Kawaguchi issued a statement on the Japanese strategy in Central Asia at the University of World Economy and Diplomacy. She highlighted the importance of the Central Asian region for global security, as well as lack of "selfish goals" in Japanese attitude to Central Asia. Since the adoption of Eurasian diplomacy, Japan and the Central Asian countries have been able to demonstrate significant changes in the nature and scope of their cooperation and in their level of cultural understanding. As was mentioned by Mme. Kawaguchi, Japan is a "natural partner" for Central Asia.

In addition, Kawaguchi noted significant prospects for collaboration in the field of social and economic cooperation, including in the area of human resources development, energy, environment, etc. As a result, Kawaguchi proposed the creation of a dialogue as a "new dimension" and an "option for cooperation" based on principles such as "respecting diversity, competition, and coordination, and open cooperation." The author's analysis of bilateral mechanisms shows that in 2004 not all countries had a current set of bilateral dialogue mechanisms like the Parliamentary Friendship League or the Joint Economic Cooperation Commission. At that time, these facts gave the dialogue a deeper meaning in the eyes of the Central Asian politicians and diplomats.

The emphasis in Kawaguchi's speech was focused on the development of intra-regional economic integration in Central Asia on the ASEAN-based experience. Thus, Japan demonstrated its interest in maintaining the principles of intra-regional cooperation close to the CACO spirit, as well as their perception of Central Asia as an integral region. In addition, Kawaguchi expressed hopes that one day Afghanistan could also join the process.

The first official meeting of Central Asia–Japan foreign ministers (first FMM) was held on August 28, 2004 in Astana. However, the Turkmenistan delegation was presented at the level of Ambassador. Later, it becomes clear that Japan would negatively react on the low level of Central Asian participation. Nevertheless, according to the former Director General of the European Bureau Komatsu (2004), participation of the Turkmen side was considered as demonstration of support to the initiative.

Japanese Ambassador to Kazakhstan Tsunozaki (2007) notes in his memoirs that all participants of the first

meeting welcomed the initiative. One of the main outcomes of the meeting was determination of the forum's goals in such dimensions as security, democratic development, socio-economic growth, and close cooperation in addressing regional and global issues.

The review of Central Asia–Japan membership in various IO/ROs prior to 2004 shows that the opportunities for their multilateral cooperation were noticeably limited. For example, some countries were less presented in various organizations such as the ACD, the Asia-Europe Meeting (ASEM), the International Criminal Police Organization (INTERPOL), the International Renewable Energy Agency (IRENA), and the World Trade Organization (WTO). These facts could also indicate a desire of the Japanese side to promote Central Asia–Japan multilateral contacts and projects in a more systematic way.

In December 2004, Kawaguchi, as the Special Advisor to the Prime Minister of Japan, took part in the twelfth Ministerial Council (MC) of the OSCE in Sofia, Bulgaria. An additional meeting among the representatives of Japan and the Central Asian countries was held on the MC margins to discuss the working moments of the first FMM. This meeting was also the first and only meeting among the dialogue participants in the framework of major international forums.

During her speech at the OSCE event, Kawaguchi presented the "Central Asia plus Japan" dialogue and urged her European colleagues to jointly assist Central Asian efforts in such fields as combating international terrorism, drug trafficking, water issues, environmental problems, development of transport communications, and energy. This message could be also linked with previous Japan–OSCE experience, including based on their joint conference "Comprehensive Security in Central Asia–Sharing OSCE and Asian Experiences," which was held in Tokyo in December 2000. It is noteworthy that two years after the launch of the dialogue, in April 2006, the fifteenth Japan–EU Summit led to the launch of a separate dialogue on Central Asia, based on a similar Japan–EU framework *vis-à-vis* the East Asia region. In addition, Kawaguchi (2018) mentioned that she also made a similar appeal during her working meetings with representatives of the U.S. Department of State. This approach also mirrors the ideas of Ambassador Kawato, who, during the process of the dialogue's creation, believed that Japan could initiate the creation of a multilateral platform in Central Asia close to the example of the Conference on Security and Cooperation in Europe (CSCE).

One notable feature of this period was the lack of proper attention among Japanese media to the outcome of the first FMM. Analysis of publications and interviews relates it to the fact that Kawaguchi refused to use such a traditional tool for Japanese diplomacy as the "chequebook diplomacy" during her trip to Central Asia. Nevertheless, Tanaka, Kawato, and others (2018), who wished to remain anonymous, pointed out that the Japanese Foreign Ministry was impressed by the overestimation of the results of Kawaguchi's visit by Russian and Chinese media.

3. Transformation of the dialogue

During the fourteen years of its existence, the dialogue was able both to achieve significant results and miss several unique opportunities for its further development. In order to understand this process more precisely, the author has divided it into several stages, selecting FMMs as the starting point of each stage.

(1) Step one

According to Figure 1, the first structural elements of the dialogue appeared in the interval between the first and second ministerial meetings. They include the meetings of Senior Officials (SOM) and the Tokyo Intellectual Dialogue (TID). The intermediate meeting that was held in Bulgaria in 2004, after the first FMM, is not included in the timeframe due to the low level of reference to it.

According to the Diplomatic Bluebook of the Japanese Foreign Ministry (2006:101), the first SOM was held in Tashkent, Uzbekistan in 2005. At that event, the participants agreed on the main areas of cooperation, namely: (1) politics; (2) intra-regional issues (counterterrorism, drugs, mines, poverty eradication, medical assistance

Figure 1. Timeline of the “Central Asia plus Japan” dialogue-related events

1 FMM (28.08.2004, KZ)	2 FMM (05.06.2006, JP)	3 FMM (07.08.2010, UZ)	4 FMM (09.11.2012, JP)	5 FMM (17.07.2014, KG)	6 FMM (01.05.2017, TM)
1 SOM (04.03.2005, UZ)	3 SOM (13.12.2007, TJ)	6 SOM (01.12.2011, JP)	7 SOM (22.10.2013, KG)	9 SOM (04.03.2015, JP)	12 SOM (26.01.2018, TJ)
2 SOM (08.02.2006, KZ)	4 SOM (07.2008, UZ)		8 SOM (18.03.2014, JP)	10 SOM (24.11.2015, TM)	13 SOM (26.11.2018, JP)
	5 SOM (07.2010, UZ)			11 SOM (25.03.2016, JP)	
1 TID (30.03.2006, JP)	2 TID (30.01.2007, JP)		5 TID (15.03.2013, JP)	7 TID (27.03.2015, JP)	11 TID (03.07.2018, JP)
	3 TID (20.02.2009, JP)		6 TID (18.03.2014, JP)	8 TID (02.03.2016, JP)	
	4 TID (25.02.2010, JP)			9 TID (28.09.2016, JP)	
				10 TID (31.03.2017, JP)	
		1 EF (26.07.2011, JP)		1 BD (28.02.2017, JP)	2 BD (23.03.2018, JP)
			1 WGM (13.02.2014, JP)	2 WGM (19.12.2014, JP)	4 WGM (20.02.2018, JP)
				3 WGM (04.02.2016, JP)	
			FMEP (12.2013, JP)	FMEP (13-20.11.2014, JP)	
				FMEP (21-28.01.2016, JP)	

(Note: FMM–Foreign Ministers Meeting, SOM–Senior Officials Meeting, TID–Tokyo Intellectual Dialogue, EF–Economic Forum, WGM–Working Group Meeting, FMEP–Foreign Ministries’ Exchange Program, BD–Business Dialogue; KZ–Kazakhstan, UZ–Uzbekistan, TJ–Tajikistan, KG–Kyrgyzstan, TM–Turkmenistan, JP–Japan).

and healthcare, environment, water, energy, trade and investment, transportation); (3) business promotion; (4) intellectual dialogue; and (5) socio-cultural exchanges. The first meeting of the TID was held in Tokyo in 2006 with support from the Nippon Institute for Research Advancement (NIRA), an organization that also helped the government to host the Japan-OSCE Conference in 2000. At the first TID, it was suggested that the Track II meetings should be held once a year.

The meeting made it possible to identify new areas for multilateral cooperation, e.g. cross-border infrastructure and tourism. In addition, the participants were able to discover initial limitations in the dialogue’s activities. According to Akiko Fukushima (2006), the first TID was focused on the importance of systematic and realistic cooperation, i.e. based on the limited participation of the Central Asian states in promising projects. In 2007, during the second TID, participants also highlighted the importance of in-depth discussions of regional problems and possible projects with pronounced regional effect.

In order to strengthen economic cooperation, it was also proposed to establish a Joint Committee on business

matters between Japan and Central Asia under the aegis of the dialogue. Moreover, the Senior Vice Minister for Foreign Affairs of Japan Yasuhisa Shiozaki used the term "catalyst" for the first time to describe the Japanese role in the dialogue. This fact demonstrates the transformation of Japan's role from being the "natural (equal partner)" (Kawaguchi) to being a catalyst (Shiozaki), which is closer to such concepts as "intermediary" or "conductor".

(2) Step two

The second FMM was held in June 2006 in Tokyo. This meeting became significant due to a detailed discussion of the further role of the dialogue.

First, the foreign minister of Afghanistan attended the meeting for the first time as a guest/observer. This has been the case when the official representative of a third country participated in the dialogue. In addition, in the 2007 Diplomatic Bluebook, the possibility of the dialogue expansion at the expense of Afghanistan and Pakistan was noted. As we can see later, the Afghan issue would be raised regularly in agendas and outcome documents of the subsequent meetings.

Next, following the second FMM, a comprehensive Action plan was adopted, and it determined the main direction of the dialogue activities. Despite the absence of a well-defined timeframe, the action plan continues to be one of the most significant documents of the dialogue. It covers five basic tenets of the dialogue and ten most promising areas of cooperation that were agreed during the first SOM. Despite the several important for Japan-Central Asia cooperation dates, e.g. the tenth anniversary of the dialogue (2014), the twentieth anniversary and the twenty-fifth anniversaries of the establishment of Central Asia–Japan diplomatic relations (2012 and 2017), the dialogue participants missed these unique opportunities to strengthen the basic principles and goals of the dialogue.

In addition, the second meeting gave significant impetus to the institutionalization of the dialogue. However, many of these achievements remain on paper only. For example, the Action Plan includes an appeal to consider the possibility of holding the first Summit. Traces of this issue can be found later, in the 2009 parliamentary statements of the Japanese Foreign Ministry officials, but most of them merely confirm Tokyo's interest in this specific event. During the interviews, many of speakers excluded the possibility of holding such a meeting under the current geopolitical conditions.

Participants have also proposed the establishment of a Working Group on Economics (WGM) to study regional projects and the participation of public and private institutions. It could be said that the WGM has become the counterpoint solution to the previous ideas on a joint economic structure within the dialogue. However, it is evident that the WGM could not advocate for the development and implementation of high-profile economic projects due to limited status of the Group as a structural unit. Moreover, the first WGM was organized in 2014, and up to this day only four meetings have been held. The Action Plan supported the proposal to hold annual meetings of the TID.

Finally, this meeting shed light on an updated vision of Japanese diplomacy in Central Asia, following statements by Hashimoto (1997), Koizumi (2002) and Kawaguchi (2004). On the eve of the second FMM, Aso gave an extraordinary speech on Japanese policy in the region. Aso designated Central Asia as the object of the "New Great Game," which, by-turn, gave Kawaguchi's initiative a robust political connotation and increased the doubts of Russian and Chinese media about Tokyo's real intentions. Aso also updated the basic concepts in describing the importance of Central Asia to Japan: leaving security, economic potential and the development of multilateral relations, and breaking them with an "affinity" (interest to Japan). Moreover, he updated the guidelines of the Japanese diplomacy in the region, incorporating: (1) a broad-based perspective; (2) regional cooperation; and (3) partnerships based on common universal values.

Five months later at the JIIA event, Aso presented his vision of so-called "Arc of Freedom and Prosperity" for the Eurasian continent. The message also called for closer cooperation with NATO on the Afghan issue. At the same time, the Arc's key countries, including the countries of Central Asia, were presented as "marathon

runners” and Japan was depicted as an “escort runner,” which can also be compared with the attempt of Aso to give a new meaning to the concept of “catalyst.”

(3) Step three

The third FMM was held in 2010 in Uzbekistan during the reign of the Democratic Party of Japan (DPJ). Despite the plain results of the ministerial meeting, including adoption of a Joint Press release—a low-level political document—Japanese Foreign Minister Katsuya Okada was able to achieve some progress. For example, according to data from Okada’s personal blog (2010), he returned to the issue of having regularly scheduled ministerial meetings, and as a result, participants agreed to hold follow-up ministerial meetings in Japan and Kyrgyzstan two and four years later, respectively. It was also suggested that SOMs should be held at least once a year.

According to Kitagawa Katsuro (2010), who was the Head of Central Asia and the Caucasus Division at the Japanese Foreign Ministry at that time, this meeting was an important for the DPJ to prove their desire for friendly relations with Central Asia. Same time, he expressed disappointment that Turkmenistan was presented at the level of Ambassador. The author also used this instrument–participation criterion–to improve the analysis of the dialogue’s events.

The third FMM was also preceded by the fourth TID (2010), during which DPJ representative returned to the notion of “catalyst.” At the same time, they were able to enforce the catalyst’s meaning by inviting representatives from the Asian Development Bank and the European Bank for Reconstruction and Development to a meeting. In 2005, Japanese Foreign Minister Nobutaka Machimura spoke about the importance of ADB and other international financial institution’s participation in the dialogue. However, neither he nor his successors from the Liberal Democratic Party (LDP) followed up on this important suggestion. The DPJ was able to go further, proposing to hold the first “Economic Forum” in Japan, which, in fact, continued to function as Business dialogues and helped to enhance the WGM activities.

In addition, under Okada, the first and only review of national reports on the implementation of the Action plan was made. The dialogue participants no longer use this method. This fact demonstrates the absence of mechanisms for monitoring the process of implementation of multilateral agreements.

(4) Step four

The fourth FMM took place in 2012 in Japan. It coincided with the twentieth anniversary of the establishment of diplomatic relations between Japan and the Central Asian nations. The peculiarity of this meeting was related with the full-fledged participation of the delegation of Turkmenistan in the event.

In addition, all parties agreed to include the Foreign Ministries’ Exchange Program in the dialogue activities. In fact, this initiative was based on the previously existent exchange program established by the Japanese Foreign Ministry for young diplomats from the Newly Independent States. Meeting participants also stressed the importance of inviting new guests to participate in the dialogue meetings, such as representatives of the UN agencies. Moreover, the participants supported the proposal of the Kyrgyz side to create a dialogue’s website: <http://www.ca-jp.org/index.php/ja/> (out-of-operation).

The main result of this phase was the launching of multilateral consultations on cooperation in the field of agriculture. The sixth TID and the first WGM were devoted to this topic. At the same time, the Japanese side indicated a new criteria– “Japanese specificity”–for projects to be discussed in the framework of the dialogue. Analysis of the statements shows that the Japanese side understands under this term those projects that are “based on or aimed at the transfer/acquisition of Japanese technologies and expertise.”

(5) Step five

The fifth FMM was held in Kyrgyzstan in 2014. Then, for the first time in the history of the dialogue, all members were represented at the ministerial level. It had taken ten years for Japan and the Central Asian countries to give the dialogue a finished look.

Nevertheless, the parties reflected the importance of “new decade” in the work of the dialogue and giving it

practical content. As evidence, the participants adopted the first in the framework of the dialogue Roadmap on agriculture (e.g., fight against pests, silkworm breeding, livestock, and processing of fruits and vegetables). It is noteworthy that one year later, in 2015, the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (MAFF) adopted a new strategy titled, "The Global Food Value Chain Strategy: Promote "Made with Japan" through Public-Private Partnership," which supports ideas to create regional food supply chains in Central Asia and Russia.

In addition, this phase was further stimulated by the visit of Japanese Prime Minister Abe to Central Asia in October 2015. Undoubtedly, the visit had tremendous value for the further development of Japanese foreign policy towards Central Asia and *vice-versa*. Many of Step five events were devoted to the implementation of results of the visit. In addition, creation of a new instrument of Kantei diplomacy—Japan-Russia-Central Asia Exchange Promotion Council, whose first meeting was held on November 9, 2015 can also serve as clear evidence of this fact.

Another important result of this phase was the seventh TID. During the event, representatives of the Japanese Foreign Ministry introduced the dialogue as a "public good" that contributing to the stability and development of Central Asia. Moreover, the President of the Japan International Cooperation Agency (JICA) made his first appearance at the dialogue's event. In his speech, Akihiko Tanaka pointed out that the JICA has long been using the dialogue meetings as a basis for its activities in the region. Same time, he pointed out the small number of regional projects in the Agency's portfolio. Tanaka also referred to the challenges and opportunities faced by the region and particular points for Central Asia to focus on: (1) challenges: sanctions against Russia over the situation in Ukraine; incursions by the ISIL; withdrawal of the ISAF from Afghanistan; (2) needs: employment opportunities; diversification of industries in non-resources areas; financial support and private sector investment; improvement of deteriorated infrastructure; achievement of SDGs; (3) opportunities: CAREC Program, SCO, and Eurasian Economic Union (EEU).

Apparently, for the Japanese Agency, it seemed more sensible and effective to use the existing mechanisms in the region to support projects and initiatives. Given China's role in CAREC and the SCO, and Russia's role in the EEU, it can be assumed that JICA is clearly realize the possibility of cooperation with both PRC and Russia, rather than in competition with them. Besides, Tanaka pointed out the three tasks to be implemented: (1) intra-regional and extra-regional cooperative relationships as an open region; (2) increasing connectivity with neighboring countries and developing domestic systems; (3) equal distribution of economic growth universally to the people by strengthening the capacity of the public sector.

(6) Step six

The sixth FMM and last meeting for today was held in May 2017, in Turkmenistan. Foreign Minister Fumio Kishida became the first head of the Japanese Foreign Office, who visited the region twice and took part in two ministerial meetings. Following the outcome of the sixth FMM, parties adopted a new regional cooperation Roadmap, on Transport and Logistics.

Kishida also came out with the "Initiative for Cooperation in Transport and Logistics" that would be supported by the additional assistance of the Japanese Government to the region worth 24 billion yen. This sum could be considered as the first form of financial assistance, to be given to the region in the framework of the dialogue. Indeed, it also could mean that Japan finally decided to employ the "chequebook diplomacy" in order to give its initiative the "practical" nature.

Moreover, based on the outcome of the eleventh TID, which was held under the title, "Regional Cooperation in Central Asia and Strategic Outlook for Regional Security," it might be assumed that Japanese scholars and officials are interested in the discussion of Central Asian–Japan cooperation for reconstruction of and peace building in Afghanistan.

Speaking about the last two phases, it could be observed that the dialogue members started to "consistently" study the "practical" forms of intra-regional cooperation in agriculture, transport and logistics, and recently in the field of tourism, which was chosen as another promising area of cooperation during the last dialogue

meetings.

(7) Step seven

The next FMM would be held in Tajikistan for the first time. On the one hand, this once again demonstrates Japan's readiness to negotiate with its Central Asian partners in their domain. At the same time, it is not clear what exactly a new Japanese Foreign Minister Taro Kono could bring to the dialogue.

4. Analysis and discussion

(1) Structural features of the Dialogue

1. To date, FMM is the highest possible level for meetings in the framework of the dialogue. The analysis of the dialogue's activities shows that the primary documents are usually adopted at the ministerial meetings. In this regard, it can be argued that the FMM is the chief political body of the forum that responsible for the adoption of political decisions, outcome documents and the approval of new initiatives. The dialogue has no any clear schedule for the ministerial meetings. Same time, it can be assumed that participants still try to adhere to a particular algorithm, i.e. to meet once every two years (third FMM). However, as was learned earlier, the dialogue's calendar is strongly affected by large-scale domestic and international events, e.g. general elections and cabinet reshuffles in Japan. Moreover, as was mentioned above, the first full-fledged meeting of the FMM with the participation of all Central Asian delegations took place only in 2012 (fourth FMM), and at the foreign ministers' level two years later, in 2014 (fifth FMM).

Moreover, all meetings are traditionally held in Japan or Central Asia, but not on the margins of international forums. As a result, the Central Asian countries receive two significant benefits. First, unlike international events, they have enough time to discuss their own agenda in the framework of the dialogue. Secondly, the Central Asian countries form a regular basis for the organization of visits by Japanese Foreign Minister to the region.

It also seems unusual that a representative of only one nation, namely Afghanistan, took part in the FMM as a guest (second FMM). Despite the existing recommendations (fourth FMM), there is an evident absence of representatives of IO/ROs and financial institutions, which also indicates the desire of the parties to give the dialogue an "exclusive" format of Central Asia–Japan communications. This could be considered as a desire of the Central Asian countries to increase financial and technical assistance from Japan.

2. In general, the SOM is the most regular and "closed" event in the framework of the dialogue. It is clear that SOMs are important elements in the preparation of the FMMs and in their "follow-up." Also, SOMs became an important mechanism in maintaining the dialogue's activities during the absence of ministerial meetings in 2007–9. Moreover, following the sixth FMM results, SOMs were also given additional functions to monitor joint projects between Japan and Central Asia in the framework of the dialogue. Based on this fact, the SOM could

Figure 2. Organizational chart of the dialogue



(Note: *-declined proposals or non-functional mechanisms)

be considered as the principal executive body of the dialogue. At the same time, a particular disbalance might be seen in the SOM's composition. For example, in comparison with other delegations that usually presented at the level of Deputy Foreign Minister, the Kazakh side is more often represented at the level of the Director of Department or the Embassy staff (seven times). These facts demonstrate key features of how Central Asian countries assess the dialogue by themselves. It is enough just to compare the levels of participation of Kazakhstani delegations in similar structures with the EU, the US and the ROK.

3. It should be noted that Track II approach was strongly recommended to the leadership of the Foreign Ministry of Japan by the authors of "Challenge 2001." During a telephone interview, Hakamada, one of the report authors, noted that the interest of the Japanese academia and mass media to Central Asia is shallow. And regular meetings in the TID format are very complex (from the organizational point of view), but, in fact, they allow exchange information and develop new cooperation ideas.

In general, TID records usually passed to the FMMS and SOMs in the form of the Chair summaries. It is evident that experts in their assessments count on the fact that these proposals could be admitted based on their feasibility and acceptability.

Today, TID is one of the unique structures that hold regular meetings and produce various cooperation proposals. Same time, the author did not discover any information about the TID meetings in Central Asia. In addition, a limited number of experts from Central Asia participate in each meeting. In this regard, it could be concluded that the TID serves exclusively for Japan's own purposes. The Track II of "Central Asia plus Japan" dialogue could be considered as a platform with a limited effect.

4. WGMs are held in the same manner as TIDs. At the same time, we should understand that WGM-related topics usually do not correspond to the primary competence of the foreign ministries of Central Asia and Japan. It is obvious that discussions and preliminary arrangements on different possible projects, especially in the framework of TIDs, SOMs and FMMS, require additional coordination with the specialized agencies. It is obvious that the creation of a full-fledged economic body could significantly increase the effectiveness of the dialogue.

In this context, it should be noted that initial proposals on the establishment of the Business Council and the Joint Economic Committee were not implemented. Consequently, appropriate economic and business institutions did not support these ideas due to the possible overlapping of already existed frameworks. In this regard, WGMs could be considered as the Japanese Foreign Ministry's "invention" to keep economic track in the context of the dialogue.

5. In September 2014, the Second Regional Ministerial Conference of the Central Asian Disaster Management Authorities under the auspice of the "Central Asia plus Japan" dialogue was held in Bishkek, Kyrgyzstan. As a result, participants agreed to regularly convene such meetings at the level of heads of the disaster management authorities for discussing regional cooperation. However, this event is not reflected in an "official" list of the dialogue's events. Therefore, it can be assumed that the dialogue started to use its name as a "banner" for regional events with the participation of the Japanese and Central Asian officials.

6. In July 2014, on the tenth anniversary of the dialogue, the MOFA Japan presented an unofficial mascot of the dialogue, which usually used during PR activities and cultural events in the framework of the initiative. The famous Japanese manga artist Kaoru Mori based on her romance manga books, "A Bride's Story (Otoyomegatari)," compiled the "image" of the dialogue in the form of six ladies dressed in national clothes of the Central Asian nations and Japan. Such action by the Japanese side could be considered as a desire to give the dialogue attributes of the "organization."

(2) Unique trends in the dialogue's activities

In 2015, the Foreign Ministry of Japan commissioned a survey of public opinion, which showed that 70 per cent of respondents in the region highly appreciate the activities of the dialogue. However, the core question–

“Last year the “Central Asia Plus Japan” dialogue celebrated its tenth anniversary. Do you think the strengthening of the ties between Japan and Central Asia brings benefit via similar commemorative events?”—actually does not reflect the essence of the dialogue activities and apparently cannot be presented as an assessment of its role. Based on this fact, the author suggested that the dialogue’s issue was excluded from the second opinion poll (after Abe’s visit to Central Asia) intentionally. However, there are some positive trends in the dialogue activities that could be attributed as the dialogue’s effect:

1. Since the fourth FMM, there has been an increase in the number of FMMs’ outcome documents. Outcomes of Mahmudov’s interview with Jun Nanazawa, former head of Central Asia and the Caucasus division, shows that the dialogue has “revived” after the fourth ministerial meeting, from formal to practical character (2017).

2. The most popular form of outcome documents is “Joint statements” and “Roadmaps.” In this regard, it can be concluded that the Action plan is still the main document of the dialogue, and the Joint Statements and Roadmaps serve as complementary to the Action plan documents.

3. Transformation of the dialogue’s role could also be traced in the titles of outcome documents. At the first FMM, there was a reference to the entrance into so-called “New Era” of relations as a starting point of the dialogue’s process. The fourth FMM was concluded with the establishment of a “New Partnership,” which differs from such terms as “relations” and “cooperation” in other titles. In addition, outcome documents of the fifth and sixth FMMs give references to the beginning of a new working timeframe of the dialogue (2014–24) and strengthening of the “multilateral” component in its activities.

4. The level of outcome documents’ signatories indicates that the full-fledged activities of the dialogue with the participation of all countries and ministers began only during the fourth FMM. Accordingly, the dialogue started its functions as a full-fledged mechanism only after the fourth ministerial meeting.

5. The text analysis of outcome documents shows a high level of references to the role and efforts of the Government of Japan. At the same time, a relatively low number of references to the individual countries of Central Asia could be found. In the texts, the term “Central Asia” is highly prevalent for the description of the Central Asian republics.

Moreover, the texts contain sufficient references to the importance of Japan–Central Asia cooperation. However, as in the first case, we can also trace serious differences in the allusion of the dialogue and different IOs and ROs. In four of six cases, references to separate IOs and ROs prevail over the use of the dialogue.

6. Despite the strong beliefs about the dialogue as a tool of geopolitical game, findings clearly show that the dialogue countries do not mention third parties, except for some cases. In this connection, the author believes

Figure 3. Agenda for the dialogue



(Note: IOs–International organizations; ROs–Regional organizations; P2P–people-to-people exchanges)

that there is also a consensus among nations on the discussion of the policies of third countries, for example, Russia or China. In 2012, Japanese Foreign Ministry's Deputy Press Secretary Saiki Naoko confirmed for the first time that the Dialogue is not aiming at any particular country. However, at that time, during severe diplomatic contradictions between China and Japan, she did not rule out whether the issues related to the PRC would be raised during the fourth FMM or not. Then-Foreign Minister Gemba also ignored such questions.

(3) Practical dimension

The detailed analysis of dialogue-related documents allows the identification of a small number of initiatives that could be attributed to the effect of the Japanese initiative, indicated as follows:

1. According to Kawaguchi, despite her promise to accept one thousand trainees from Central Asia (first FMM), Japan received almost 1200 people at that time. Same time, Japan accepted 9,154 trainees between 1991 and 2015. In addition, Foreign Minister Kishida also declared at the sixth FMM that Japan would provide additional training opportunities for approximately 2,000 people over the next five years.

2. In 2005, the JBIC surveyed the adjustment of water resources and electricity, one of the critical issues in the region, to examine possible forms of cooperation with regional areas of cooperation in Central Asia.

3. Based on the outcome of the second FMM, the JICA published a paper titled "Study on Intra-Regional Cooperation over Water and Power for Efficient Resources Management in Central Asia." The main function of the report was to determine the role of Japan in water and electricity-related issues in Central Asia:

"Japan leads in areas such as water saving, water resources management and energy saving, and can, therefore, provide Central Asian countries with its excellent technology. Technical assistance should be expanded to reform systems including improving the management of power-related facilities such as power generation, transmission, and distribution. It is appropriate to start with projects which will be conducted within a country but...will have regional impacts rather than immediately venture gigantic projects."

The report also included the following recommendations: (1) strengthening of mutual trust through continuous dialogue; (2) support based on a long-term perspective; (3) respect to the individuality, assistance in accordance with the state of progress; (4) prevention of unfairness; (5) cooperation with other donors; (6) advantage use of Japan's expertise.

In particular, the Japanese support should be promoted based on fundamental principles, like "(give) priority to projects producing effect...for the entire region and all countries concerned." At the same time, these recommendations include specific pre-conditions, namely, "a mutual agreement on the promotion of intra-regional cooperation through river basin management and electric power interchange."

4. In order to implement the decisions of the fifth FMM, in 2015 the JICA together with the Hokkaido Intellectual Tank and the Overseas Merchandise Inspection Co., Ltd. conducted a survey on the agricultural sectors of Kyrgyzstan and Tajikistan. The JICA also conducted point studies about the promotion of Japanese technologies owned by private companies in Hokkaido, in Central Asia (Kazakhstan, Kyrgyzstan, and Uzbekistan). Moreover, based on the dialogue's decisions, the JICA and the FAO have developed a program of cooperation in the field of locust control which focuses on Kyrgyzstan and Tajikistan. The project amount for Afghanistan, Kyrgyzstan and Tajikistan totaled US\$ 5 million.

5. Following the fifth FMM, the JICA together with several Japanese companies conducted a study on emergency preparedness in Central Asia, the Caucasus and Mongolia.

6. During the sixth FMM, Foreign Minister Kishida announced that visa applications between Japan and the Central Asian republics would be simplified, especially for people engaged in business, academic, or cultural exchanges.

7. On 22 February 2018, in Astana, the UNDP and the Embassy of Japan signed an Exchange of Note ,

according to which the Japanese Government committed to provide US\$ 6.1 million for the regional project titled, “Strengthening Community Resilience and Regional Cooperation for Prevention of Violent Extremism in Central Asia.” According to Japanese officials, this project is part of Japan’s commitments under the sixth FMM.

8. On March 6, 2018 based on the sixth FMM discussions, the Government of Japan provided US\$ 6.2 million to Kyrgyzstan for the implementation of two programs, “Strengthening the System of Maternal and Child Health” (US\$ 3.5 million) for the UN Children’s Fund (UNICEF) and “Strengthening drug control measures” (US\$ 2.7 million) for the UNODC.

9. At the fourth FMM, the Japanese officials announced that the government had already implemented several projects worth US\$ 700 million to promote cooperation in the region. The exact list of such projects was not officially disclosed. In this regard, the author believes that this amount covered Japanese projects that were already implemented or were under implementation by the time of the fourth FMM.

10. At the sixth FMM, Kishida came out with the “Initiative for Cooperation in Transport and Logistics,” which was used by the Japanese Government to undertake concrete projects involving cooperation in the field of transportation. It was said that the initiative would include a significant amount of assistance, approximately 24 billion yen. According to the document, monetary resources will be allocated to projects in such areas as border control (e.g., UNODC), air communication (e.g., airport modernization and personnel training), ground transportation, and logistics. These projects also include yen loans, grants, and technical assistance.

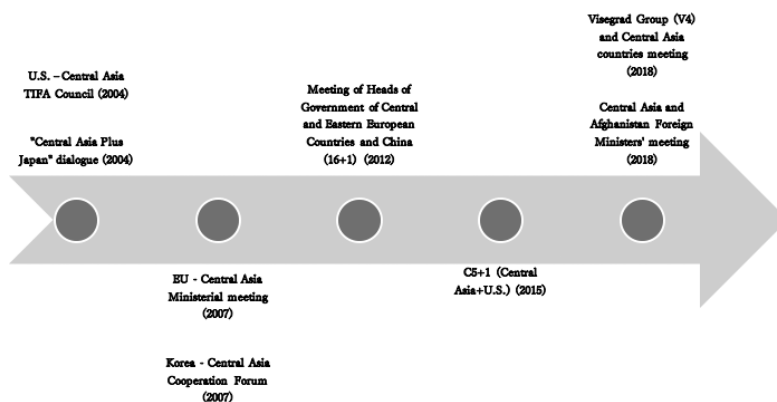
(4). External effects

It is worthwhile to note that the dialogue was launched in the same year as Japanese dialogue with the Visegrad group (V4).

Moreover, similar platforms were created with GUAM Organization for Democracy and Economic Development (2007), Nordic-Baltic Eight (NB8) (2013) and three former USSR Baltic states (2018). Actually, all these dialogue platforms are supervised in Japan by the European Affairs Bureau.

Tetsuji Tanaka mentioned that the dialogue gave impetus to similar platforms between Central Asia, the EU and the U.S. Moreover, Tanaka, the current head of the Japanese Centre on Chinese studies, noted that the Chinese “16 +1” initiative has possible roots in the dialogue (see Figure 4). According to Tanaka, the thesis about the Japanese track in the EU-Central Asia and the C5+1 format was also recognized by the famous U.S. scholar Starr during their occasional meetings in Tokyo and Tashkent. The same thesis was indicated in an article about the tenth anniversary of the dialogue in the Japanese Foreign Ministry’s online magazine “Wakaru! Kokusai josei” (“I understand! The International Situation”), Vol. 117, on 11 July 2014. According to the article,

Figure 4. The effect of the dialogue.



"This pioneering effort by Japan has attracted attention from the international community, and now the EU, Korea, etc. have also launched a dialogue forum with a similar approach."

However, Tanaka is convinced that Japan's participation in regional affairs will be less active if the republics cannot become one-piece. Amb. Kawato shares a similar opinion. According to the former diplomat, the creation of the dialogue can be viewed as Japan's earliest attempt to develop its own "diplomatic card" in relations with Russia and China. Leaders in Japan will be able to achieve more of their goals in the region only if all Central Asian republics could form a single unified bloc.

5. Conclusion

As we can see, in the early 2000s Japan planned to create the "Japan-CACO" dialogue, which, based on previous aspirations of the Japanese side in the framework of ASEAN-Japan and ASEAN+3, was bound to transform in the "CACO+5" (e.g. Russia, China, Japan, the U.S. and the EU) mechanism. Despite the dilution of the CACO, Japan retained its interest in Central Asia and came forward with its own idea. The author realized that Japan had a choice—to create a dialogue or not. Again, the appointment of Kawaguchi as Foreign Minister was accidental and possible only after the resignation of her predecessor Makiko Tanaka as a result of a major scandal in the Japanese Foreign Ministry. Nevertheless, this initiative was developed and became an example of a new type of multilateral diplomatic framework for Japan, based on the affiliation of partner countries to a particular region, rather than regional organization.

Today, dialogue is an essential complement to the Japanese foreign policy, which allows it to compensate an insufficient level of interaction between Japan and Central Asia in the global arena. In this regard, dialogue can also serve as an essential argument for Japan in the discussion of the Central Asian agenda with various actors.

Same time, the dialogue was able to achieve its goal, since the Central Asian countries were able to create similar structures with other key countries and regions, and today collectively defend their common interests. The author concluded that Japan, if the current *status quo* is maintained, could fall under the influence of the Central Asian republics, which, in turn, could try to reformat the dialogue and its content. In fact, Japan could become a "hostage" of its own initiative, as many of its early efforts have not been implemented.

However, the dialogue has essential features that allow Japan and Central Asia to discuss a wide range of issues in the framework of FMMs, SOMs and TIDs. In this context, the dialogue participants demonstrate their aspirations for further changes through the great focus on the real-life meaning of the dialogue. Moreover, academic interest in the dialogue might be enforced by recent political trends in Central Asia. The advent of a new leader in Uzbekistan, Shavkat Mirziyoyev, re-launched political discussions about the intraregional integration in Central Asia. For example, on November 10, 2017 President Mirziyoyev proposed to convene annual meetings of the Central Asian leaders, whose first informal meeting was hosted by President Nursultan Nazarbayev of Kazakhstan on March 15, 2018 in Astana.

It is no doubt that this process would be accompanied by a revision of regional strategies of the Central Asian nations in the framework of different multilateral dialogue platforms, including with Japan. As a first step, during their meeting on November 10, 2017 in Uzbekistan, Central Asian Foreign Ministers already agreed to cooperate on their joint actions in the framework of ministerial meetings of "EU–Central Asia," "C5+1 (U.S.)," "Central Asia–ROK" Cooperation Forum, the US–Central Asia Trade and Investment Framework Agreement, and the "Central Asia plus Japan" dialogue.

In such situations, Japanese diplomats always love to say, "The ball's in your court now." However, today the ball is in the Japanese court. Indeed, the Central Asian countries have created a unique momentum that can help their foreign partners to demonstrate declared by them intentions and opportunities. If the dialogue miss a chance for more radical transformation now, it is unlikely that it will be able to improve its work in the foreseeable future.

References

- Abe, S. (2015, October 27). *Kazafusutan ni okeru Abe naikakusori daijin seisaku supichi* [Policy Speech by Prime Minister Shinzo Abe in Kazakhstan]. Retrieved from the web-site of the Office of Prime Minister of Japan. Available at: https://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement/2015/1027speech.html (accessed July 10, 2018).
- Aso, T. (2006a, June 1). *Chuoajia o heiwa to antei no kairo ni* [Central Asia as a Corridor of Peace and Stability]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/18/easo_0601.html (accessed July 13, 2018).
- Aso, T. (2006b, November 30). *Jiyu to han'ei no ko o tsukuru: Hirogaru Nihon gaiko no chihei* [Building the Arc of Freedom and Prosperity: Japan's Expanding Diplomatic Horizons]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/18/easo_1130.html (accessed July 13, 2018).
- A. Kawato, personal communication, March 5, 2018.
- Dadabaev, T. (2014). *Chuoajia no kokusai kankei* [International Relations in Central Asia]. Tokyo: Tokyo daigaku shuppankai.
- Dadabaev, T. (2016). *Japan in Central Asia. Strategies, Initiatives, and Neighboring Powers*. New York: Palgrave Macmillan US.
- Fukushima, A. (2006, March 30). *Chuoajia+Nihon taiwa: Dai 1-kai Tokyo taiwa. Gicho samari* [Central Asia+Japan Dialogue: 1st Tokyo Dialogue. Chairperson summary]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/event/caj_summary.html (accessed July 13, 2018).
- Hashimoto, R. (1997, July 24). Address by Prime Minister Ryutaro Hashimoto to the Japan Association of Corporate Executives. Retrieved from <https://japan.kantei.go.jp/0731douyukai.html> (accessed July 10, 2018).
- Hook, G. D., Gilson, J., Hughes, Ch.W. & Dobson, H. (Eds.) (2012). *Japan's International Relations: Politics, Economics and Security*. London / New York: Routledge.
- House of Representatives of the National Diet of Japan. *Dai 163-kai kokkai Gaimu iinkai dai 3-go* [163rd Session of the National Diet of Japan: Foreign Affairs Committee, no. 3]. Retrieved from http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_kaigirokua.nsf/html/kaigirokua/000516320051021003.htm (accessed February 13, 2018).
- Inoguchi, T., Hakamada S., Yamauchi, M., Kitaoka, S., Yamakage, S., Kokubun, R. & Tanaka, A. (1999). *Challenge 2001 – Japan's Foreign Policy toward the 21st Century*. Retrieved from <https://www.mofa.go.jp/policy/other/challenge21.html> (accessed July 11, 2018).
- Jackson, R. & Sorenson, G. (2003). *Introduction to International Relations: Theories and Approaches*. Oxford: Oxford University Press.
- Japan Institute of International Affairs. (2003). *Chuoajia o meguru aratana kokusei josei no tenkai* [Development of New State of Affairs in Central Asia] [PDF document]. Retrieved from http://www2.jiia.or.jp/pdf/russia_centre/h14_c-asia/03_kasai.pdf (accessed July 13, 2018).
- Kaufman, J. (1996). *Conference Diplomacy: An Introductory Analysis*. London: Macmillan Press Ltd.
- Kawaguchi, Y. (2004a, August 26). *Nihon no aratana tai Chuoajia seisaku ni kansuru supichi [Aratana jigen e: Chuoajia+Nihon]* [Speech on Japan's New Policy towards Central Asia. Adding a New Dimension: Central Asia plus Japan]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/16/ekw_0826.html (accessed July 12, 2018).
- Kawaguchi, Y. (2004b, December 7). *Speech by Special Assistant to the Prime Minister at the 12th Ministerial Council of the Organization for Security and Cooperation in Europe in Sofia, Bulgaria*. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: <https://www.mofa.go.jp/region/europe/osce/speech0412.html> (accessed July 13, 2018).

- Kawaguchi, Y. (2017, August 31). [Chuoajia purasu Nihon] ni omou koto [Things to Think About Central Asia Plus Japan] [PDF document]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000285702.pdf> (accessed July 12, 2018).
- Kawato, A. (2008). *What Is Japan up to in Central Asia?* In Len, Ch., Uyama, T., & Hirose, T. (eds.), *Japan's Silk Road Diplomacy. Paving the Road Ahead* (15–29). Washington/Stockholm: Central Asia-Caucasus Institute&Silk Road Studies Program.
- Kitagawa, K. *Chuoajia+Nihon taiwa dai 3-kai gaisho kaigo kaisai* [The 3rd Ministerial meeting of the Central Asia+Japan dialogue]. Retrieved from the Summary of the 105th meeting of the Central Eurasia Research Committee. Online web-site <https://www.iist.or.jp/2010/h22-eurasia-0915-1/> (accessed March 11, 2018).
- Komatsu, I. (2004). Chuoajia+Nihon tai Chuoajia seisaku no shin-tenkai [Central Asia+Japan: New Novel Development of Japanese Policy towards Central Asia]. *Gaiko Forum*, December, 21-27.
- Len, Ch., Uyama, T. & Hirose, T. (Eds.) (2008). *Japan's Silk Road Diplomacy. Paving the Road Ahead*. Washington/Stockholm: Central Asia-Caucasus Institute&Silk Road Studies Program.
- Machimura, N. (2005, April 20). *Ajia-Afurika kakuryo kaigi ni okeru Machimura Gaimu daijin enzetsu* [Address by Foreign Minister Machimura of Japan on the Occasion of the Asian-African Ministerial Meeting]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/17/emc_0420.html (accessed July 13, 2018).
- Mahmudov, U. (2017) *Reisengo Nihon-no chuoajia seisaku to senryaku: 'Yurashia gaiko' kara 'Chuoajia+Nihon' taiwa o chushin ni* [Japan's Central Asia Policy and Strategy after Cold War Focus on "Eurasia Diplomacy" and "Central Asia+Japan" dialogue] (Doctoral dissertation). Retrieved from the Hosei University's database. Available at: <http://repo.lib.hosei.ac.jp/handle/10114/13625> (accessed July 11, 2018).
- Matsumiya, I. (2004, March 25). *Chuoajia ni okeru chiiki kyoryoku no genjo to mirai* [Current Status and Future of Regional Cooperation in Central Asia]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/16/etc_0325.html (accessed July 12, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (1993). *Diplomatic Bluebook 1992: Japan's Diplomatic Activities*. Retrieved from <https://www.mofa.go.jp/policy/other/bluebook/1992/1992-contents.htm> (accessed July 11, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2004). *Chuoajia+Nihon taiwa gaisho kaigo / Kyodo seimei - Shin jidai o mukaeru Nihon Chuoajia kankei* ['Central Asia plus Japan' Dialogue / Joint statement - Relations between Japan and Central Asia enter a New Era]. Retrieved from https://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/g_kawaguchi/ca_mongolia_04/kyodo_sei.html (accessed July 12, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2006a). *Diplomatic Bluebook 2006* [PDF document]. Retrieved from <http://www.mofa.go.jp/policy/other/bluebook/2006/07.pdf> (accessed July 12, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2006b). *15th Japan-EU summit: Joint Press Statement*. Retrieved from <https://www.mofa.go.jp/region/europe/eu/summit/joint0604.html> (accessed July 13, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2006c). *Chuoajia+Nihon taiwa: Kodo keikaku* [Central Asia+Japan Dialogue: Action plan]. Retrieved from https://www.mofa.go.jp/mofaj/kaidan/g_aso/cajd_06/kodo.html (accessed July 13, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2007). *Diplomatic Bluebook 2007: Summary*. Retrieved from <https://www.mofa.go.jp/policy/other/bluebook/2007/html/index.html> (accessed July 12, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2013). *Chuoajia+Nihon taiwa - Dai 7-kai kokyu-jitsumu-sha kaigo* [Central Asia+Japan Dialogue. The 7th Senior Officials Meeting]. Retrieved from https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/page23_000630.html (accessed July 14, 2018).
- Ministry of Foreign Affairs of Japan. (2014). *Chuoajia+Nihon taiwa no wakugumi ni yoru nogyo bun'ya chiiki kyoryoku rodomappu* [Central Asia+Japan Dialogue's Roadmap on Agricultural Regional Cooperation] [PDF document]. Retrieved from <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000045366.pdf> (accessed July 15, 2018).
- Miyazawa, K. (1992, October 29). *Opening Remarks by Prime Minister Kiichi Miyazawa at the Tokyo Conference*

- on Assistance to the New Independent States. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: [https://www.mofa.go.jp/policy/other/bluebook/1992/1992-appendix-2.htm#\(10\)%20Opening](https://www.mofa.go.jp/policy/other/bluebook/1992/1992-appendix-2.htm#(10)%20Opening) (accessed July 11, 2018).
- Montville, J. V. (1990). The Arrow and the Olive Branch: A Case for Track Two Diplomacy. In Volkan, V. D., Julius, D. A. & Montville, J. V. (Eds.) *The Psychodynamics of International Relationships* (161–175). London: Lexington Books.
- Organization for Security and Co-operation in Europe. (2000). *OSCE-Japan Conference 2000: "Comprehensive Security in Central Asia – Sharing OSCE and Asian Experiences" Consolidated Summary* [PDF document]. Retrieved from <https://www.osce.org/partners-for-cooperation/asian/42184?download=true> (accessed July 13, 2018).
- Parliament of the Republic of Kazakhstan. *Организация Центрально-Азиатское Сотрудничество (ЦАС)* [Central Asian Cooperation Organisation (CACO)]. Retrieved from <http://www.centrasia.ru/cnt2.php?st=1083320274> (accessed July 12, 2018)
- Sato, K. (2003). *ASEAN rejimu: ASEAN ni okeru kaigi gaiko no hatten to kadai* [The ASEAN Regime: Development and Challenges of the ASEAN Foreign Policies]. Tokyo: Keiso Shobo.
- Sato, K. (2013). The Rise of China's Impact on ASEAN Conference Diplomacy: A Study of Conflict in the South China Sea. *Journal of Contemporary East Asia Studies*, 2:2, 95-110. DOI: 10.1080/24761028.2013.11869064.
- Shiozaki, Y. (2006, March 30). *Chuoajia+Nihon chiteki taiwa: Tokyo taiwa. Shiozaki gaimu fuku daijin kicho enzetsu* [Central Asia+Japan Intellectual Dialogue: Tokyo Dialogue. Deputy Foreign Minister Shiozaki's keynote speech]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/18/ef_0330.html (accessed July 13, 2018).
- Sinclair, S., Rockwell, G. & The Voyant Tools Team. (2012). *Voyant Tools* [Software]. Available from <http://voyant-tools.org/>.
- Starr, F. (2017, August 31). *Chuoajia to Higashiajia 2000-nen no rekishi* [2000 Years of the Central Asian and East Asian History] [PDF document]. Retrieved from the web-site of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Available at: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000289477.pdf> (accessed July 11, 2018).
- Sudo, S. (1988). Japan-ASEAN Relations: New Dimensions in Japanese Foreign Policy. *Asian Survey*, Vol. 28 (No. 5), 509-525. DOI: 10.2307/2644640.
- Sudo, S. (2009). Japan's ASEAN Policy: Reactive or Proactive in the Face of a Rising China in East Asia? *Asian Perspective*, Vol. 33 (No. 1), 137–158.
- Suzuki, S. (2004). *East Asian Cooperation through Conference Diplomacy: Institutional Aspects of the ASEAN Plus Three (APT) Framework* [PDF document]. Working Paper Series 03/04-No.7. Chiba: APEC Study Center – Institute of Developing Economies, JETRO. Retrieved from http://www.ide.go.jp/library/English/Publish/Download/Apec/pdf/2003_07.pdf (accessed July 10, 2018).
- S. Hakamada, personal communication, February 27, 2018.
- T. Tanaka, personal communication, February 14, 2018.
- Task Force on Foreign Relations for the Prime Minister. (2002). *Basic Strategies for Japan's Foreign Policy in the 21st Century New Era, New Vision, New Diplomacy*. Retrieved from the web-site of the Office of Prime Minister of Japan. Available at: http://japan.kantei.go.jp/policy/2002/1128tf_e.html (accessed July 12, 2018).
- Tsunozaki, T. (2007). *Kazafusutan - sogen to shigen to yutakana rekishi no kuni* [Kazakhstan - a Country of Prairie, Resources and Rich History]. Tokyo: Waseda shuppan.
- Uyama, T., Len, Ch. & Hirose, T. (Eds.) (2008). *Nihon-no chuoajia gaiko - tamesareru chiiki senryaku* [Japan's Central Asian Diplomacy - Regional Strategy to be Tested]. Sapporo: Hokkaido Daigaku Shuppan-kai.
- Yuasa, T. (2007). Japan's Multilateral Approach toward Central Asia. In Akihiro Iwashita (Ed.), *Eager Eyes Fixed on Eurasia*, Vol. 1 (65–84). Sapporo: Slavic Research Centre, Hokkaido University.
- Yuasa, T. (2008). Consolidating "Value-Oriented Diplomacy" towards Eurasia? The "Arc of Freedom and

Prosperity" and Beyond. In Len, Ch., Uyama, T. & Hirose, T. (Eds.) (47–65). *Japan's Silk Road Diplomacy. Paving the Road Ahead*. Washington/Stockholm: Central Asia-Caucasus Institute&Silk Road Studies Program.

Y. Kawaguchi, personal communication, March 15, 2018.

論文

台湾におけるナショナル・アイデンティティ
——日本統治下における「台湾」の萌芽——

National Identity in Taiwan: How “Taiwan” Emerged under Japanese Occupation

渡邊 絢夏 (Ayaka WATANABE)

筑波大学人文社会科学部 博士後期課程

中華民国は複雑なアイデンティティの形成を経ながら現在の「台湾」へと収斂していった。その背景には、有史以来の外来政権による支配や、蒋介石率いる国民党軍政期以来の社会的背景などが大きく関与している。台湾は長らく no man's land の状態であった。オランダ統治を契機に、以降様々な外来政権によって統治されることとなった台湾は、帝国日本の統治によって初めて「台湾」を意識することとなった。台湾は長らく複数のエスニック・グループが共存していた。エスニック・グループ同士で一つのネイションとして意識を共有することはなく、また一つのグループが明確に島の支配者として独立することもなく、棲み分けられていた。それは清朝統治時代においても同様であり、あくまでも部分的な統治に留まっていた。「日本」というネイションに統合されることで、台湾に住む人々が共に「日本人」化させられた。しかしながら、明らかな内地人と外地人の差別・差異に、外地人たちは自らを他者化することとなり、「われわれ」を意識することとなった。この「われわれ」は日本人とは異なるナショナル・アイデンティティを有するものであり、「台湾」創出の萌芽であった。

本研究では台湾のナショナル・アイデンティティの萌芽を日本統治期に見るものである。方法として日本人作家の川合三良と台湾人作家の呂赫若の文学作品をテキストとして取り上げ、内地人が外地台湾をどのようにまなざしていたか、外地人たちが日本帝国の家族国家観による統治をどのように受容していたかの2点を文学作品から分析する。さらに日本人という支配者が存在したことで、原住民族と漢族グループの境界に揺らぎが生じたことで、現代に繋がる「台湾」としてのナショナル・アイデンティティの萌芽が日本統治時代に現れていたことを明らかにする。

The Republic of China converged to contemporary “Taiwan” through the formation of a complex identity. The facts that foreign governments ruled Taiwan since the dawn of history and that a certain social setting emerged through the KMT (Kuomintang) led by Chiang Kai-shek have greatly been involved in this context. Taiwan was a no man's land for a long period of time. After being ruled by the Netherlands, Taiwan was governed by various foreign administrations and as a result of Japan's governance, Taiwan became conscious of “Taiwan” for the first time. Several ethnic groups were coexisting in Taiwan for a long time. Those ethnic groups did not share the consciousness of being one nation and the groups were divided among themselves without one group being the clear governor of the island. This situation did not change in the Qing Dynasty; thus Taiwan was only governed partially. Getting integrated into Japan, the people living in Taiwan were made Japanese. However, due to the distinction by the Japanese people between people from in- and outside of Japan and discrimination of people from outside of Japan, the Taiwanese became aware of “themselves”. These people had a different national identity than Japanese people, which then functioned as a foundation for the creation of Taiwan.

This study examines the emergence of Taiwan's national identity under Japanese occupation. For the analysis, literary works by Japanese author Kawai and Taiwanese author Lu Yu Hua were used to see how Japanese people viewed Taiwanese people as well as how the Taiwanese accepted the governance by the Japanese empire. This study reveals that through Taiwan's governance by the Japanese as well as through the fluctuation of boundaries between indigenous Taiwanese and Han Chinese the foundation leading to national identity in present-day Taiwan grew under Japanese occupation.

キーワード：ナショナル・アイデンティティ、台湾、日本統治期、呂赫若、川合三良

Keywords : National Identity, Taiwan, Japanese Occupation, Herou-Lu, Saburo Kawai

はじめに

昨今、ナショナル・アイデンティティは台湾をめぐる大きな問題となっている。現在中華民国(以下、台湾¹⁾)には、正式に承認されている16の原住民族²⁾に加え、日本の統治以前から台湾に住む本省人³⁾、蒋介石率いる国民党軍とともに移民した外省人、また原住民族や日本人、漢族との混血など、数々の立場にある人々が混在している。このような背景には有史以来オランダや清朝、日本などのいくつかの外来政権による統治を受けてきた事実がある。複雑な歴史的背景から台湾は民族や言語、文学などの様々な要素によって重層性のある歴史を築いてきた。その成り立ちは言うなれば年輪のようなものであり、歴史や文化、民族など台湾には多くの境界領域が存在する。それぞれの領域は切り離すこともできないが、完全に同化することもできない。台湾のナショナル・アイデンティティを論じるには、複合的なアイデンティティの構成を理解しなければならない。すなわち、政治、歴史、宗教といった文化的アイデンティティと、対中華人民共和国(以下、中国)や国際的な立ち位置を意識した政治的アイデンティティである。

また、台湾と称されるとき、それは純粹に土地そのものを指す場合、南京に首都を置いていた【中華民国】からの流れを汲む歴史の一端を指す場合、中国とは異なるナショナル・アイデンティティを持つものとして主張する場合など、様々な意味を包括する。台湾の人々を含まない【中華民国】と、現在の正式な「国名」として使用される中華民国は、ナショナル・アイデンティティを異にする。つまり中華民国という語が示すものは時代と立場によって異なるのである。そのため、「台湾・台湾人」とは何者か、という問いに対しては時代を区分して考察する必要があるだろう。本研究では日本統治時代に現在の台湾の源流ともなるナショナル・アイデンティティの芽生えがあったことを論じる。

台湾のナショナル・アイデンティティを巡る研究は、若林正文『台湾：変容し躊躇するアイデンティティ』や、山崎直也『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』、黄俊傑『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史の変遷』など、多く著されている⁴⁾。それらの研究は、一領域に留まるだけでなく、歴史、教育、政治、文学といった多角的な視点から行われてきた。また先の諸研究は日本統治時代から現代に至るまで時代も幅広く扱われている。しかしながら、山崎(2009)の著作の一例を挙げるが、教育という視点を得ながらも、そのアプローチには日本での学習指導要領にあたる過程標準や教育政策法規などの公的資料などから探り、政治との近接性が強い。これには「一つの中国」論以来、台湾化と換言される本土化の流れといった、政治的諸問題が台湾アイデンティティに密接に関わっているという背景がある。本研究では、従来の研究に多くみられる政治的なナショナル・アイデンティティへの接近を試みるものではなく、文学作品をテキストとして問題を再構成するねらいである。また、台湾人作家の呂赫若と、日本人作家の川合三良の両名の文学作品を取り上げ、テキストの中からナショナル・アイデンティティがどのように表出しているのかを探る。そして、現

¹ 本論においてそれぞれの国の名称に関しては、現在の中華民国を指すときは台湾と称し、中華人民共和国を指すときには中国と称する。なお、時代区分に際して、その名称が指すものが同意とならない場合は【中華民国】のように括弧付きで示し、適宜詳説することとする。

² 日本語において「原住民族」は差別的なニュアンスを含むため、「先住民」という語が使われるのが一般的であるが、台湾では1994年の憲法改正に伴い、国民党統治時代の「山地同胞」に代わり、原住民族自身が「原住民族」と呼称を改めた。その後1997年からは「YUAN ZHU MIN ZU原住民族」を使用している。よって、本稿では日本語で使用される「先住民」と同義で「原住民族」と表記する。

³ 現在でも単に別の省から移り住む人々を外省人、対して元からの客家系、閩南系などの住人を本省人と称する。本稿では1945年以前から台湾に住んでいた人々を本省人、国民党軍と共に台湾に渡ってきた人々を外省人と定義する。

⁴ 他にも若林正文『台湾抗日運動史研究』や、石井由理「音楽文化を通してみたナショナル・アイデンティティ—台湾の二世代比較」、本田周爾「台湾におけるナショナル・アイデンティティの諸相」、吳豪人「遅れてきたナショナル・アイデンティティ(二) 完—台湾法史に関する一つの覚書き—」など枚挙にいとまがない。

代に繋がる台湾意識の萌芽が日本統治時代に見られたことを明らかにしたい。

1. 台湾ナショナル・アイデンティティ

台湾のナショナル・アイデンティティを論ずるにはいくつかの工程を経なければならない。すなわち、ナショナル・アイデンティティとは何かという問い、そしてさらに台湾をナショナルと定義可能なかという問いを明らかにすることである。特に前者はその前提となるネイションをどのように考えるかという段階を踏まなければならない。その語の定義については未だ定まらず、論者によって異なる様態を表すため、慎重を期す必要がある。

一つ目のナショナル・アイデンティティの定義を見てみる。ネイションは国家、国民、民族など文脈に応じてその翻訳が異なる。そのため前提として、ナショナル・アイデンティティの概念を「構成主体」と「制度的枠組み」に分けて考える必要があると中谷猛（2000）は指摘する。ナショナル・アイデンティティという概念が「『集団的アイデンティティ』の次元の一つとして取り扱う必要がある」と前置きし、ナショナルという概念自体も「構成主体としての『国民』・『民族』と制度的枠組みとしての『国家』」に二分され、かつ内容規定に曖昧さが付随する」と述べる⁵。つまり、前者を一つの集団に帰属する一あるいは帰属しようとしている人々とするなら、後者は国家そのもの、ステイトを指すのである。

また川上勉（2003）はナショナル・アイデンティティを「国家のレベルでは自国の存立基盤や国家としての統一性を追求することを目指すものであり、個々の国民にとっては国家への帰属意識（アイデンティフィケーション）を確認する行為であり、またその容態である⁶」と説明する。

さらにナショナリズムの研究者であるアントニー・D・スミス（1998）は「ネイションをあらゆる政治的努力の目標とし、ナショナル・アイデンティティをすべての人間的価値の基準とする教義⁷」と述べる。

このように各論者の定義を概観しても、語の含む概念は広く、かつ抽象的である。ゆえに各論者のナショナル・アイデンティティの定義に対する整理は、中谷（2000）を参照することとする。

- a. 社会における差異化を承認する国家の政策としてのナショナル・アイデンティティ。
- b. 多文化社会・多文化主義（多言語主義を含む）を原則として掲げるナショナル・アイデンティティ。
- c. 他者（性）を意識した帰属意識または一体感としてのナショナル・アイデンティティ。
- d. 多文化社会を前提にした国民統合の手段としてのナショナル・アイデンティティ。
- e. マイノリティ集団・エスニック集団の政治的・社会的・文化運動としてのナショナル・アイデンティティ。⁸

以上の分類は、決して一国の中で一つに留まるものではないだろうし、また部分集合的に重なることも十分に考えられる。これらの分類は相互関連的な要素から成り立っており、なおも複雑な様相を呈する。

台湾がこれらの分類のどこに位置するかは非常に難しい問題である。後述する台湾における光復70周年パレードスピーチや「人間の鎖」の例から見ると、対大陸を意識して行った人間の鎖に対してはeに分類すると言えるし、馬英九のスピーチはcを目指したものであったとも考えられる。そして中

⁵ 中谷猛「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學 2000年3・4号（271・272号）下巻』（立命館大学法学会、2000）、p.679。

⁶ 川上勉「第4章 ナショナル・アイデンティティの2つの側面—動員と参加—」『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』（晃洋書房、2003）、p.73。

⁷ アントニー・D・スミス、高柳訳『ナショナリズムの生命力』（晶文社、1998）、p.45。

⁸ 中谷猛「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學 2000年3・4号（271・272号）下巻』（立命館大学法学会、2000）、p.707。

国の示す少数民族56民族の中に含まれる「高山族⁹」の言説はdに分類される中国側のナショナル・アイデンティティである。

このようにナショナル・アイデンティティを巡る問題は重層的な要素を持ち、かつ台湾自体が歴史や政治、教育に複雑な重層性が見られることから分類が容易ではない。しかし全てに共通するのはナショナル・アイデンティティとは「われわれは何者か」という問いを発するということである。

繰り返しになるが、台湾は様々な外来政権によって統治されてきた歴史が存在する。統治者や政権が変われば教育も変化する。教育の変化は歴史観の変化と同意として語ることができる。それは昨今の例で見れば、台湾の歴史教科書『認識台湾』の問題に端的に表れている。アイデンティティ形成に教育が大きく影響することは論を俟たないが、台湾の「われわれは何者か」という問題に対しては、時代を区分して考察する必要があるだろう。

二つ目の問題は次の通りである。台湾においてナショナル・アイデンティティという語を使うことは、台湾を国＝ネーションと認めるべきかという一種の政治的問題が付随する。周知の通り台湾は国際社会において正式に国家と承認されていない。本多周爾(2003)はアントニー・D・スミスの論を参考に、ネーションを「一つの国家に住まう国民、ならびに自らの国家の建設を志向する人々の共同体、すなわち自らのアイデンティティを持ち、自立の道を探求する中で、民族から国民へと転化する過程を選択する人々¹⁰」と説明している。つまり、国際政治上、国家と規定されておらずとも、ナショナル・アイデンティティは持ち得るものであるのだ。

台湾には国旗や国歌が存在する。国旗や国家は「ナショナルなもの」の表象であり、このような観点からもナショナル・アイデンティティが台湾には存在していると考えられる。台湾における国旗は「青天白日満地紅旗」を指す。これは元をたどれば、南京に拠点置いていた国民党軍が党旗と定めたものであった。加えて、現在の台湾のパスポートの表記も「中華民国」の文字が見られる。それでは台湾＝中華民国と同定して良いのか。結論から述べると、南京に首都を置いていた【中華民国】は、現在のパスポートに表象される「中華民国」とは同一のものではない。現在の「中華民国」は、島へと逃れた【中華民国】とそこに住んでいた本省人や原住民族たちの歴史や文化と融合し、形成されていったものである。南京事件の歴史は台湾と中国の一部に包括される歴史と言える。孫文は一度も台湾の地を踏んだことが無くとも台湾建国の父と呼ばれる。厳密には【中華民国】人の孫文が台湾の礎にあることから、完全な分離でも融合でもない状態で台湾の人々の中に複合的に【中華民国】は含有されているのである。

また日本統治時代、台湾に住んでいた本省人たちは便宜上「日本人」であった。抗日戦争という語においても同様のアイロニーに晒される。中国において抗日戦争が指すのは日中戦争である。抗日戦争の中で行われた連合軍の台北大空襲や新竹空襲には、国民党軍も含まれる。【中華民国】が台湾に対して空襲を行ったことに対して、両者を同一のものとみなしてしまえば陥穽に嵌ってしまいかねない。

日本統治下の台湾で行われた抗日闘争は前期と後期に大別することができる。1915年の西来庵事件までを前期と区切り、それら漢族を中心とした抗日運動は武装闘争であった。一方、後期の抗日闘争は1920年代から始まる。特に台湾文化協会、台湾民衆党の人々によって盛り上がりを見せた台湾議会設置請願運動、新文化運動はそれまでの武装蜂起とは大きく異なり、政治運動、文化運動、社会運動の形態をとった¹¹。さらに付け加えるならば、原住民族たちによる抗日事件は、変化の潮流を逆行するような、武装蜂起の「霧社事件」が第一に挙げられる。

このように一口に「抗日」と言っても、それを指すものは集団や時代ごとに大きく異なり、同一ではない。台湾に住む人々は、日本統治の中で自治に対する様々な形態での運動を起こしたものの、日

⁹ 外来政権の統治以前から台湾に住む原住民族を総括して中国政府は高山族と称しているが、現在台湾政府は台湾島内に住む原住民族を16民族に分類している。

¹⁰ 本多周爾「台湾におけるナショナル・アイデンティティの諸相」『武蔵野女子大学現代社会学部紀要(4)、89-101』(武蔵野女子大学現代社会学部紀要編集委員会、2003)、p.91。

¹¹ 若林正文『台湾抗日運動史研究』(研文出版、1983)、pp.6-8。

本の引き揚げ後、迎えた国民党の教育によって、再びねじれと重層性を帯びた歴史の中に投入されることとなる。ナショナル・アイデンティティは普遍的なものではなく、時代によって変容するものである。台湾の人々は様々な外来政権によって支配され、近代化の中で「日本人」や「中華民国人」として生きざるを得ず、やがて「台湾人」としてのナショナル・アイデンティティを選び取っていった。

現在の台湾に住む人々がどのような自己認識を得ているのか、それは台湾政治大学選挙研究中心が行った世論調査¹²において、如実に表れている。台湾の人々の自己認識は「台湾人」「台湾人であるし、中国人でもある」との回答を合わせると9割を超える。この結果から鑑みると、現代の台湾に住む大多数の人々が自分たちを「台湾人」と認識しているということが明らかである。実際に、台湾の人々に「你是哪國人？（あなたは何人ですか？）」と問えば、必ず「我是台灣人。（私は台湾人です。）」と返ってくる。台湾で中国語を学ぶ外国人向けの教科書のどこにも「中華民国人」の文字は無いのである¹³。中華民国人ではなく「台湾人」と答えることから、台湾にはナショナル・アイデンティティの存在が明白である。

そして台湾には『四大族群¹⁴』が住んでいる。人口比で言えば明らかに少数派の原住民族を含んで「『四大』」というのは、この言い方が台湾社会における文化的多様性の相互尊重をうたう、台湾住民のナショナル・アイデンティティについての理念を下敷きにしている(傍点ママ)¹⁵からである。つまり、若林(2001)が「多重族群社会」とあらわしたように、台湾は多民族の集合体である。

川上(2003)は、ナショナル・アイデンティティには「参加と動員」の両面が存在すると指摘し、「3つの機能¹⁶」から、特に三つ目の「同胞愛の実現」に関して、動員と参加のアイデンティティの側面から以下のように触れている。

パレードや追悼式典などは「文化的紐帯と政治的類縁性を思い出させる」だけでなく、現実には人々を文化的、政治的行事へと動員することである。すなわち、国家のアイデンティティは、人々を吸引し、組織しようとする。したがってそれは、「動員のアイデンティティ」という特徴を持つ。一方個人の側は、パレードや記念式典などに参加し、それにナショナルなアイデンティティを体感する。それは参加することによって感情移入することであり、「参加のアイデンティティ」と呼ぶこともできよう。国旗や国歌は憲法によって制定されるという動員的な側面を持つと同時に、実際にそれを目にした耳にして、人々がそこに「ナショナルなもの」を感じる時にはじめて国旗や国歌として成立する。したがって、ナショナル・アイデンティティとは、「動員のアイデンティティ」と「参加のアイデンティティ」の2つの側面が結合されたときにはじめて生成するということができる。¹⁷

これに次いで川上(2003)は、ナショナリズムはこの動員のアイデンティティに比重が傾いたときに発現する現象であると述べ、スミス(1991)が著書の中で、ナショナリズムとナショナル・アイデンティティの概念を厳密に区別出来ていないのは、双方の比重を区別しなかったからであると指摘す

¹² 「臺灣民眾臺灣人/中國人認同趨勢分佈(1992年6月～2016年12月)」<http://esc.nccu.edu.tw/app/news.php?Sn=166#> (2018年7月5日閲覧)

¹³ 國立臺灣師範大學國語教學中心で作成、使用されている『當代中文課程1課本』においても「他是不是臺灣人？(彼は台湾人ですか?)」「是、他是臺灣人。(はい、台湾人です。)」という例文がある。

¹⁴ 四大族群とは、①原住民族、②福佬人(閩南人)、③客家、④外省人(漢族、モンゴル族、回族、満州族なども含む)の四つのグループを指す。(若林正文『台湾:変容し躊躇するアイデンティティ』(薩摩書房、2001)、pp.30-31。)

¹⁵ 同上、p.31。

¹⁶ 川上はスミスの「3つの機能」である「個人的忘却(personal oblivion)」、「集团的尊嚴の回復」、「同胞愛の実現」をそれぞれ、「(1)子孫を通じて忘却をのりこえること、(2)黄金時代への訴えかけを通じて集团的尊嚴を回復すること、(3)共同体の、いま生きているものと死者や戦没者とを結びつける、象徴、儀式、式典を通じて同胞愛を実現すること」と端的に要約している。

¹⁷ 川上勉「第4章 ナショナル・アイデンティティの2つの側面—動員と参加—」『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』(晃洋書房、2003)、p.73。

る¹⁸。

台湾のナショナル・アイデンティティを論じるにあたって、川上の論に依拠したとき、台湾では「文化的、政治的行事」が行われ、それに個人たちが参加しているかについて考察しなければならないだろう。参加・動員のアイデンティティとして挙げられるのは、2004年に行われた「人間の鎖」が良い例である。人間の鎖は政治的な抗議や要求を伝える、一種のデモ行為である。台湾だけではなく、ソビエト連邦からの独立を望んだバルト三国や、スペインからの独立を望んだカタルーニャ、また、嘉手納基地への反対運動として沖縄県でも行われている。

台湾で行われた人間の鎖は、当時の台湾総統であった李登輝の呼びかけのもとで『台湾のために祈る集い』と銘打って開催され、(中略)『人間の鎖』で台湾西部の北から南まで200万人が手を繋ぎ、中国の台湾に向けたミサイル配備に抗議した¹⁹ものである。総統の企画した「政治的行事」に台湾の一割にもほる人数が集まったことは、特筆すべきことであろう。

また他の例を見てみる。台湾で行われる軍事演習と言えば「漢光演習」が有名である。特に、戦後70周年に当たる2015年に行われた「漢光三十一號」では、例年の軍事訓練に加え、「抗戦勝利兼台湾光復70周年(正式には抗戦勝利暨臺灣光復70週年²⁰)」を記念した軍事パレードが行われた。この演習に際して、国防部はFacebook上で200名の一般見学者を募った²¹。ここに川上の述べる動員と参加のアイデンティティが働いていると言える。しかしながら同時に、これは非常に限定されたものであると言わざるを得ないだろう。

さらに、当時の台湾総統であった馬英九は、「パレードでの演説で日中戦争当時の国民党軍の戦いぶりを振り返り、『血と涙の歴史は忘れてはならない』²²」と述べた。これには日中戦争において日本軍と戦ったのは国民党軍であり、国民党党首としての自負からの発言であろうことが推察できる。しかし、「戦争当時の台湾人は日本人として戦った経緯があり、中国での経験を出発点とする国民党の歴史観に共感しない人も多い²³」と語られるように、台湾の人々の反応は様々であった。翌月14日付の同社朝刊では、中国河南省出身の志願兵だった老人が中国の国歌である「義勇軍進行曲」に対して並々ならぬ思い入れを語っている。その一方、同記事の中で、台北市の大学院生である林有容氏は「抗戦と言ったって中国の話。台湾とは何の関係もない。(中略)祖父は抗日戦争を戦ったこともない。(馬政権は)誰の話をしているのかと思う²⁴」とインタビューに答えており、その温度差は激しい。

ここに外省人と本省人という二項対立は描きやすいが、それでは陥穽に陥りかねない。ここには、外省人・本省人という要素以外にも、実際に日中戦争を戦った世代と経験していない世代というジェネレーションの要素も存在するだろう。「新台湾人」意識を超えた新たな意識である「もう一つの台湾人意識²⁵」の誕生が特に若い世代に芽生えていることを考えれば、「抗戦勝利兼台湾光復70周年」パレードの限定的な公開のみを見て、参加のアイデンティティに行きついていないと結論付けるのは時期尚早だろう。これをさらに立証するには世代間の意識の異同を観察しなければならないが、本論では台湾のナショナル・アイデンティティの萌芽を明らかにすることが目的であることからして、これ以上の言及は控えることとする。

¹⁸ 川上勉「第4章 ナショナル・アイデンティティの2つの側面—動員と参加—」『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』(晃洋書房、2003)、pp.67-75。

¹⁹ 週刊朝日「迫る、台湾総統選! それでも国民党・馬英九が敗北する『現実味』」2008年3月28日刊行

²⁰ 中華民国国防部HP 軍事新聞「國軍7月4日湖口『國防戰力展示』弘揚抗戰精神」2015年4月15日付(2017年5月24日閲覧)

²¹ 台湾国防部公式アカウント「國防部發言人」(2018年7月13日閲覧)

https://www.facebook.com/pg/MilitarySpokesman/photos/?tab=album&album_id=933763033353682

²² 朝日新聞「台湾、日本への対応苦心 中国意識、大規模軍事パレード」2015年7月5日付朝刊

²³ 同上。

²⁴ 朝日新聞「抗日戦70年、割れる台湾」2015年8月14日付朝刊

²⁵ 李登輝が提唱した「新台湾人意識」を引き継いで、政治や独立か統一かといった議論をとりあえず置いたまま、現時点の自分たちの経済活動などのみを注視する新たな若い世代のこと。(川原絵梨奈「『新台湾人』の議論と政治意識をめぐって」『アジア社会文化研究(10)』(アジア社会文化研究会、2009)、p.108。)

2. 「台湾」の萌芽と民族意識

オランダによって初の外来政権を迎えた台湾は、以来数々の外来政権によって被統治者としての道を歩む。17世紀から約400年に渡って複雑な形成を遂げたため、台湾、台湾人、台湾文学などの語に対する定義付けは曖昧な部分が多い。

オランダが最初の外来政権として台湾に38年間君臨した後は、鄭一族の占領、清朝の統治、日本への割譲と相次いで政権が交代し、台湾領内は混乱を極めた。清朝が1683～1895年までの約2世紀に渡って台湾統治に乗り出した結果、大量の漢族移民が流入し、平地に住む原住民族との混血化が進んだ。この原住民族たちを平埔族といい、混血化していくことで原住民族たちの文化は急速に漢族化していった。また一方で、山地に住む高山族と呼ばれる原住民族たちとの対立は深まり、清朝の統治は部分的なものに留まったとされる。

1895年の日清戦争終結の後に締結された下関条約によって台湾が清朝から割譲されると、日本は台湾の統治のために同化政策による言語教育を推し進めた。日本語教育が円熟期を迎えると、日本語読書市場が育ち、日本語で書かれた文学作品が次々と出版されるようになる。日本語文学作品の中には「外地」の表記が往々にして見られる。それは大日本帝国の勢力圏が本州、いわゆる「内地」からの広がりを見せたからである。台湾の割譲を筆頭に、1905年のポーツマス条約では南樺太の割譲が行われた。さらに1910年の日韓併合条約による朝鮮の併合、1922年のヴェルサイユ条約締結による南洋群島の委任統治を行い、大日本帝国は次々に東アジア諸国を主権下に置いた。また支配は及んでいるが学術上 colony (= 植民地) とは呼べない租借地である関東州や満州、上海租界、フィリピン・ベトナム・ラオス等の南方諸地域をも勢力下へと置いた。

これらの事実から統治を行った台湾、南樺太、朝鮮、南洋諸島と、当時勢力下であった関東州やフィリピン等を一括して「外地」と称することが多い。黒川創 (1996) は『「外地」とは、第二次世界大戦敗戦にいたるまで、日本国家が「本土」の外に出て領土拡大をはかった諸国・地域をさしている²⁶⁾』と定義する。木村一信 (2014) は黒川の考えに、より辞書的な定義を加え、次のように定義するのが一般的であると述べる。

- (1) 国外の地。
- (2) もと、日本固有の領土を内地といったのに対して、それ以外の領有地、すなわち「朝鮮」・台湾・「樺太」などの総称。
- (3) 日本人社会が形成されていた所、すなわち、ハワイや南米、南洋群島などの移民たちの住んでいた場所、さらに、旧満州や上海の日本人租界地、アジア太平洋戦争下に軍政のおこなわれていた地域などを指す場合。²⁷⁾

しかしながら、「外地日本語文学」と語を用いた場合、その「外地」の定義は狭義のものとなる。木村 (2014) は「外地と日本語文学とを一つの用語として組み合わせた場合、狭義の外地なる語は台湾、『朝鮮』、旧満州、『樺太』、また、南洋諸島といった地域に限定される²⁸⁾』とした。本論で述べる「日本語文学」もこの定義に準じる。

オランダ統治期と鄭氏政権時代には、宣教教育や科挙教育などの文化政策が試みられたが、統治期間が短かったため、台湾住民のアイデンティティ形成に大きな影響を与えることはなかったと考えられる。

清朝統治期になると、漢族移民の原住民族女性との通婚により台湾での混血化が進み、大陸の科挙集団の流入が台湾の儒教化の進展と土着化を促した。しかしながら、台湾が日本に割譲された時期に

²⁶⁾ 黒川創編『〈外地〉の日本語文学選 南方・南洋/台湾』(新宿書房、1996)、p.5。

²⁷⁾ 木村一信『「外地」日本語文学への射程』(双文社出版、2014)、p.6。

²⁸⁾ 同上、同頁。

においても「台湾民主国」を建国しようとしたものの、達成されるほどの「台湾」住民の全島に及ぶ団結は叶わず、部分的な運動に留まった。このことから清朝統治期においても、確固たるナショナル・アイデンティティの形成は行われなかった。

日本統治期には台湾住民を日本人とする同化政策やその後の皇民化運動による日本語教育が成功し、日本語読書市場の拡大や「内地²⁹⁾」への留学による各分野の専門家の輩出に繋がった。日本からの統治の解放による期待は、その後の国民党の外省人に対する優遇と本省人に対する不遇といった国民党の失政ゆえに本省人と外省人の不和を生み「2・28事件」へと発展する。反国民党、反外省人という意識の高まりは、「中華民国」としてのアイデンティティ形成ではなく、本土化と呼ばれる「台湾」化へのアイデンティティの形成に決定的な影響を与えたものと考えられる。またその後のアルバニア決議による中華民国の国連脱退によって「中華人民共和国」籍への強制変更を危惧した一部の台湾人が沖縄で日本人に帰化している。以上のような歴史的背景から、台湾の文化は民族や言語、文学などの様々な要素によって重層性のある歴史や文化を築いてきた。ゆえに、台湾の歴史や文化、民族など多くの境界領域が存在する。

台湾のナショナル・アイデンティティにはネイションとエスニック・グループの問題が大きく影響している。時代によって台湾意識はその内実を変化させてきており、日本統治時代には「被支配者」としての共通意識が漢族グループと原住民グループの境界を揺らがせてきた。また、日本の統治が長くなるに連れ、内地を知らない台湾生まれの日本人—湾生が誕生する。「内地人—外地人」という対立勢力に「湾生」が加わることで、エスニックとネイションの関係がどのようになっていったのか一考する必要がある。そのため、本節では第一に、日本人作家の川合三良の作品から湾生が内地をどのようにまなざしていたかについて考察する。そしてその後に台湾作家の呂赫若の作品から台湾が日本の統治をどのように受容していたのかについて読み解く。

(1) 日本人作家・川合三良『轉校』『或る時期』と民族意識

日本統治期の台湾では、同化政策を推し進め、統治の終盤には皇民化政策も行ったことからナショナル・アイデンティティを日本と同一化させる動きを見せていたと言える。その動きの中には内地人と外地人の子どもの共学化や「国語常用家庭」の推進、「内台共婚法」の制定など、学校教育や家庭教育、また政治などの各側面からのアプローチが存在した。しかしながら、統治開始から特に最初の20年に集中して、同化の動きに対抗した人々がいた。その一つに霧社事件がある。霧社事件の後、1931年6月に全国大衆党は国会で台湾総督府の対応を批判し、その背景には原住民族に対する侮蔑や差別が見られると指摘した。当時台湾で書かれた日本語文学作品ではこのような内台共婚法や霧社事件などの社会情勢を反映させた作品が多く描かれている。特に、差別や侮蔑が表れている作品の一つに川合三良³⁰⁾の作品『轉校』がある。

『轉校』の初出は1941年5月発刊の『文藝台湾』である。本作に触れる前に、雑誌『文藝台湾』の立ち位置を述べておきたい。『文藝台湾』は西川満が私財を投じて1940年の1月に創刊された雑誌である。「『文芸台湾』はその後も、『華麗島』の残滓を長く引き摺るが、『台湾文学』派の批判の対象となったのは、こうした『華麗島』以来の異国趣味に基づく芸術至上主義的傾向であろう³¹⁾」と考察さ

²⁹⁾ 台湾や南樺太だけではなく、租借地である関東州や満洲などを一括して「外地」と呼ぶのに対して、日本本州を「内地」と呼んだ。

³⁰⁾ 川合の略歴に関しては、川合の長男である高田良助氏に直接聞き取り調査をしている松尾教史(2009)の「台湾時代における川合三良の文学作品:ある在内地人作家にとっての皇民化政策」が詳しい。川合三良(1907-1970年)は大阪に生まれ、幼少期を台湾で過ごす。父の川合良男は、領台直後から政商として台湾と内地を往来していた。幼少期は台湾に住んでいたとされるが、台湾で小学校に通っていた記録はなく、その幼少期は未だ謎が多い。明確な記録があるのは日本に帰国してからである。岡山県立第二中学校、第六高等学校を卒業した。その後京都帝国大学国文科を卒業すると、1935年に渡台。創作活動は1938~1941年までの三年間と短い、1940年32歳の時に文芸台湾賞を受賞している。

³¹⁾ 垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要(2)、102-110』(横浜国立大学、1995)、p.108。

れるように、台湾詩人協会の機関誌『美麗島』を引き継ぐ形で創刊された。『文藝台湾』は西川のスタンスに大きく依拠し、また1941年9月発刊の2巻6号からは皇民化運動に協力的な立場を取りながら作品が発表されるようになっていった³²。それゆえ反発も大きく³³、中山侑らは張文環を中心として1941年5月に『台湾文学』を創刊した。『文藝台湾』と『台湾文学』の違いはクリーマン（2007）が以下のように述べている。

『文芸台湾』は「純」文学の牙城として、専らロマンティックな詩、小説、芸術、民話を扱っていた。一方『台湾文学』は、農民や虐げられた人々の生活の厳しい現実を反映した、リアリスティックな表現を標榜した。³⁴

ロマンチズムの『文藝台湾』とリアリズムの『台湾文学』という対立は同氏いわく、誇張されたものであるという。実際には、リアリズムは『台湾文学』のみにあつたわけではなく、浜田隼雄の『南方移民村³⁵』や、西川の『台湾縦貫鉄道³⁶』などにも見られた³⁷。また、『文芸台湾』の芸術至上主義も『台湾文学』に対抗して後に方向転換していく。

そんな『文芸台湾』に方向転換の兆しが見え始めるのは、1941年9月発行の2巻6号からである。この号は志願兵をテーマとした小説、周金波の「志願兵」、川合三良の「出生」のほか、戦争誌特集を組むなど戦時色を強く打ち出した編集となっている。³⁸

このようにロマンチズムとリアリズムの対立は『台湾文学』が創刊される前までのことであるとも言えよう。垂水（1995）によれば、このような単純化された対立は「大政翼賛運動の一環である『地方文化の振興』の方針」が『台湾文学』派たちの独立の大義名分として利用された結果である³⁹。そんな中でも川合の作品は、西川や中山たちとの立ち位置が異なるものであると言って差し支えないだろう。川合三良の先行研究は極めて少ない。管見の限りでは先ほど引用した通り、垂水（1995）は「戦時色を強く打ち出した」作品として触れた程度であり、研究としては唐瓊瑜（1997）⁴⁰が周金波との「二世」比較として取り上げたもの、そして松尾教史（2009）⁴¹と中島利郎（2012）⁴²がそれぞれ一本ずつ論

³² 同上、pp.108-109。

³³ 西川の評価に関して、クリーマンは1980年代の郷土文学運動の中での張良澤と陳映真を取り上げている。西川の台湾への愛着を「台湾意識」を形成する上での肯定的な貢献と捉える張に対して、現地文化への愛着を純粋な異国趣味として一蹴する陳という対立論争を「郷土主義と民族主義の衝突」だと指摘する。（同上、pp.112-114。）

³⁴ フェイ・阮・クリーマン 著・林ゆう子 訳『大日本帝国のクレオール（植民地期台湾の日本語文学）』（慶應義塾大学出版会、2007）、pp.109-110。

³⁵ 台湾東部の日本人移民の厳しい生活を記録した長編小説。クリーマンは『南方移民村』にリアリティが見られると述べたが、「濱田はリアリズムの立場に立って『南方移民村』を書いたが、国策を反映して移民たちの生き方を書き損ねている」と考察する研究もある。（黄振原「浜田隼雄『南方移民村』論」『論究日本文学』（63）、22-32』（立命館大学日本文学会、1996）、p.32。）

³⁶ 西川の唯一の歴史小説。島を横断する鉄道建設の隠喩的記述を通して1895年以降の台湾の歴史を凝縮したもの。

³⁷ フェイ・阮・クリーマン 著・林ゆう子 訳『大日本帝国のクレオール（植民地期台湾の日本語文学）』（慶應義塾大学出版会、2007）、p.110。

³⁸ 垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要（2）、102-110』（横浜国立大学、1995）、pp.108-109。

³⁹ 同上、p.109。

⁴⁰ 唐瓊瑜「『二世』から見る、戦前における台湾文学」『第21回国際日本文学研究会会議録（21）、55-68』（国文学研究資料館、1998）

⁴¹ 松尾教史「台湾時代における川合三良の文学作品：ある在内地人作家にとっての皇民化政策」『Core ethics（5）、305-314』（立命館大学、2009）

⁴² 中島利郎「日本統治期台湾文学研究：台湾における川合三良—静謐なる抵抗—」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編（51）、61-84』（淑徳大学、2012）

じているものしかない。

台湾におけるナショナル・アイデンティティを語るうえで、台湾の人々がどのように内地をまなざしていたのかという視点は不可欠である。それと同時に、後に故郷と呼ぶべき場を失うこととなる湾生たちの、内地への視座を読み解くことも「台湾」を浮き上がらせるためにも必要と考える。そのため、本稿では川合三良の『轉校』とその続きとなる『或る時期』を分析する。

『轉校』では、大正初期に台湾から内地の小学校へと転校をした少年、竹田洋一が湾生を理由に「生蕃」と呼ばれ、内地の子どもたちに馴染めない様子が描かれている。

洋一は、父の故郷であるこの町の小学校へ変つて来ると、すぐ生蕃といふ渾名をつけられた。たゞ台湾から転校して来たと言ふ理由からである。まだ大正も初期の、ことに田舎の小学校では、台湾から転校して来ると言ふのは何か非常に物珍しい事に違ひなかつた。そして台湾といへば、すぐに生蕃が連想されるのであった。中にはまるで異国人だとしても思つているのか、彼の頭の先から足の先まで念入りに見廻す生徒もあつた。⁴³

物語の設定が領台から20年程度しか経っていないことや、田舎という土地柄を理由に洋一は「生蕃」と揶揄される。また、「異国人だとしても思つているのか」という一文からは、台湾が一般の人々にとって未知であることを示し、そこから来た洋一に対して未開の地から来たような異国人に対する奇異を読み取ることができる。さらに本文中では鮭とたくあん、梅干しが入った弁当を食べている洋一を見て、「生蕃のくせに、わし等と同じものを食つとるぞ⁴⁴」と殊さらに囁き立てる同級生の姿や、誰かが放屁したと同時に火鉢の前にやってきたことで「生蕃が来たと思ふたら、臭い臭い。あゝくさいくさい⁴⁵」と洋一をからかう少年たちの姿が描かれている。「生蕃」が「わしら」日本人と同じものを食べていることへのからかいには、外地人を一括して見下すような侮蔑意識が読み取れるだろう。また一方で、洋一といじめっ子が喧嘩をし、それを咎める教師が生徒たちに以下のように説く場面がある。

生蕃とは何か。皆はまだ地理や歴史を教はらないから、或はよく知らないからも分からないが、生蕃も立派な日本人です。台湾で生れたからと云つて、竹田は皆と同じ様に内地人です。⁴⁶

この教師の言葉は一見して台湾に対する理解が示されているように見える。しかしながら、その実は異なる。台湾の原住民族たちを日本人と言いつつながら、湾生の洋一を内地人と評する教師の言葉からは「内地人」と「外地人」を異なるエスニック・グループであると分類している。これが意識されているものか、無意識のものかは判然としませんが、ネーションを「日本」としながらも異なるエスニック・グループに属する相手とし、明らかな差異・差別があったことが示唆されている。当時日本側の視座にはネーションを同一と規定しながらも、エスニック・グループに優劣をつける思想が根底にあったと言える。

また、洋一の血統は日本であるにも関わらず、子どもたちは彼を「生蕃」と揶揄する。これには「台湾人」という民族集団に対する差別よりも「台湾」という土地そのものに対する差別意識が存在したと言えるだろう。このことから、ネーション、エスニック・グループの二者構造に、台湾という土地に住む者—マイノリティ集団としてのアイデンティティの三要素を加味して語られねばなるまいと考える。すなわち、「内地人（日本人）—外地人（台湾人）」という対立は、あくまでも台湾内において語られる文脈であり、内地と外地という対立を描いたとき外地には在住の日本人と台湾人が同列で括弧付けられる。それゆえ、ナショナル・アイデンティティは「外地」と「内地」では異なるものであ

⁴³ 川合三良「轉校」『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 第五巻』（緑蔭書房、1998）、pp.433-434。尚、引用文は仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字に置き換えた。

⁴⁴ 同上、p.433。

⁴⁵ 同上、p.435。

⁴⁶ 同上、p.436。

ったと考えられる。

また次いで、主人公洋一の大学生時代を描いた作品である『或る時期』も見ていく。『或る時期』は『轉校』に続いて、1941年7月に発刊された『文藝台湾』第2巻第4号初出の自伝的短編小説である。大学生になった洋一は「精神的に受けた打撃」を癒すため、台湾へと気晴らしに行く。「あるひっかかりのために、卒業近くなつて停学処分にあひ⁴⁷⁾」、卒業が一年延びたという主人公の事情に関しては、筆者の川合自身が京都大学在学中に反戦活動を行っていたことから、それに依拠したものだと考えられる。

主人公の台湾育ちの従姉妹、妙子は外地人の中に括られる日本人であった。

妙子は台湾育ちのため、皮膚の色が土色であることを気にしながら、ある程度のおしやれの技巧と媚態とを心得て、自分の容貌に対しては、ひそかに相当の自信を抱いてゐた。映画と音楽とが好きで、一週間の中、決つた日々に洋裁と生花との稽古通ひ、台湾特有の東京語を使用し、内地殊に東京といふ言葉に漠然とした憧れを持つてゐた。そして、人種の卑見に基くらしいある種の気位の高さを保持してゐた、と附加へれば、台湾の中流以上の家庭の娘によく見かけられる、ごく平凡なタイプの一例であった。⁴⁸⁾

「台湾特有の東京語」が言語学でピジン言語⁴⁹⁾にあたるものか、または「東京語」と使われるような方言のようなものなのかについては史料の制限から考察するには足りない。しかしながら、ここからは当時の台湾がある種独自の言語文化を形成し始めていたことが読み取れる。このような言語状況からも、湾生の間には東京に対する憧れと同時に内地人とはまた異なる意識が誕生していたようにも思われる。

『轉校』に描かれるネイションとエスニックの重複は内地に転校した主人公の視点から考察した。続編に当たる『或る時期』では、内地に行ったことのない、湾生の少女についても描かれている。湾生の少女、妙子は内地、特に東京に対する漠然とした憧れを抱いている。これは、内地が外地に比べて文化的に進んでいる、都会への憧れを反映していると見て相違ないだろう。それに対して、「人種の卑見に基く」気位の高さも持ち合わせていることから、「日本-台湾」という対立構造への劣等感と同時に、台湾島内における「日本人」という人種的な優位性を見出していることがわかる。このようなことから、日本人と台湾人、湾生の出生的立場、そして内地か外地かという身体の地理的立場によってナショナル・アイデンティティが異なってくるだろう。

以上の旨を図示したものが図1である。図1の左図は従来考えられてきたような、内地人から外地人に対する優位性を示すものである。内地日本ではネイションとエスニックが共に「日本」であり一致する。しかしながら、外地台湾の方ではエスニックは漢族もしくは原住民族であるのに対し、ネイションは日本となり、ねじれた状態にある。当然一つのネイションに対し複数のエスニックを有する国は存在する。しかし、この当時ネイションの意識がなかった台湾の人々にとって、強引にネイションに組み込まれたことによって、そのアイデンティティ形成は難解なものとなるのである。日本統治の後期にはこのエスニックがネイションとしての形成を遂げ始め、国民党統治時代になると省籍の対立から「台湾」としてのネイションを確固たるものへ変化させていく。

また内地人から外地人へと延びている矢印は優位差・差別意識を表している。つまり左図は従来通りの「支配者-被支配者」の二項対立構造である。

右図はエスニックやネイションの形態は同様だが、外地台湾には「台湾人」だけでなく、日本とい

⁴⁷⁾ 川合三良「或る時期」『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 第五巻』（緑蔭書房、1998）、pp.443-444。

⁴⁸⁾ 同上、p.455。

⁴⁹⁾ 複数の言語の単純化された混成語を指す。一時的な言語であったものもあれば、パプアニューギニアの公用語となっているトクピジンなど、その後クレオール化し制度化されたものもある。（日本語教育学会編；水谷修〔ほか〕編集『新版 日本語教育事典』（大修館書店、2005）、p.507、p.540。）

う視座も存在する。『轉校』の中で描かれているのは「内地」日本人から「外地」日本人への差別である。ここには既述したように、内地から「外地」という土地そのものに対する差別意識が存在するのである。ゆえに土地そのものへの矢印とともに、台湾の中で日本人から台湾人への矢印のように二項対立に留まらない対立意識が『轉校』の中から読み取ることができる。

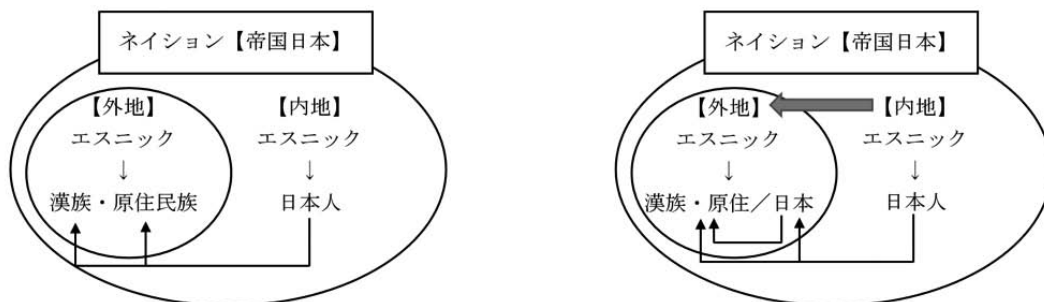


図1：『轉校』におけるネイションとエスニックによる対立構造（筆者作成）

(2) 台湾人作家・呂赫若『隣居』と家族国家観のメタファー

小熊英二（1995）によれば、大日本帝国は「実態において多民族帝国であり、そのままで単一民族神話を許さなかった⁵⁰」。優生学的な思想は西欧が発祥であるが、その思想が当時の日本においても人々の意識下だけでなく、ネイションの意識下に存在したことは先述した通りである。優生学は往々にして血統主義、純血主義に換言される。

本来純血主義は、異なる民族の受け入れを拒否するものである。それは近代史上の多く事例からも明らかであり、純血論は人種主義⁵¹の立場に立ちやすくなる。また同氏が「教育その他に多額の予算を要し原住民の反発も大きい同化政策がコスト的にデメリットであることが明白になっており、英仏などほとんどの植民地宗主国は同化政策を放棄していた⁵²」と述べるように、同一の民族に同化させるのではなく、異なる民族として排除する動きが世界の潮流であった。この世界の潮流から考えると、大日本帝国の同化政策は時代に逆行したものであった。「内台共婚法」によって内地人と外地人の婚姻にどの程度影響を与えたかは考察の余地を残すものの、このような法制化は大日本帝国が民族の「混血化」を忌避していないことの証左に他ならない。

しかしこの点のみを挙げて日本の血統主義の薄さを示すことはできない。混合民族論は、『日本人』の血統意識を放棄したのではなく、帝国の実情にあわせてそれを拡張した⁵³イデオロギーである。そのことから「太古から様々な異民族を統治・同化した経験に富む民族⁵⁴」であるため血が混ざっていくことによって、「日本人」化していく外地への同化政策が、差別の解消であるという建前を生み出した。ゆえに、「内台共婚法」を始めとする同化政策は、混血化による差別意識の解消という建前に隠された、ネイションへの帰属意識を日本へと切り替えるものであり、台湾の数多あるエスニック・グループを解消させ、「日本」へと統合するものであったと言えよう。さらに日本が自民族の純血を放棄し、同化政策の受け入れが比較的容易であった背景には日本の「家制度」が関係していると考えられる。小熊（1995）は以下のように指摘する。

決定論的に家制度が社会を規定しているかどうかはともかく、少なくとも家族国家論というか

⁵⁰ 小熊英二『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）、p.370。

⁵¹ 社会学において、人種主義は「マイノリティに政治的美容同や市民権は与えられない」ものである。とされ、同化主義は「マイノリティに政治的平等は与えるが、文化的にも同化が求められ、すべてのエスニック集団の解消をめざす」ものであると区別されている。（同上、P.365。）

⁵² 同上、pp.372-373。

⁵³ 同上、p.372。

⁵⁴ 同上、p.364。

たちで論じられる同化政策論に、家族制度が反映していないはずがない。喜田貞吉や亙理章三郎をはじめ、朝鮮・台湾の家族国家における位置を「養子」と表現することは、当時きわめて広範だった。そして日本の家制度で育った人間にとって、養子は出自を忘れ名を変え、養家の家風に同化するの当然のつとめである。逆に日系移民がホスト国に同化するさいには、自分たちは養子であるというアイデンティティがとられたことが知られている。⁵⁵

上述のように養子になることで「血統上の祖先とはべつに、制度としての祖先は天皇になる⁵⁶」のである。特に皇民化政策の名の下に、帝国臣民へと切り替えていく動きは、台湾や朝鮮、その他の外地を養子であると規定することで日本というイエに積極的に組み込むものであったと言える。このような「家族国家観」を根底に据えた同化政策は台湾側にどのように受容されていたのだろうか。

天皇を父とし、国民をその子であるとする家族国家観の思想は、帝国日本において植民地を統治するうえで大義名分を日本に与えた。八紘一宇⁵⁷のスローガンは台湾にも広く流布され、皇民化の基本原理として統治者側に都合よく作用した。横路啓子（2013）は「日本帝国の版図に組み込まれた時点ですでに皇民であるはずなのに、皇民となるためにより強い努力を求められるという矛盾、それは大東亜共栄圏という虚偽の共同体での台湾の人々の位置を宙吊りにするものであった⁵⁸」と指摘する。さらに同氏は八紘一宇の家族国家観における血縁の概念は、台湾の人々にとって受け入れがたいものであったと考察している。その背景には日本の家族制度と、中国や台湾、朝鮮の父系血統に基づいた家族制度との違いが考えられる。

小熊英二（1995）は「中国や朝鮮などでは、父系の血統を示す『姓』は、一生変わらず」、さらに「同姓不婚・異姓不養の原則」があると述べる。それゆえ「朝鮮などでは『姓』を変えることはおよそ考えられ」ず、「創始改名への反発は大きかった」のである。しかしながら、日本においては、婚姻によって男女問わず「名字とよばれる『氏』は、簡単に変わってしまう」ものである。つまり、「姓」は父系血統の名称であるのに対し、「氏」はイエの名称であり、父系血統とは直結するものではない⁵⁹。

日本において父系血統を重視しない事実は、戦国時代には立花宗茂⁶⁰や小早川隆景⁶¹などの例を見ても明らかである。江戸時代に至っては、入り婿による家督相続は武家のみならず、商家にも裾野を広げる。人形浄瑠璃の代表的な演目である「曽根崎心中」の徳兵衛の例などもまさにその通りであろう。このようなことから鑑みれば、父系血統を重視する中国や朝鮮が、イエを重視する日本の家族観と馴染まなかっただろうことは理解できる。

台湾では漢族グループが多いことから、父系血統が重視されることは明白である。台湾の統治が成功した背景にはその統治期間の長さも一因とされる。横路（2013）は「戦争期の台湾文学では、確か

⁵⁵ 小熊英二『単一民族神話の起源〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）、p.380。

⁵⁶ 同上、p.381。

⁵⁷ 『日本書紀』巻第三にある神武天皇の「橿原遷都の令」中の「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と為んこと、亦可からざらんや」より引用された言葉。1940年の第二次近衛内閣の「基本国策要綱」（1940年8月1日）によって「皇国の国是」に格上げされ、アジア共同体の理念として大東亜共栄圏が提唱されるようになった。

⁵⁸ 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』（東洋思想研究所、2013）、p.40。

⁵⁹ 小熊英二『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）、pp.377-378。

⁶⁰ 立花宗茂（1567-1643）：陸奥棚倉藩主、筑後柳河藩の初代藩主。豊後・国東郡寛（大分県豊後高田市）に吉弘鎮理（のちの高橋紹運）の長男として生まれる。1581年に男児の無かった立花道雪に養子として迎えらる。このとき、宗茂は実質的に立花家の家督を継いでいた道雪の娘・閨千代と結婚して婿養子となり、家督を譲られたが子に恵まれず、実弟直次の子・忠茂を養嗣子として迎えた。

⁶¹ 小早川隆景（1533-1597）：毛利元就の三男として誕生。竹原小早川家の当主・小早川興景が後嗣の無い状態で死去したため、1543年に当主として立った。また、小早川の本家である沼田小早川家においても、当主・小早川繁平を隠居・出家に追い込み、繁平の妹を娶ることで家督を継ぎ、沼田・竹原の両小早川家を統合した。しかしながら子に恵まれず、木下家定の五男で豊臣秀吉の養子であった羽柴秀俊（のちの小早川秀秋）を養子として迎え、家督を譲った。

に共通したメタファーが見られる」として、「日本帝国が掲げた家族国家日本、大東亜共栄圏という大きな物語のもと、台湾島内で生まれた文学」がその言説を擬態し、メタファーを用いたり、抵抗したりしていたと指摘する⁶²。言語政策や教育機関の設置といった制度の整備を整えることによって、日本語世代の台頭が日本語読書市場の発展を支えることとなった。台湾人作家たちの日本語の円熟期を迎えるほどの統治期間がなければ、このように「台湾島内で生まれた文学」が家族国家観に対して抵抗も恭順も、あるいはそれらを超越した言説も見られることはなかったであろう。

日本が台湾を統治する中で、日本人作家と台湾人作家が共通して重要視した歴史人物は鄭成功であると横路(2013)は指摘する。日本では台湾統治を始めるよりも以前、1715年に近松門左衛門の「国性爺合戦⁶³」が人気を博したことから、鄭成功の名は周知されていた。日本の統治の正統性を巡る言説の一つには、鄭成功の母が日本人であったことで、台湾と日本を結ぶ英雄がいたのだとするものがある。このような構図を描くことで、「台湾知識人の中の、家族国家日本の言説に基づいた皇民化を否定する言説⁶⁴」に対する「一種の反駁」として鄭成功の「混血」性は台湾を養子とする八紘一宇を掲げる帝国側に都合よく利用されていた。

しかしながら養子をめぐるとこの言説を冷静な目で捉えていた作家も存在する。それが呂赫若⁶⁵である。以下では呂の『隣居』から養子としての台湾を論述してゆく。

『隣居』は1942年に雑誌『台湾公論』第82号に発表された呂赫若の短編小説である⁶⁶。呂はこの作品を発表した同年の5月に2年間の内地日本留学から台湾に戻っている。その年の10月に発表されたことを考えると日本での経験を経て、台湾に帰国した後に書かれた作品だろう。その日本語力は『隣居』を読めば明らかである。語彙力と文章力についてはクリーマン(2007)が次のように述べている。

呂赫若(1914～51年)は、最も巧みかつ円熟した戦前の郷土文学作家である。呂には楊逵の社会的使命と張文環の現地的リアリズムを網羅しつつ、洗練された、高度に個人的な文学を生み出す力があった。(中略)呂の作品は一貫して構成に優れ、権威ある声で語られ、微妙な陰影をつけた登場人物であふれ、彼らの中に作者の真の共感が表されていた。⁶⁷

呂は日本語教育を受けて育った世代である。それゆえ、呂の作品は日本人作家と比べても決して遜色ない域に到達していたと言えよう。ここでクリーマンが述べているように呂の書く作品の登場人物が「微妙な陰影をつけ」られた人物であるということは『隣居』にも通ずるところがある。その上で『隣居』の語り手である陳先生を始め、台湾人の李夫妻の中に「作者の真の共感が表されている」ことを前提として、読み解く。

小説は日本人の田中夫妻が台湾の田舎に引っ越してきて、隣人の李夫妻の子、健民(民雄、民坊)を連れて行ってしまふまでの約8か月間の交流を描いている。国民学校の教師である台湾人の「陳先

⁶² 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』(東洋思想研究所、2013)、p.14。

⁶³ 主人公鄭成功は和藤内と称される。和藤内とは和(日本)でも藤(唐つまり中国)でも内(無い)という言葉遊びからつけられた名前である。穿った見方をするならば、台湾に渡った鄭成功を指して、日本でも中国でもなく「台湾」としての人間と読むこともできるだろうが、当時において日本が「台湾」を一つの国として明確に意識することもなかったと考える方が自然である。そのため、和藤内は単純に日本人でも中国人でもないハーフの子という程度の意味しか内包されていないものだろうと考える。

⁶⁴ 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』(東洋思想研究所、2013)、p.49。

⁶⁵ 呂赫若(ろかくじゃく、Lǚ Hèruò・1914-1950?年):日本植民地下の台湾中部に生まれる。台湾総督府台中師範学校を卒業後、1935年日本の左翼系文学雑誌『文学評論』に掲載される。その後台湾の文芸雑誌『台湾文芸』『台湾新文学』などで日本語文学作品を発表。戦後は中文に切り替えて創作活動を続けるが、1947年の2・28事件以来、中国共産党支持者として政治運動に身を投じ、その後1950年前後に謎の失踪を遂げている。

⁶⁶ 本文引用は中島利郎編『呂赫若:日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』(緑陰書房、1999)より行う。

⁶⁷ フェイ・阮・クリーマン著・林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール(植民地期台湾の日本語文学)』(慶應義塾大学出版会、2007)、p.206。

生」を語り手として物語は展開される。田中夫妻が引っ越してきた陳先生たちの住んでいる場所は、内地人が住むような環境でない「市外れといつても特にごみごみした界限⁶⁸」である。陳先生は、そのような場所に内地人がいるのが意外であり、驚きであったと独白することからも、当時の台湾の田舎町においては特に明確に内地人と日本人の住み分けがはっきりしていた社会背景を反映しているものと考えられる。そのような猥雑な田舎街ながら、陳先生が「唯一の二階建て」に住んでいると描かれていることから、横路（2013）は陳先生の持つ「記号性—近代的な教育機関で教育する教師—に合致⁶⁹」していると指摘している。

当初、田中夫婦の出現に戸惑っていた陳先生だが、後に夫妻と関わっていくうちに夫婦仲の良さを好ましいものとして受け入れるようになっていく。田中夫妻が実子でも養子でもない健民に対して我が子のように—後に我が子そのものとして、愛情深く接する姿に内省し、感動するのである。さらに台湾の生活や習慣に嫌味なく馴染み、現地人の他人の子に対して愛情を持ったことを驚異に感じている。そしてついには最初の不信感を払拭し、「田中夫人のやうな内地婦人を見たことがないし、田中氏のような内地人にも接したことがなかつた⁷⁰」とまで言わしめた。陳先生の持つ「記号性」を鑑みるに、日本支配のおかげで近代化した台湾において、その恩恵を被った人物が日本人に対して並々ならぬ好意を抱く構図は、日本側が望んだ幻想を理解し、巧みに利用している。

陳先生は最後には「突嗟私は田中夫妻のためなら李夫妻との間を駆け廻つて微力を尽すことを辞さない」と心に決めた⁷¹と独白する。陳先生を近代化した台湾として置き換え、田中夫妻を支配者としての日本として見るのは不自然なことではないだろう。作品が発表された1942年の年始めには帝国日本は、マニラやシンガポール、ジャワへの占領を遂げ、戦争は激化していた。そのような情勢の中で、既に統治から50年近く経過していた台湾（陳先生）が日本（田中夫妻）のために尽力することを厭わないという言説が、湾人作家である呂赫若から発信されることは、支配下に置かれた国が理想的な従順さを遂げた成功例としてのメタファーを一見して描き出している。

しかしながら、実態は異なる。呂赫若が描いた日本と台湾の関係性は田中夫妻と健民の関係にも暗示されていることを一考しなければならないだろう。物語の終盤、田中夫妻の夫の仕事の都合で町を離れ、台北へと再び引っ越すこととなる。そして健民を連れて田中夫妻が汽車へ乗り込み、李夫妻と陳先生との別れの場面で話が終わる。

「民坊はもう正式に田中さんにやつたんですか。」

と、私は呆然に立つてゐる李培元氏⁷²に訊ねた。李氏は目を汽車から放さずに答へた。

「まだです。」

眼をむけると、汽車は市街の建物のかげに姿を消して見えなくなった。⁷³

養子縁組をしないまま田中夫妻は健民を引っ越しに伴い、連れ去ってしまう。横路（2013）はこの終わり方に対し、台湾が統治され、日本に順化していったとしても決して「台湾」としての血縁を放棄したわけではないとして、次のように論じている。

作者呂赫若は、民坊の生みの親との関係が決して途切れたものではない、生みの親は民坊を手放したわけではない、ということはこの物語の最後に据えているのである。そこには、台湾が日本によって統治され、本来の血縁関係を忘れていってしまうかのようなのであるが、一方ではその血縁関係を忘れない人々がいるという思いが込められているのではないだろうか。（中略）メタ

⁶⁸ 本文では「ごみごみ」の二回目は繰り返し記号。

⁶⁹ 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』（東洋思想研究所、2013）、p.55。

⁷⁰ 中島利郎編『呂赫若：日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』（緑陰書房、1999）、p.211。

⁷¹ 同上、p.212。

⁷² 李培元は李夫妻の夫の名前。

⁷³ 中島利郎編『呂赫若：日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』（緑陰書房、1999）、p.213。

ファーを読み解くカギを持てば、親子の離別の物語とはまったく違う層の物語が見えてくるのである。⁷⁴

ここで述べられている「本来の血縁関係」を客家、閩南、中国大陸、台湾……等、どのように捉えるかについて言及していない。ここに描き出されているのは、「内地－外地」の関係であって、エスニック・グループに言及はしていない。被支配者であった呂は外地風の洋服を着せられた民坊を「台湾」と意識したのではないだろうか。これらのことから、陳先生の盲目的とも言える田中夫妻に対する肯定的態度が、単に迎合していただけでないことが分かる。呂赫若が陳先生に語らせた、外地人としてのメタファーは次の一文にも表出されている。

では民坊はもう正式に田中氏の子供として入籍したのかと訊いてみると、さうではなかつた。すれば、本島人式にいふと、田中夫妻は結局他人の子供のために金銭を見ずに流してゐた理なのだ。⁷⁵

病気になった健民に対して、惜しめない金銭を費やす夫妻を「本島人式に」言って「他人の子供」と評している。相対して「内地人式に」言えば「自分の子供」となる。ここでは未だ「台湾」であることを捨てず、しかしながらその中で日本を受け入れなければならない、台湾にとっての苦悩を冷静な視点から描き出していると言える。

(3) 原住民族と外地人との境界の揺らぎ

「味方蕃」「熟蕃」と「敵蕃」に分かれたように、日本の統治に原住民族たちの中で葛藤が見られたことは確かであろう。台湾議会設置請願運動は「台湾」の自治を求める運動であった。対して霧社事件は日本の支配・統治に反抗した一種の民族自決である。戴國輝（1981）によるとセデック族の起草⁷⁶による犠牲者は誤殺（漢族系台湾人大人1人、子供1人⁷⁷）を除けば日本人のみ留まっておろ、「『内地人（日本人）ハ幼時（兒）ト雖モ許スナ、本島人（漢族系台湾人）ハ殺スナ』と口々に叫⁷⁸」んでいたという。

さらに日本人関係者の官公舎に対しては一つ残らず放火襲撃を加えたにも関わらず、漢民族系の住民の商店・家屋に対しては放火しない等の配慮を示した。両グループの個人や集団に、蜂起に関しての連絡や申し合わせといった資料は今のところ発見されていないことから、何らかの取り決めが両者の間にはなかったと考えられている⁷⁹。霧社事件に関して、そのエスニックはあくまでもセデック族に留まるのみであったかもしれないが、そこには「われわれの地」を守るという他者性を浮き彫りにする反抗であっただろう。攻撃対象から外地人を外したうえで、「われわれ」から内地人を排除しようと動いたことから、原住民族側からの外地人に対する境界に揺らぎを見せていたと言えるだろう。

また外地人側の境界に関しては台湾議会設置請願運動を例にして考える。台湾議会設置請願運動は植民地化での民族自治を目指すような性格ゆえに、その揺らぎを生んだとも言える。同運動の性格を若林（1987）は次のように述べている。

⁷⁴ 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』（東洋思想研究所、2013）、p.58。

⁷⁵ 中島利郎編『呂赫若：日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第二巻』（緑陰書房、1999）、p.211。

⁷⁶ 他部族への首狩り行為のこと。

⁷⁷ 日本人は134名が殺害された。台湾人の大人は流れ弾に被弾、子供は和服を着ていたために誤殺された。

⁷⁸ 戴國輝「霧社蜂起と中国革命—漢族系中国人の内なる少数民族問題—」『台湾霧社蜂起事件：研究と資料』（社会思想社、1981）、p.20。

⁷⁹ 同上、pp.19-20、pp.202-203。

台湾土着漢族地主資産階級⁸⁰を主たる支持基盤とし、主にこの階級の出身である、日本教育を受けた（東京留学あるいは台湾内師範教育ないし医学教育）知識人を推進者とし、彼らの民族的政治的自覚に基づく植民地自治への志向を潜在させた、植民地政治への参政権要求運動であり、1915年の台湾同化会に始まる近代政治運動社会運動の形態をとった後期台湾抗日民族運動の重要な一環をなすものであった。⁸¹

同じ日本統治下にあった朝鮮では「3・1独立運動」が起こり、その性格は植民地自治を促すものではなく「独立」を志向したものであった。朝鮮人から参政権の付与を求める請願は行われていたものの、それらは朝鮮議会を求めるものではなく、衆議院選挙法の朝鮮施行を求めるものであった。それに比べれば台湾の例は、「近代日本政治史において植民地住民の民族的自覚に基づく政治要求が彼ら自身によって帝国議会にもちこまれた稀有の例⁸²」であった。同運動が「民族的自覚」を促したことで、抗日民族運動となるに至った。蔣渭水は「台湾議會ノ請願ノ出現セシト同時ニ台湾人ノ人格ガ生レタリ⁸³」と述べた。さらに在台日本人ジャーナリストであった柴田廉（1923）が台湾人青年の言葉を引いて「或る青年は、自分等は今や退いて純支那人たる能はず、進んで純日本人たる能はず、まさに其の中間にふら附いて居る⁸⁴」と論じた。これに対し、若林（1983）は柴田が「同化」の絶好機として「植民者的なパターンナリスティックな眼⁸⁵」でこの危機の性格を見誤っていると指摘する。これは被植民者たちの「精神の強調・葛藤の解決としての民族的自覚をも準備するもの」であり、換言して「実践的な思考の準拠枠としての、『台湾』および『台湾人』の発見であった」のである⁸⁶。しかしながらこれらは、当然のように漢族の知識人グループによる言説であったため、「台湾人」と言ったときに指すものは漢族グループに過ぎなかった。

臺灣議會ハ臺灣ニ在住セル日本人タルト臺灣人タルト將タ行政区域内ニ在ル熟蕃人タルトヲ問ハス、均シク抗戰シタル代表者ヲ以テ組織シ、之ニ台湾特殊ノ事情ニ基ク法規及ヒ臺灣ニ於ケル豫算ノ議決権を附與スル特別代議機關ナリ。（傍点ママ）⁸⁷

林献堂を始めとする台湾議會設置請願運動を行っていたのは漢族の知識人グループであった。「台湾」の自治を求めた彼らの視点に立った時ですら、台湾議会は日本人、台湾人、熟蕃人に留まるのみであり、生蕃と呼ばれる人々は埒外に置かれていた。「台湾人」の条件に原住民族は含まれていなかったのである。それが意識されるようになったのは、奇しくも霧社事件が契機であった。

台湾民衆党や台湾共産党の人々が、事件を知って蕃政策や警察政治を批判し、改善・改革を訴えた。当然、日本の統治への批判から独立や自治を求める言説へと繋げる意図もあっただろうが、「台湾」に原住民族が意識される大きな契機となったのは確かだろう。この意識こそが、漢民族グループ側の境界の揺らぎと言える。この揺らぎに、現代に通ずる「台湾」の輪郭を読み取ることができる。しかしながら、1987年の日中戦争の勃発に伴い、皇民化が始まったことで「本国政治から立憲主義が後退していく中で、1930年代前半のうちに逼塞せしめられ⁸⁸」た。それゆえ、両者の境界の揺らぎは皇民化

⁸⁰ 若林は「日本権力による台湾漢族支配の政治的・社会的・経済的媒介者の役割を受け持たされた漢族社会の上層部分（地主・資産家等）」を指して土着地主資産階級と称し、「清末までに形成されていた伊自由漢族社会の上層階級が、日本帝国主義による植民地支配の確立の家庭—台湾社会の、日本権力・資本による上からの強硬的植民地的近代化の基礎的諸課程—を経て、変形されて形成されたもの」であると述べている。（若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.35。）

⁸¹ 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.20。

⁸² 同上、同頁。

⁸³ 蔣渭水『臺灣人ノ臺灣議會設置運動ト其思想』（中央研究院臺灣史研究所所有、1922）、p.25。

⁸⁴ 柴田廉『台湾同化政策論』（見文館、1923）、pp.50-51。

⁸⁵ 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.199。

⁸⁶ 同上、p.200。

⁸⁷ 臺灣議會期成同盟會『臺灣議會設置請願理由書 大正十五年二月』（臺灣議會期成同盟會、1926）、p.12。

⁸⁸ 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）、p.8。

の波にのまれ、その後の展開を見せることはなかった。

台湾ナショナル・アイデンティティの走りである「新台湾人意識」は、2・28事件を契機として、以来1980年代に至るまで存在した本省人と外省人との境界を越境する概念として李登輝によって提唱された。このような言説によって、本省人と外省人という対立を越境する試みには「われわれ」というネイションが存在する。「新台湾人意識」は本省人、外省人、原住民族、混血等々、台湾という島に住む人々を包括して「われわれ=台湾人」と規定したものである。この「われわれ」が「台湾」を意識したとき、そこに台湾ナショナリズムが形成・展開される。

これらをまとめると、図2のとおりになる。左図は日本統治時代、中央図は光復後の国民党軍政期、右図は民主化後の現在の台湾を、それぞれ示している。日本統治時代には図1で既述したとおり、従来の二項対立に加え、内地からのまなざし、外地内部でのエスニック・グループのまなざしが存在した。

台湾光復後は「外省人-本省人」という対立構造があったものの、本省人たちは「われわれ」として「中華民国」ではなく、「台湾」を意識していた。国共内戦の敗戦によって、外省人が大陸から切り離された以上、この対立構造が崩壊し、混在していった末に右図のように「われわれ=台湾人」になることは明らかである。本研究においては左図の構造に焦点を当て論じたため、中央図及び右図の成立過程を紙幅の都合上、詳述することが出来なかったが、当然その一体化するネイションの過程で、多くの艱難辛苦があったことは言い添えておく。

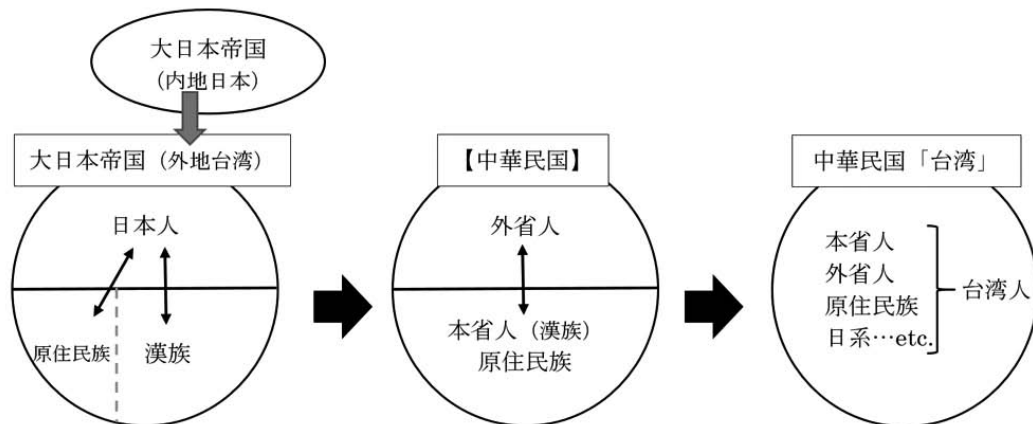


図2：台湾ナショナル・アイデンティティ形成の変遷図（筆者作成）

結論

本研究では内地人が外地台湾をどのようにまなざしていたか。外地人たちが日本帝国の家族国家観による統治をどのように受容していたかの2点を文学作品から明らかにしたうえで、「台湾」というナショナル・アイデンティティが日本統治時代にどのように萌芽したかについて明らかにした。

日本人作家の川合三良と台湾人作家の呂赫若の文学作品をテキストとして取り上げ、それぞれの立場からどのように台湾及び日本をまなざしていたのかについて論じた。従来の日本人が台湾人を差別していたという視座とは別に、「台湾」という土地自体への差別から日本人が台湾に住む日本人への差別意識を持っており、そこには確かに支配者としての優越感を抱いていたことが読み取れた。

また、日本人という支配者が存在したことで、それまで互いの境界線を侵すことなく共存していた漢族グループと原住民族が互いを意識することとなった。両者の境界に揺らぎが生じたことで、「われわれ」の意識が双方に発生した。「中華民国」の圧政と同化政策によってさらにその境界は薄らぎ、共生への道を模索し始めることとなった。「山地同胞」呼称された原住民族たちは、民族自決を訴えた結果「原住民」と自らを称する権利を得て、多民族集団の一民族としての地位を確立していった。

台湾のナショナル・アイデンティティの走りである「新台湾人意識」は、2・28事件を契機として、以来1980年代に至るまで存在した本省人と外省人との境界を越境する概念として李登輝によって提

唱された。李登輝は「本日、この土地で共に成長し、生きてきたわれわれは、原住民族はもちろん、数百年前あるいは数十年前に来たかを問わず、すべてが台湾人であり、同時にすべてが台湾の真の主人であります」と光復53周年記念談話で述べた。このような言説によって、本省人と外省人という対立を越境する試みには「われわれ」というネイションが存在する。「新台湾人意識」は本省人、外省人、原住民族、混血等々、台湾という島に住む人々を包括して「われわれ＝台湾人」と規定したものである。これは現在「台湾人」との自己認識の高さを鑑みるに、「台湾」に住む人々に受け入れられた概念であると言えよう。この「われわれ」が「台湾」を意識したとき、そこに台湾ナショナリズムが形成・展開される。台湾光復後は「外省人－本省人」という対立構造があったものの、本省人たちは確かに「われわれ」を意識していた。外省人が大陸から切り離された以上、この対立構造が崩壊し、混在していた末に「われわれ」になることは明らかである。しかしながら現在の「われわれ＝台湾」に至るまでは、様々な境界の越境による苦難があったことを言い添えておく。

このような「われわれ」の意識変遷を辿れば、その萌芽が見られるのは日本植民地時代であった。日本帝国が統治を開始した時点から、外地台湾の中では「支配者－被支配者」の対立構造が描かれる。単純化された従来の二項対立は「日本人－漢族・原住民族」という構造形態である。しかしこのときに図2の左図のように、二項対立軸の下部には外地人と原住民族があり、両者の間には境界が存在した。日本統治初期には「日本人－漢族グループ」「日本人－原住民族」というそれぞれの対立構造を描くのみであり、左図の外地人と原住民族の間には点線で示したように、境界が存在した。両者は境界を越境することなく、互いへの視座が僅かに顕在化したのは霧社事件であった。

特に、外地人たちにおいて日本に同化しようとした人々ですら、生蕃と呼ばれた原住民族を疎外するような動きを見せていたのは、台湾議会設置請願理由書の台湾人の要件に含まれなかった事実からも如実に現れている。また川合三良の『轉校』に表れているように、対立構造は決して二項に収まるものではなく、同じ日本人同士ですら図1の左図のように内地から外地への差別意識構造を描き出し、「内地（日本人）－外地（日本人・湾生）」という枠組みを生み出していた。このような複雑な構造を描く中で、外地人たちが原住民族たちを意識し、「われわれ」に組み込もうとした動きを見せたのは、奇しくも霧社事件が契機であった。しかしながら、日本統治は半世紀で収束し、「外地人／原住民族」の境界は揺らぎを見せたものの、「台湾人」としてのネイション意識なのか、またはエスニック・グループとしての意識なのかを明確にするまでには及ばず、その萌芽に留まったのである。

参考文献

日本語文献

- 阿部潔『彷徨えるナショナリズム』（世界思想社、2001）
大江志乃夫〔ほか〕編『岩波講座近代日本と植民地 帝国統治の構造』（岩波書店、1992）
岡本真希子『植民地官僚の政治史』（三元社、2008）
小熊英二『単一民族神話の起源 〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995）
尾崎秀樹『近代文学の傷痕：旧植民地文学論』（岩波書店、1991）
河原功『台湾文学研究への道』（村里社、2011）
木村一信『「外地」日本語文学への射程』（双文社出版、2014）
黒川創編『〈外地〉の日本語文学選 南方・南洋／台湾』（新宿書房、1996）
酒井哲哉責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知（1）「帝国」編成の系譜』（岩波書店、2006）
柴田廉『台湾同化政策論』（晃文館、1923）
蔣渭水『臺灣人ノ臺灣議會設置運動ト其思想』（中央研究院臺灣史研究所所有、1922）
関正昭『日本語教育史研究序説』（スリーエーネットワーク、1997）
戴國輝「霧社蜂起と中国革命—漢族系中国人の内なる少数民族問題—」『台湾霧社蜂起事件：研究と資料』（社会思想社、1981）
臺灣議會期成同盟會『臺灣議會設置請願理由書 大正十五年二月』（臺灣議會期成同盟會、1926）
所功『日本の国旗・国歌—「日の丸・君が代」の歴史と異義—』（國民會館、1995）

- 中川浩一、和歌森民男 編『霧社事件：台湾高砂族の蜂起』（三省堂、1980）
- 中島利郎、河原功 編『日本統治期台湾文学日本人作家作品集』第二巻、第五巻（緑蔭書房、1998、1999）
- 中谷猛、川上勉、高橋秀寿 編『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』（晃洋書房、2003）
- 西川満 編・河原功 監修『台湾文学集 日本植民地文学精選集013〔台湾編〕1』（ゆまに書房、2000）
- 日本語教育学会編；水谷修〔ほか〕編集『新版 日本語教育事典』（大修館書店、2005）
- 楢山幸夫『台湾植民地史の研究』（ゆまに書房、2015）
- 藤井省三『台湾文学この百年』（東方書店、1998）
- 藤井省三、黄英哲、垂水千恵 編『台湾の「大東亜戦争」：文学・メディア・文化』（東京大学出版会、2002）
- 松永正義『台湾文学のおもしろさ』（研文出版、2006）
- 向山寛夫『日本統治下における台湾民族運動史』（中央経済研究所、1987）
- 山口守 編、藤井省三〔ほか〕著『講座 台湾文学』（国書刊行会、2003）
- 山崎直哉『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』（東信堂、2009）
- 横路啓子『抵抗のメタファー 植民地台湾戦争期の文学』（東洋思想研究所、2013）
- 李登輝『台湾の主張』（PHP 研究所、1999）
- 臨時臺灣舊慣調査會第一部 編『蕃族調査報告書』（臺灣總督府蕃族調査會、1913-1921）
- 臨時臺灣舊慣調査會第一部 編『蕃族慣習調査報告書』（臺灣總督府蕃族調査會、1913-1921）
- 若林敬子『沖縄の人口問題と社会的現実』（東信堂、2009）
- 若林正文『台湾抗日運動史研究』（研文出版、1983）
- 日本語論文
- 川原絵梨奈「『新台湾人』の議論と政治意識をめぐって」『アジア社会文化研究 (10)』（アジア社会文化研究会、2009）
- 川原絵梨奈「『台湾人』意識の成立をめぐって」『アジア社会文化研究 (12), 97-105, 2011-03』（アジア社会文化研究会、2011）
- 黄嘉琪「日本統治時代における『内台共婚』の構造と展開」『比較家族史研究 (27), 129-130』（比較家族史学会、2012）
- 黄振原「浜田隼雄『南方移民村』論」『論究日本文学 (63), 22-32』（立命館大学日文学会、1996）
- 小金丸貴志「日本統治初期の台湾における刑法適用問題—依用慣行の起源と総督府・法院の対立」『日本台湾学会報 (13), 1-24』（台湾学会、2011）
- 垂水千恵「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要 (2), 102-110』（横浜国立大学、1995）
- 唐瓊瑜「『二世』から見る、戦前における台湾文学」『第21回国際日本文学研究学会会議録 (21), 55-68』（国文学研究資料館、1998）
- 中島利郎「日本統治期台湾文学研究：台湾における川合三良—静謐なる抵抗—」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編 (51), 61-84』（淑徳大学、2012）
- 中谷猛「『ナショナル・アイデンティティ』の概念に関する問題整理」『立命館法學 2000年 3・4号 (271・272号) 下巻』（立命館大学法学会、2001）
- 樋口靖「領台初期の台湾語教学 (一)」『文学部紀要 25 (2), 23-40』（文教大学、2012）
- 松尾教史「台湾時代における川合三良の文学作品：ある在台内地人作家にとっての皇民化政策」『Core ethics (5), 305-314』（立命館大学、2009）
- 八藤後忠夫・水谷徹「障害者の生存権と優生思想—障害児教育への示唆と展望—」『教育学部紀要 (39), 79-86』（文教大学、2005）
- 若林正文「名前の苦しみとナショナル・アイデンティティ—『中華民国は台湾です、中国ではありません』—」『學士會會報 第918号』（学士会、2016）

外国語文献

- アントニー・D・スミス：高柳訳『ナショナリズムの生命力』（晶文社、1998）
フェイ・阮・クリーマン；林ゆう子 訳『大日本帝国のクレオール 〈植民地期台湾の日本語文学〉』（慶應義塾大学出版会、2007）
黄俊傑；白井進 訳『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史的変遷』（東方書店、2008）
林莉菁『我的青春 我的 FORMOSA』（無限出版、2012）
漆高儒『蔣経国評伝—我是台湾人』（正中書局、1997年）
台北市西部文化局『台北二二八記念館の常設展示特集』（台北市政府文化局、2011）
ウィル・キムリッカ；角田猛之、石山文彦、山崎康仕 監訳『多文化時代の市民権：マイノリティの権利と自由主義』（晃洋書房、1998）

外国語論文

- 林央敏 著・樋口靖 訳「台湾文学運動試論」『文学部紀要12（2）, 133-154』（文教大学、1991）
丘其謙『臺灣土著族の名制』（國立臺灣大學考古人類學研究所碩士論文、未出版）
栄峰「新文学・新劇運動人名録」『台北文物第二卷第三期』（台北市文献委員会、1954）
王雅萍『姓名與認同：以台灣原住民族姓名議題為中心』（國立政治大学民族研究所碩士論文、未出版）
王雅萍「各族郡傳統命名制度」『臺灣原住民族郡傳統命名制度的探討』（臺灣原住民族行政局、1994）
楊昇展『臺灣原住民族傳統姓名之研究』（國立臺南大学台湾文化研究所教學碩士班碩士論文、未出版、2004）
張良澤「台湾文学の近況—『寒夜三部曲』を中心として」『中国研究月報（442）, 1-11』（一般社団法人中国研究所、1984）

新聞・雑誌

- 朝日新聞「台湾、日本への対応苦心 中国意識、大規模軍事パレード」2015年7月5日付朝刊
朝日新聞「抗日戦70年、割れる台湾」2015年8月14日付朝刊
朝日新聞「中華民国旗が示すもの」2016年1月22日付朝刊
朝日新聞デジタル『震災後の義援金、米と台湾が最多 最貧国30カ国からも』2013年4月4日付
<http://www.asahi.com/special/news/articles/TKY201304020473.html>
週刊朝日「迫る、台湾総統選！ それでも国民党・馬英九が敗北する『現実味』」2008年3月28日刊行

国内デジタル資料・URL

- 国立公文書館デジタルアーカイブ「国民優生法ヲ定ム」『公文類聚・第六十四編・昭和十五年・第百十八巻・衛生・人類衛生・獸畜衛生』
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/M0000000000001769772>
日本台湾交流協会 HP『第五回台湾における対日世論調査（2015年度）』概要版 [https://www.koryu.or.jp/taipei/ez_3_contents.nsf/04/B9736DAE28A0FC5749257FF4002CA457/\\$FILE/2015seron_kani_JP.pdf](https://www.koryu.or.jp/taipei/ez_3_contents.nsf/04/B9736DAE28A0FC5749257FF4002CA457/$FILE/2015seron_kani_JP.pdf)
日本赤十字社 HP http://www.jrc.or.jp/contribution/140305_000535.html

国外デジタル資料・URL

- 内政部戸政司全球資訊網『民國106年10月戸口統計資料分析』
http://www.ris.gov.tw/latestmessage/-/asset_publisher/i42D/content/民國106年10月戸口統計資料分析
屏東縣選舉委員會編印「第十二任總統、副總統選舉及全國性公民投票第五案、第六案選舉實錄」中華民國97年
http://www.cec.gov.tw/old_upload/14/1014/attach/9/970322.pdf
司法院大法官 HP

http://www.judicial.gov.tw/constitutionalcourt/p07_2.asp?lawno=45

台北市 HP 「氏族與命名『布農族』」

<http://tcgwww.taipei.gov.tw/fp.asp?fpage=cp&xItem=1001480&CtNode=16941&mp=cb01>

臺灣民眾臺灣人 / 中國人認同趨勢分佈 (1992年06月～2016年12月)

<http://esc.nccu.edu.tw/app/news.php?Sn=166#>

臺灣民眾統獨立場趨勢分佈 (1994年12月～2016年12月)

<http://esc.nccu.edu.tw/course/news.php?Sn=167#>

台湾国防部公式アカウント：国防部發言人「國防部特於『國防戰力展示』正式活動時機，開放200位名額供粉絲報名參訪」

https://www.facebook.com/pg/MilitarySpokesman/photos/?tab=album&album_id=933763033353682

台湾原住民數位博物館 HP 「阿美族」 <http://www.dmtip.gov.tw/Bg/Amis.htm>

行政院 HP 「中華民國 國情簡介」

http://www.ey.gov.tw/state/News_Content.aspx?n=6C2B8374CBFF550E&s=C51A4E4E81A0BBEA

朱立倫 Facebook 公式アカウント「對於一個16歲的年輕人，這樣太殘忍了。周子瑜，歡迎回家！（2016年1月16日投稿）」

<https://www.facebook.com/lchu/posts/10156539664515128>

中華奧林匹克委員會 HP 「2017年第8屆札幌亞洲冬季運動會授旗典禮」

<http://www.tpenoc.net/?p=8405>

中華民國國防部 HP 軍事新聞「國軍7月4日湖口『國防戰力展示』弘揚抗戰精神」2015年4月15日付 <https://www.mnd.gov.tw/>

論文

地方電球メーカーのスピンのアウトと事業展開

—秋田における SKY・AFC 社の事例—

Spin-out and Business Development of Local Electric Lamp Companies:

A Case Study of SKY and AFC Co., Limited in Akita, Japan

平沢 照雄 (Teruo HIRASAWA)

筑波大学人文社会系 教授

本論文は、戦後日本における電球工業の展開を明らかにする経済・経営史研究の一環として、2000年に秋田において創業した電球メーカーである SKY および AFC 社の事業展開に着目する。当該期における電球産業・企業を対象とした研究では、(1) 高度成長期を中心とした輸出電球工業の構造と展開、(2) 東京から地方に製造拠点を移転したメーカーの事業展開、(3) 電球製造とは無関係な事業を営んでいた地方企業による新型 LED 事業への取り組みについて明らかにされてきた。これに対して本論文では、経営者に対する聞き取り調査をもとにしたオーラルヒストリーの手法を用いながら、[1] 秋田で製造を続けてきた電球メーカーの従業員がスピン・アウトする形で新たな企業を設立した経緯と、[2] その企業が同地での電球製造・技術の継続と雇用の確保に取り組んだ実態を明らかにする点に独自性がある。

This paper focuses on the spin-out and business development of two local electric lamp companies, SKY and AFC Co., Limited, which were established in 2000 in Akita, Japan. Previous studies for the Japanese electric lamp industry examined the following topics: (1) the structure and development of the export electric lamp industry mainly during the period of high economic growth in the 1950-60s, (2) the business development of electric lamp companies which transferred production from Tokyo to Akita in the 1960s, and (3) the new model of LED business by the local companies which entered the electric lamp industry from different industries. In this paper, using the oral history technique based on an interview with the owner-manager, we clarified the following things: [1] one employee of the electric lamp company located in Akita spun out and established new companies, and [2] the spun-out company worked on securing production, technology, and employment.

キーワード：電球工業 スピン・アウト サブミニチュアランプ 秋田 オーラルヒストリー

Keywords: Electric Lamp Industry, Spin-out, Sub-miniature-lamp, Akita, Oral History

1. はじめに

本論文は、戦後日本における電球工業の展開を明らかにする経済・経営史研究の一環として、2000年2月および同年9月に秋田にて創業した電球メーカーである SKY および AFC 社の事業展開に着目する。

ところで、戦後日本の電球工業に関する先行研究においては、(1) 高度成長期を中心とした輸出

電球工業の構造と展開を明らかにした実証研究(平沢 2013b)とともに、(2) 当該期における電球企業の事業展開に関して、東京(品川)から地方(秋田)の電球団地に移転したメーカーの事例分析(平沢 2016a)、(3) 同じく秋田において電球製造とは無関係な事業を営んでいた企業による新型LED事業への取り組み(平沢 2016b)について明らかにされてきた¹。

このうち、(1) は1960年代前半期までの日本電球工業の展開を明らかにしたのに対して、(2) と(3) はそれ以降の時期を主な対象とした実証分析である。また、(2) は特殊小型電球を主要製品とした電球メーカーの事業展開を、(3) はLED電球の製品開発について、それぞれ明らかにしている。

以上の研究状況において、本論文は、(2) および(3) と同様に高度成長期以降の時期を主な検討対象とする。その場合、(2) が秋田で製造を続けてきたメーカーである押野電気製作所(以下、押野と略記する)に着目し、同社が秋田から他地域(鹿児島)に製造拠点を移転する点について考察しているのに対して、本論文は同社の従業員がスピン・アウトする形で新たな企業を設立し、秋田にとどまる形で製造・技術と雇用の確保に取り組んだ実態を明らかにする点に独自性がある。

特に本論文ではSKY および AFC 社に関して、以下の2点を主な分析課題とする²。第1は、秋田輸出電球団地の消滅を契機として、既存企業からスピン・アウトする形で新たな企業の設立に至った経緯についてである。第2は、スピン・アウト後の経営規模および事業展開の実態を、スピン・アウト元である押野との関係にも着目しながら明らかにすることである。

なおその場合、本論文が対象とするスピン・アウト企業(SKY・AFC)は、後に改めて言及するように経営規模が小さく、残された情報もきわめて少ない。そのために、その解明にあたっては資料上の制約が大きい。そこで本論文は、2社の経営を担った進藤聰氏(当時代表取締役社長)に対する現地での聞き取り調査³をもとにしたオーラルヒストリーの形をとることで、上記課題にアプローチすることにした。それによって電球工業史研究に貢献するとともに、戦後日本においてスピン・アウトした企業行動の解明に寄与することを意図している。

2. 小型特殊電球の製造工程と押野電気の生産体制

はじめにSKY・AFCの展開を明らかにする前提として、行論に必要な限りで以下の点にふれておきたい。すなわち、(1) 東京品川から秋田へと生産拠点を移した中心的な電球メーカーであり、SKY・AFCの親会社でもあった押野と、(2) 同社が手がけた主要製品である小型特殊電球(サブミニチュアランプ、以下、SMLと略記する)の製造工程ならびに生産体制についてである。

第2次大戦後の日本電球工業は、1950年代後半に再び本格的な発展を実現し、輸出産業としても成長をとげ、高度経済成長を輸出面から支える役割を担った。特にこの時期、輸出向け電球の製造を主に担ったのが中小メーカーであり、製品としてはクリスマス用装飾電球(以下、クリスマス電球と略記)に著しく特化した特徴をもっていた⁴。

そうした輸出電球工業における代表的メーカーの1つが押野であった⁵。同社は、1931年に東京品川にて押野正二により創業され、1950年代にはクリスマス電球の製造を事業の柱とした。しかし、その

¹ これに対して、第2次世界大戦以前における日本電球工業に関しては、菊池慶彦(2007)、同(2012)、西村(2005)、同(2016)、平沢(1996)、同(2001)、同(2004)、同(2013a)などの研究成果が発表され経済・経営史研究が進められてきた。

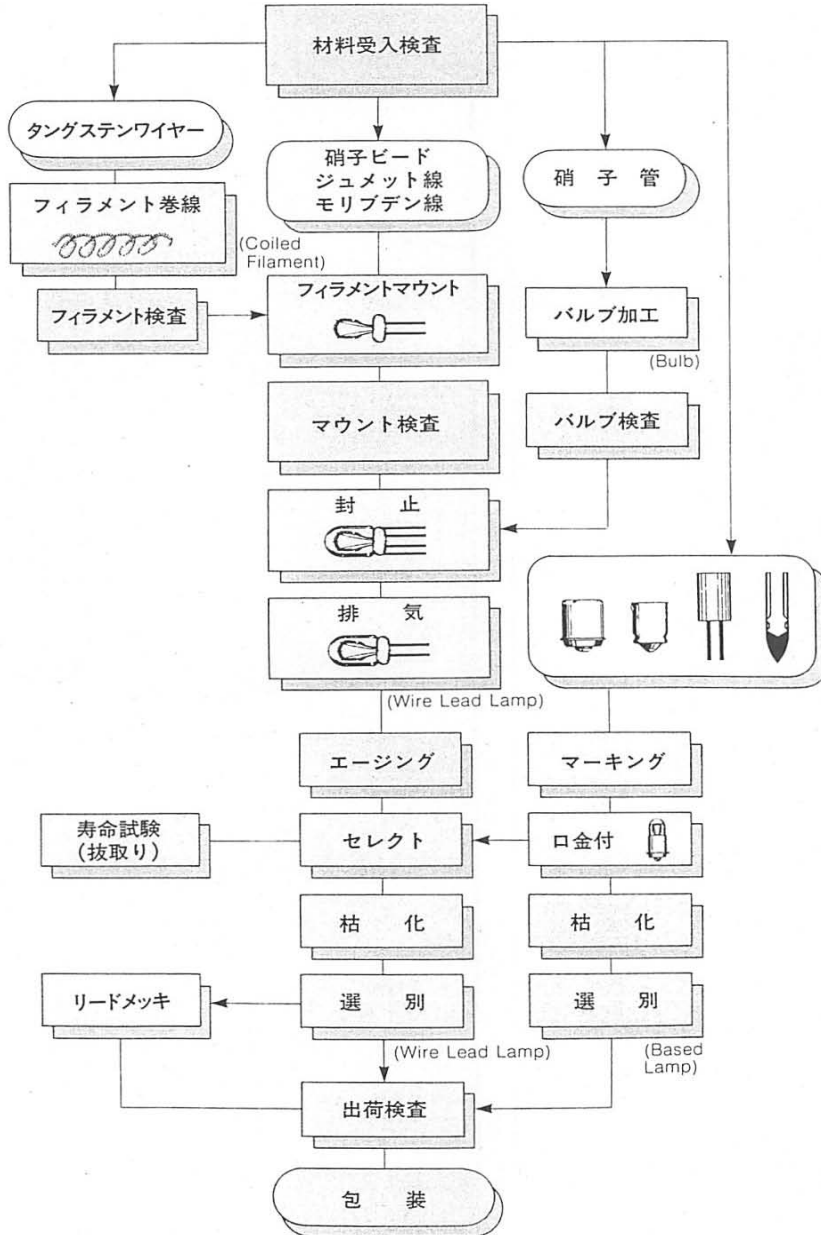
² 第3章および表1で述べるように、SKY および AFC の両社は、進藤聰氏によって、ほぼ同時期に同じ敷地内で創業された会社である。その経緯を踏まえ、両者を実質上1つの経営体としてとらえる場合、以下ではSKY・AFCと略記する。

³ SKY・AFC社長の進藤聰氏への聞き取り調査は、2006年10月31日に同社(秋田市雄和相川)にて実施した。それゆえ本稿の主要な情報は2006年時点におけるものである。本調査にご協力くださった進藤氏に対して記して感謝の意を表したい。なお本稿では、掲載にあたり重複部分の整理、表記(年号の西暦への統一を含む)などの編集を行った。

⁴ 1950～60年代における日本の輸出電球工業について詳しくは、平沢(2013)を参照されたい。

⁵ 以下、押野電気製作所の事業展開に関しては、平沢(2016a)による。

図1 サブミニチュアランプの生産体制



(資料) 押野電気製作所提供資料

比重をガストープ用点火装置さらにはSMLへとシフトすることで、1960年代後半以降新たな企業成長を実現したのである。

なおその場合、押野が手がける主力製品であるSMLとは、航空機や自動車の計器類のバックライトに利用される極小の特殊電球をさす。その製造は、①ジュメット線にガラスを溶着させてステムを作り(焼成)、②さらにジュメット線の先端にフィラメントを取り付けた(継線)うえで、③ステムをガラスバルブに挿入し、排気機でガラスバルブ内を真空にする作業(排気)を行い、④最後にステムとガラスバルブをバーナーで溶着させる(封止)という一連の工程によっていた⁶。さらにその後、

⁶ 以上、SMLの製造工程に関しては押野電気製作所提供資料による。

⑤外観検査と押野が自社開発した点灯検査機による電気特性（電流・光束）検査が実施され出荷されるというプロセスをたどる。以上の工程を念頭に、押野による SML の生産体制を示すと図 1 のようになる。

そこにみられるように、押野は製品開発をはじめとして、SML の主要構成部品であるフィラメント、ワイヤーターミナルの製造から組立までをグループ内で一貫生産している点に特徴がある。同社はこうした体制と厳格な品質検査・管理を基盤として、顧客のそれぞれの要望に柔軟に対応することで、同分野における世界規模のトップメーカーへと発展した。

その一方で、同社は戦前から1960年代前半まで製造拠点としてきた品川から秋田へと生産移転を行った点にも着目する必要がある。戦前から戦後にかけて、品川は電球メーカーが最も多く立地する産業集積地であった。しかし同地のメーカーは、高度経済成長が進展する過程で人手不足と労賃上昇が顕在化するとともに、生産拡張のための土地制約という問題に直面した。そこで、こうした問題を克服する手段の1つとされたのが、秋田への集団移転＝秋田輸出電球団地の形成であり、押野はその移転を主導した企業であった。

ところが1970年代以降、秋田市川尻地区にあった輸出電球団地は、主力製品であるクリスマス電球輸出の衰退とともに次第に運営が難しくなりやがて閉鎖された⁷。押野は、その後も大川端の工場を主力工場として秋田での生産を継続したが、同敷地内を国道バイパスが通ることを契機として、1996年以降、製造拠点を鹿児島へと再移転するに至る。その過程で秋田に設立されたのが SKY・AFC であった。

3. SKY・AFC の設立経緯に関するオーラルヒストリー

いま 2 社の概要をまとめると表 1 のようになる。そこにみられるように両社は、進藤聰氏によってほぼ同時期に同じ敷地内で設立された。そこで、第 3 章では SKY・AFC 社長の進藤聰氏の経歴ならびに 2 社設立に至る証言を取り上げる⁸。

表 1 SKY・AFC の概要

社名	有限会社 SKY	有限会社 AFC
設立	2000年2月	2000年9月
資本金	500万円	300万円
代表取締役社長	進藤 聡	
所在地	秋田県 秋田市 雄和相川字向田表	
事業内容	サブミニチュアランプ（ワイヤーターミナル）の製造	サブミニチュアランプ向けフィラメントの製造
従業員数	13名（うちパート3名）	3名
（創業時）	6名	4名

（資料）聞き取り調査および押野電気製作所提供資料より作成。

（注）2006年10月時点。

3-1 創業者の経歴

はじめに、押野とそのスピン・アウト企業である SKY・AFC との関係を理解する前提として、創業者（進藤氏）の押野における経歴に着目すれば、以下のとおりである。

進藤：最初に私の経歴をお話しします。私は入社直後、押野本社で1年ほど消灯スイッチを手掛けた

⁷ 秋田輸出電球団地における電球生産の展開およびその消滅については機会を改めて論じる予定である。

⁸ 以下で質問者とは平沢をさす。また発言箇所にある（ ）内は平沢が補足したものである。

後に秋田に帰り、フィラメント業務を8年くらいやりました。そこから製造現場に移動しろということで製造現場に配属されました。そういうことで研究開発と製造現場の両方に携わってきました。

質問者：そうすると進藤さんは押野が秋田に移転した後に秋田で採用されたということですか。

進藤：はいそうです。押野は東京に工場がある時からずっとフィラメントを内製化していました。もともとフィラメントも東京にあったのですが、秋田への移転を契機として東京は営業拠点となり、フィラメントをはじめとした製造工程の全てを秋田に持ってきたわけです。

そういうことで、1973年に私が押野に入社した当時は、秋田にフィラメントとランプ製造の両方がありました。さらに1989年に押野は技術センターを（秋田県）雄和の地に立ち上げました。その時、私も技術家ということで秋田工場（大川端）から技術センター（雄和）に移りました。しかし大川端工場では人が退職してフィラメント関係が弱くなったため、1年後再び大川端に戻りフィラメントとランプ製造の両方を担当することになったのです。

質問者：今のお話に出てきた技術センターですが、なぜ雄和（秋田市）の地を選ばれたのですか。

進藤：押野の従業員に雄和出身者がいまして、当地にたまたま千坪近い広い空き地があるということで、それを押野が昔に買っていたらしいのです。一方、押野としても、ランプだけやっても駄目だと考え、技術センターを作りそこで新しい製品を開発することになった。それで雄和に技術センターを作ったのです。

なお営業をやる際には、必ずサンプルが必要となります。製造部門にサンプル作りまでやらせると製造効率が落ちてしまうので、ランプの開発とともにサンプルの作成を技術センターでやろうということになりました。加えて機械の開発と品質管理も担当するという趣旨で技術センターを立ち上げたわけです。

質問者：その後、さらに大川端のランプ製造を雄和に移転したということですか。

進藤：10年ほど前（1996年当時）に、秋田工場の大川端に道路が通ることとなり、工場移転の話が持ち上がりました。それで大川端から雄和の技術センターに生産設備を段階的に移転させました。さらに8～9年前に鹿児島島に工場を設立し、最終的に製造設備だけでなくフィラメントも全て鹿児島島に持って行くことになりました。

質問者：押野が鹿児島島に工場を移転した際には鹿児島島にも行かれたのですか。

進藤：私は製造機械の設置で鹿児島島に行き、いったん秋田に戻りました。鹿児島島へ移転した後も雄和に残っていた製造部分があったのですが、それがなかなか軌道に乗りませんでした。それで秋田に戻り、フィラメントの量産体制を作ったり技術指導をしたりして、雄和工場の底上げを図りました。その時に、今のAFCに加わる榎木にフィラメントを教え育てました。その後、再び鹿児島島に行ってフィラメントとランプの製造課長になりました。

3-2 SKY設立に至る経緯

以上のように、進藤氏は、(1) 押野において長年にわたり研究開発と製造現場の両方に携わるとともに、(2) 秋田から鹿児島島への工場移転に際して重要な役割を担ったことがわかる。そこで次には、そのような経歴をもつ進藤氏が、どのような経緯から秋田で新会社を設立するに至ったのかについて立ち入ってみることにしたい。最初にSKYの設立に着目するならば、以下の通りであった。

質問者：今のお話の確認ですが、押野が1999年12月に大川端工場を閉鎖し、鹿児島に製造設備と技術の両方を移転した後も、秋田の雄和地域でわずかながらランプの製造をやっていたということですか。

進藤：そうです。鹿児島に移転した後も、なんとか秋田工場を立て直そうとしたのですが、秋田に残った従業員のほとんどが勤続20～30年と高齢化しており原価低減が難しい状況でした。それで押野としては、秋田工場を閉鎖することにしました。その際、完全に閉鎖してゼロにしてしまうのはもったいないということで、雄和に子会社のSKYを立ち上げて設備の譲渡による生産の継続をはかったというわけです。それともう1つは、秋田地域には鹿児島への転勤が難しい女性労働が残っており、彼女たちの雇用継続という観点から雄和での生産を残したのだらうと思います。その際、私がフィラメントについて知っていて、またランプの製造についても知っているということで、「ここをお前やってみろ」ということになったのです。

質問者：SKYは3人で設立されたとのことですが。

進藤：そうです。私が全般的な経営管理業務を担当し、熊谷というのがアッセンブラーやランプの検査をやり、矢吹というのがワイヤーターミナルを担当しています。この3人でとりあえずやるから、その頭文字をとってSKYと命名したのです。

質問者：ということは3人とも元は押野の社員だったわけですか。

進藤：そうです。3人とも秋田工場（大川端）で採用されました。私以外の年齢は38～40歳です。

質問者：SKYもAFCも社長は進藤さんですか。

進藤：そうです。あえて2つの会社に分けなくて1つでもよかったのですが、後から定款を変えるのは面倒くさいからということで、それ以上の考えもなく2つに分けました。

質問者：新しく会社を立ち上げる際の資金繰りに苦労はなかったのでしょうか。

進藤：最初の2ヶ月は大変でした。売り上げがないなかで資材などを調達し、1ヶ月後に支払いがくるわけです。資本金なんか、あつという間に無くなります。やはりそういう面では押野がだいぶ面倒をみてくれました。

質問者：SKY設立以前の押野雄和工場にはどのくらい社員がいましたか。

進藤：30～40人近くです。SKYの立ち上げに際しては、そのなかから私が5人を選びました。さらに設立当初、新たに1人を採用し、操業してすぐ募集をかけて1～2ヶ月の間にもう1名採用しました。そういうことで、先ほどの3人（進藤、熊谷、矢吹）にE、O、A、Sを加え、7人体制で作り始めました。しかし立ち上げと同時に増産要請がかかり、1人、2人、3人・・・と人を入れています。現在は、私を含めて10名です。そのうち男性が7名で女性が3名であとパートが3名です。

質問者：ここで働いている方は、皆さんこの近くに住んでいるのでしょうか。

進藤：そうです。最近引っ越した1人以外はここから遠くても30分以内です。

質問者：先ほどのお話で、押野・秋田工場からSKYに代わる過程で従業員を30名から5名に絞ったとのことでしたが、その結果、生産規模も小さくなったわけですか。

進藤：確かに減りました。ですからわが社は社員数を減らし生産規模を縮小するなかで、大きな受注が来れば残業をすることもあるし、受注がない時は残業を減らすというやり方で対応してきました。なお創業後は人を切ることはやっていません。その状況下で、いかに品質を一定に保つかが重要です。そのためSKYでは、秋田工場にいたベテランを採用しました。

質問者：そうすると立ち上げ時の5名の方は結構ベテランということですか。

進藤：新規採用者は別として、それ以外は皆10年選手です。創業当初、核となったのは榎木、矢吹と私の3人で、ライン全部を見てきました。

質問者：女性の方も長いのですか。

進藤：同じです。2人は押野に勤めて10～12年ほどです。もう1人は34～35年くらいです。そういう人をピックアップしました。

3-3 AFC設立に至る経緯

以上のように、(1)押野は鹿児島への工場移転に際して秋田での生産を直ちにゼロにしたわけではなく、(2)秋田出身であり同社の製造現場にも詳しい進藤氏にSKYを立ち上げさせ、設備の譲渡による生産の継続をはかったことがわかる。さらに、SML用フィラメントの製造会社をAFC(秋田フィラメントセンター)として立ち上げるに至った点については、以下の通りであった。

質問者：次にAFCに関連する質問をさせていただきます。同社を立ち上げた時期に、押野秋田工場から鹿児島工場に移った人もいたわけですか。

進藤：いました。秋田から鹿児島へは4～5人ほどが行きました。

質問者：それとは異なりAFCを設立するに至った経緯について聞かせてください。

進藤：先ほども言いましたが、鹿児島にランプ工場を移転した際にはフィラメントも鹿児島に持って行きました。当初は鹿児島でフィラメントもやり、それを秋田に供給するという位置づけでした。ところが、私が秋田に帰ってからは鹿児島で教える者がいなくなり、品質などの面で色々苦労していたようです。それともう1つは鹿児島のフィラメント担当者が辞めることになりました。鹿児島でフィラメントの研修をさせたのですが、やっぱり大変だということで辞めたいということになったのです。それで、当時フィラメントを専門に扱っていたH製作所に外注するという案もあったのですが、私がやることになりました。

質問者：ということは、AFCが供給するフィラメントはSKYが製造する電球用だけではないということですか。

進藤：押野ランプ全部に向けてです。その当時の押野は、イギリスにOLUK(押野ランプ・イギリス)があり、香港にもホンコンミニチュアランプがあり、それらと秋田、鹿児島をあわせると大体1,000万本ぐらい作らなければならない。

(H製作所の)社長さんは、私が押野に入社した時には、既にフィラメントを担当されていました。

フィラメント一筋できた後に、押野から独立された方です。独立後は、15台ほどの機械でフィラメントを1人で巻いていました。Hさんの独立によって、大川端工場のフィラメントが手薄になってしまった。それで先ほど言いましたように、そこを補強するために私が戻されたわけです。

その後、押野はフィラメントを鹿児島とH製作所に作らせようと考えました。ところが、先ほど言ったように鹿児島でなかなかうまくいかなかった。また、H製作所はスペースの問題（土地制約）と後継者がなく彼一人で生産していたことから、生産拡張が難しい状況にありました。そのため、押野が打診した際に断わってきました。その時、「H製作所にも断われたら、私が（秋田で）やりましょう」と言ってあったので、鹿児島に持って行ったフィラメントを再び秋田の雄和に持って来たわけです。

質問者：それでは現時点（2006年）で鹿児島ではフィラメントをやっていないということですか。

進藤：やっていません。フィラメントはランプにとって心臓部にあたり、なかなか難しい部品です。一定の知識と経験が重要視されます。それで私がやることにしました。鹿児島から再移転する時には、逆に鹿児島から秋田に来てもらい、立ち上げを助けてもらいました。それから1年後の2000年2月にAFCという社名をつけました。ただし設立は2000年9月としました。ですからAFCは9月決算となっています。その後、10月から翌年1～2月頃までを準備期間にあてました。ヘッジングする際に出る硝酸ガスを中和する装置などもこの時期に入れました。ドイツ、フランス、スイスからホイリングマシンも次々と買ってもらいました。旧来の日本製機械でやると1週間で5万本くらいしかできないものが、アルマ製機械だと1日7、8万から10万本くらい作れるわけです。ただし機械の値段は（日本製の）7～8倍しました。そういう機械をとにかく入れて増産化できるようにしたわけです。その結果、去年（2005年）あたりまでは、一番多い時で1,400万本近く作っていました。なおAFCでは元資材倉庫だったプレハブをそのまま使っています。

質問者：AFCの従業員は何人ですか。

進藤：当初は4人でした。ホイリング担当、アニールかけてカッティングする者、エイジング担当、それから出荷梱包とか材料関係担当です。現在は1人が辞めてしまったので3人で、完全分業体制により操業しています。

4. スピン・アウト後の事業展開に関するオーラルヒストリー

以上のように、SKY・AFCは、（1）押野が鹿児島に移転するにあたり、秋田での激変を緩和する意図からSML生産の継続をはかるとともに、（2）SMLにとって重要な部品であるフィラメントの供給拠点としての役割を担う目的で設立されたことがわかる。そうした設立経緯を踏まえ、続いて第4章では両社設立以降における実際の事業展開についてみてゆきたい。

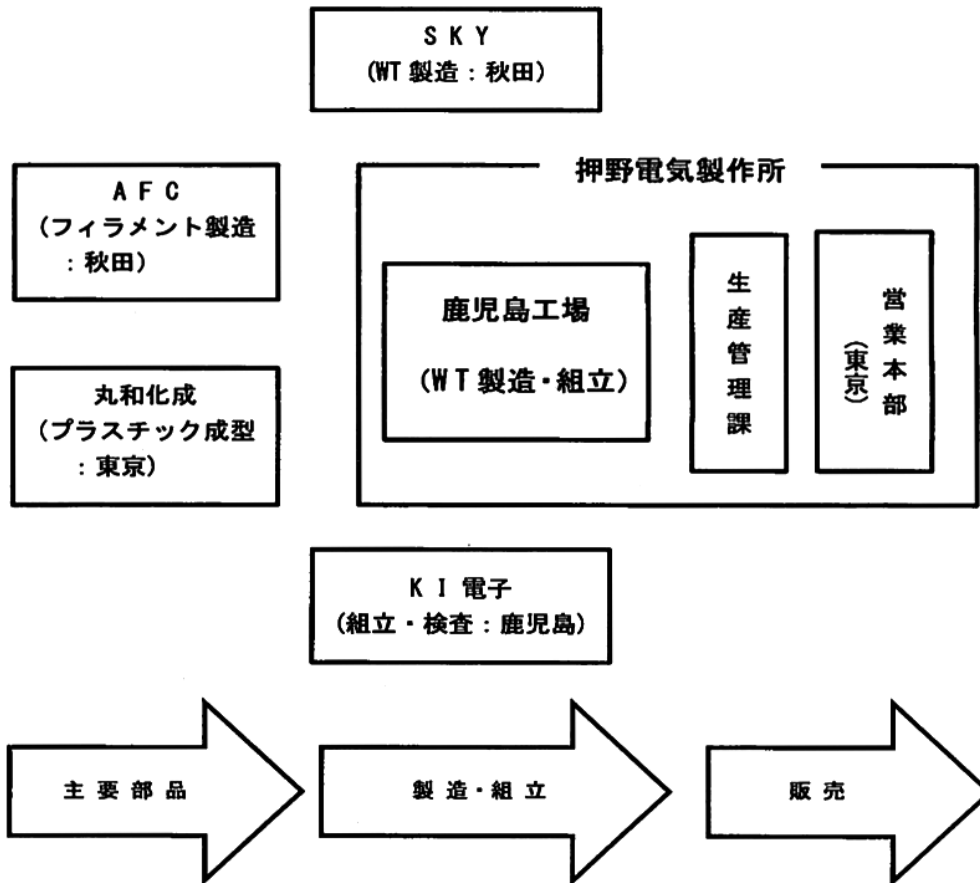
4-1 SKY・AFCと押野鹿児島工場との関係

この点に関連して、両社が設立された当時における押野電気グループ全体を示したのが図2である。同図から明らかなように、SKY・AFCは、押野からスピン・アウトした後も押野グループのサプライチェーンのなかで他組織と密接な関係を保持しながら活動していたといえる。そこで、押野鹿児島工場との関係からみたSKY・AFCの事業展開に着目するならば、以下のようであった。

質問者：それでは押野鹿児島工場とSKYとの分担についてご説明ください。

進藤：設立当初はSKYが国内品を作り、鹿児島工場は海外品を作るということになっていました。

図2 押野電気グループとサプライチェーン



(資料) 押野電気製作所提供資料より作成

しかし最近では、海外のうち自動車メーカー G 社へ部品を納める D 社からの受注が減少傾向にあります。そうなってくると鹿児島工場は量産工場ですから、その取引以外で数を確保する必要があります。それで国内向け受注の一部を鹿児島が引き受けるようになっています。押野の生産管理としては、自社工場（鹿児島工場）の生産確保を優先しながら、バランスをとる必要があります。これを製品でみると、鹿児島が受け持つ品種は、当初、バルブの外形で3.5、4.1、5.2～5.3ミリの3種類でした。一方、SKYは3.0、4.7、6.5ミリというふうに棲み分けていました。今はそのうちの4.7ミ리를鹿児島に持って行っています。

質問者：押野の子会社で KI 電子というのが鹿児島にありますが（図2参照）。

進藤：鹿児島工場も SKY もそうですが、ランプを作りアッセンブリーまでします。そのうえで、そのランプにキャップを付けることが多いです。青、赤、白などのキャップを付けます。今は、シリコンキャップを付けます。それらの一部は自動機でやっていますが、細かいのは機械でなかなか仕上げるのが難しい。ランプにそうした手仕上げをするのが KI 電子です。社員はパートさんを入れて30名ほどです。さらに、内職が300人から400人くらいいます。KI 電子はこれら内職のとりまとめもやっています。

歴史的に言えば、もともとは秋田の松ヶ崎工場で行っていた仕事を鹿児島へ持って行ったものです。松ヶ崎工場は、ガスヒーターなどの点火装置やミゼットフランジなどの仕上げをやっていました。女性だけの職場だったのですが作業効率が良くなかった。それで KI 電子も同様な仕事を請け

負うことになり、当初はKI（鹿児島）と松ヶ崎（秋田）の両方でやっていました。先ほども言ったように、KI電子は内職を利用する形でコストダウンをはかったのです。それに加えて、排気上のヒーターがガスヒーターから電気ヒーターに変わったことや、点灯検査機で全製品の点灯検査をすることでエイジング工程が必要なくなり、松ヶ崎で製造を続けるメリットがだんだんとなくなっていきました。こうした理由から、KIへの仕事が多くなってゆき、松ヶ崎は閉鎖することになったのです。

質問者：それでは改めてSKY・AFCの製品であるT-1、T-4、T-6、T-7についてお聞きます。

進藤：これはバルブの外形を言っています。一応カタログではT～と書きますが、わが社の製品は厳密には市販の製品と違うところがあります。例えばT-1という通常は3.1ミリの大きさのランプのことですが、わが社のそれは3.05ミリの製品が中心です。

質問者：なぜ一般製品と違うのですか。

進藤：それは仕上げに際してのエッチングの相違です。押野は何十年とこれでやっていますが、他の電球屋さんはT-1=3.1なのです。

質問者：SKYは「一部加工」を担当することになっていますが、具体的にはどういうことですか。

進藤：「一部加工」というのはアッセンブリー品という意味です。現在、SKYにはアッセンブリー機が1台だけあり、それをやっています。押野の場合、例えばT-1関係のランプは鹿児島で作れば鹿児島でアッセンブリーすることになります。SKYでは、リードカットとかフォーミングとかはここ（雄和）でやります。しかし、ベーシングは全部を秋田や東京の外注に出します。そこで仕上げてもらった後にKIに持って行き検査されて出荷されます。ですから秋田で作ると物流コストが結構かかります。

質問者：基本的にはSKYになる以前から今日まで、秋田で製造されている製品自体に、そんなに変化はないわけですか。

進藤：基本的に変化はないです。例えばT-1の機械というと3.05ミリ用となっています。それを今度は6.5や4.7用に変えたとすると機械を相当改造しなくてはなりません。それには1週間くらいかかります。継線機も、排気も変えねばならなくなるため、結構時間がかかってしまい効率が悪いことになります。特に我社は、「ものを作っていくら」ですから、そういう非効率なことはできればやりたくないし、実際あまりやりません。これに対して鹿児島は受注先の要望によってT-1だとか4.7用に切り替えをしています。それは保有台数がSKYは6台しかないですが、鹿児島は13台持っているため、切り替えにも応じられるのです。

質問者：SKYはオール受注生産とのことですが、それは全て押野からの受注ということですか。

進藤：SKYは押野の生産管理から注文を受ける形で生産する受注生産方式をとっています。その後、押野の生産管理が鹿児島に移転したので、現在は鹿児島にある生産管理からの受注生産です。我社の製品全てを押野に納入しています。

質問者：小口のオーダーにも対応しているのですか。

進藤：はい。押野の生産管理でいうと、本来であれば1ラインの生産能力というのは1日18,000から20,000個です。しかしそれを割る注文が結構あります。6,000個とか3,000個というものです。この頃はそれが頻発しています。

質問者：しかしその水準では量産効果が十分に発揮できず、コスト低減が難しいのではないですか。

進藤：はい。ランプというのは、本来であるとフィラメント設計の段階で全て同じ長さで良いならば、切り替えの手間が少なく済みます。しかし小口のオーダーが多いと、フィラメントの長さもまちまちなわけですから。そうするとその都度継線機の段取り替えをする必要があります。

質問者：段取り替えには時間がかかるわけですか。

進藤：はい。2～3時間ほどかかります。作るのは大体1時間あたり2千何百個作るわけです。これに対して6,000個作ろうか10,000個作ろうか、段取り替えに3時間ほどかかるわけです。

質問者：つまり小口になればなるほど段取り替えのコストが相対的にかかるということですか。

進藤：はい。そのコストが半端ではないということです。材料も無駄になります。

質問者：SKYに小口オーダーが多くなったということは、以前に比べて押野さん自体が受ける小口注文が増えているということでしょうか。

進藤：その通りです。今までは数十万単位のものだったのが、最近では数万個、数千個のオーダーにも対応するようになってきたということです。もっとも昔から常に小口注文はありました。その場合は、ある程度作り貯めする形で対応していました。ところが今は押野としてもなるべく在庫を持たない方針のもとで、小口オーダーにも対応しているわけです。

質問者：続いて秋田で生産活動をするうえで大変な点について、例えば雪が降ると支障をきたすことはないですか。

進藤：生産に関しては関係ないです。むしろ一番嫌なのは梅雨時です。湿気があるとどうしても材料が湿気てしまいます。バルブの中が湿気ていると、排気上、酸素、水素、水分が残ってしまうおそれがあります。ランプは水分を嫌います。排気過程での真空化を湿気が邪魔するので一番嫌です。逆に冬というのは乾燥期ですから、生産上あまり問題はありません。

質問者：そうすると自然の問題というよりも、むしろ東京－鹿児島－秋田との距離の問題でしょうか。輸送に際しては、例えば飛行機で運ぶこともありますか。

進藤：あります。至急便の場合です。トラックですと大体鹿児島に2泊3日です。空輸ですと次の日に着きますから。

4-2 SKY・AFCの事業展開に対する押野の支援

以上、SKY・AFCと押野鹿児島工場との関係についてみてきた。同証言から、(1)SKYは鹿児島にある押野の生産管理から全てのオーダーを受けて生産する体制をとっていたこと、(2)その場合、設立当初はAFCからのフィラメント供給を受けつつ国内市場向けのSMLを製造していたのに対して、押野鹿児島工場は主に海外向けの製品を作るという棲み分けが成立していたこと、(3)しかし

その後、海外からの受注が減少するなかで、SKY 製品の一部を押野鹿児島工場に移転するに至ったことがわかる。

こうした生産体制の再編は、押野グループ全体にとって、主力工場であり量産によるスケールメリットを追求する鹿児島工場の生産を基本とした結果であったとみることができる。しかしその一方で、押野側がSKY・AFC生産の継続に対して、一定の支援を行っていた点も看過することはできない。そこで以下では、そうした点を中心にSKY・AFCの事業展開についてみてゆく。

質問者：押野の生産管理部の立場からみると鹿児島工場の生産を基本とすることになりませんか。

進藤：それはそうです。それを基本としたうえでSKYに注文を回すという形になります。

質問者：注文がSKYにあまり流れずに利益があがらない場合に、押野さんがなんらかの面倒を見てくれるのでしょうか。

進藤：注文のコントロールはある程度してくれます。とはいえ明確な最低保証というものがあるわけではありません。ただし例えば「今年の目標は180万だよ」といった予定は前もって連絡がきます。

質問者：SKYが押野さん以外から注文をとる予定はありますか。

進藤：SKYは製造工場で営業はありません。押野以外から注文をとる予定はないです。

質問者：SKYの建物、設備については、押野さんからリースしているとのことですが。

進藤：はい。リース料を払っています。リース料は押野側からみれば減価償却なわけですが。本来であれば年々下がってもいいわけですが、最初の3年くらいは据え置かれました。それで押野が納入価格に関して値下げ交渉をしてくる時に、SKYからは「それならばリース料も下げてくれ」という要求を出してきました。つまりSKYも努力するから押野も下げてくれというやり方でやってきました。

質問者：SKYが納入価格を下げるかわりに、リース料も下げてもらう形で利益を確保してきたということですか。

進藤：そうです。

質問者：SKY・AFC設立後、進藤社長は押野の本社にどのくらいの頻度で行かれるのですか。

進藤：月2回です。押野の生産会議と品質会議に出るためです。会社設立当初は一切関係なかったのですが、1～2年して幹部会に出席を求められました。その後、生産会議に出てくださいと言われて出席しています。

質問者：SKYではどのような会議をやりますか。

進藤：設立当初は全体会議をよくやりましたが、シフトをくむようになってからは難しくなりました。それともう1つは毎朝ミーティングをしています。製造担当からは、前日あったこととどういう状況だったかについて発表させます。抜き取り検査については、何が良くて何が悪いか、どういう状態かというのを発表させます。私は会社全体の流れについて話をします。情報は一応オープンにし

て、上も下も同じ情報を共有し、それに従って全員で動くという考えでやっています。あと毎月月末に全部集計が出た段階で、報告書を各自に書かせて、それを全員に回覧させる形で情報の共有化をはかっています。

質問者：SKY・AFCの立ち上げ以降に新しく設備を入れたということありますか。

進藤：AFCのフィラメントのほうでは入れました。

質問者：SKYはかつての秋田工場の時と比べて生産規模をスリム化されたわけですが、生産効率の点ではどうでしょうか。

進藤：かつてよりあがっています。データの取り方があるかもしれませんが、歩留りなども含めて鹿児島よりSKYの方が良いこともあります。

質問者：SKYになってコストダウンを図るために外注を利用するようになったそうですが。

進藤：SKYにする前は30人ほど従業員がいましたから、アッセンブリーに関しては基本的に全部社内で行っていました。SKYになってからは外観検査については外注しています。ただしあくまで外観だけであって、性能に関しては全部ここでチェックしています。

質問者：その外注先というのは秋田にあるのですか。

進藤：秋田市内にあります。内職屋さんのまとめ役がいて、その人に送るとその人が全部手配してくれます。

質問者：SKYになってからですが、原材料は全て押野さんから調達されているのでしょうか。

進藤：最近はそのパターンになっています。設立当初は、自分のところで必要なものは自分で調達することを求められました。しかし今はほとんど押野経由で買っています。そうすれば押野への売り上げとの相殺になりますから手間がかからなくてすみます。

質問者：押野経由で購入する際には、押野さんとしてはいくらかマージンをとるのでしょうか。

進藤：とりません。本来ならば10%ほど取るのですが、そんなことされたら我社は干上がってしまいます。それに仮に押野から調達手数料を要求されたとしたならば、我社はその分を納入価格に上乗せすることになります。だとしたら無償でやりとりしたほうが良いという話です。

質問者：コストダウンという点では外注単価の引き下げは行いましたか。

進藤：受注が減ることになった時は頼みこんで前よりも5銭ほど下げました。とはいえ、我社はそのようなコストダウンによらなくても、基本的に数量さえ作れば利益があがる体質にしたいと考えています。

質問者：それはどれくらいの水準ですか。

進藤：大体月産ベースで200万くらいならば食べてゆけるかなというところですよ。悪くて180万は確保

したいところです。

質問者：2000年2月に創業されてからこれまでで生産量がピークだったのはいつ頃ですか。

進藤：一番利益があがったのは設立した翌年だったと思います。それは有限会社として設立すると消費税が2年間免除されたからです。その時に一番利益があがりました。例えば年商が17,000万～2億円くらいあったとすれば、消費税だけで350～400万円払うことになります。経営にとってこれは大きな額です。AFCを分離して設立した理由の1つは消費税の2年間免除があるからです。

質問者：消費税免除という特殊事情を排除した場合、2002年以降の売上は大体同じくらいですか。

進藤：4年目に受注が減って大赤字になったことがありました。500～600万円の赤字でしたが、その後2年で取り戻しました。その時は資金繰りも大変で、銀行から借金もしました。我社は月々50万円稼ぐことに汲々としているなかで、月50万ずつの返済は大変でした。とにかく資金調達のために、ありとあらゆることをやりました。結局、利益があるということは受注数量が一定規模あるということなのです。我社の場合、先ほど言いましたが大体平均して月200万個＝年2,400万個の受注があればいいですが、2,000万に減ってしまうと利益はマイナスになってしまう可能性も出てきます。これが我社の現状です。

以上、4-2節では、SKY・AFCの事業展開とそれに対する押野の支援についてみてきた。そこにみられるように、(1) SKY・AFCの社長進藤氏は、東京で開かれる押野の生産会議と品質会議に毎月出席し、押野側と生産計画と品質保持に関する情報共有を緊密にはかりつつ事業を展開した。これに対して、(2) 押野側もSKY・AFC側の要求を受け入れ設備等のリース料の引き下げに応じるとともに、原材料供給時に発生する手数料をゼロにするなどの形でSKY・AFCの事業展開を支えたのである。

5. おわりに

本論文では、進藤氏への聞き取り調査をもとにしたオーラルヒストリーによって、SKY・AFCの設立に至る経緯および設立後の事業展開についてみてきた。最後に、戦後日本における地域経済と電球メーカーの企業行動との関係を考えるうえで、これまでの証言から明らかとなった主な点をまとめると以下ようになる。

第1に注目されるのは、進藤氏がスピン・アウトして新会社を設立するうえで決定的な契機となったのが、押野の鹿児島への生産移転であったということである。

第2章でふれたように、1964年に押野は秋田市川尻町に新設された輸出電球団地内に工場を設立し、品川から全生産設備を移転する形で操業を開始した。さらにその後、同団地が閉鎖された後も大川端において電球製造を継続した。このように30年以上にわたり秋田で操業を続けてきた押野であったが、国道建設にともなう用地買収を直接的な契機として、主力工場（大川端工場）を閉鎖することとなる。それとともに、1996年には鹿児島工場を設立して、生産拠点の中心を鹿児島に移した。そのうえで、1999年には秋田で唯一生産を続けていた雄和工場での製造中止を決定するに至ったのである⁹。

こうした一連の流れにみられるように、押野としては一挙的に生産を鹿児島に移すのではなく、漸次的に秋田での生産縮小をはかっていったとみることができる。さらに雄和工場での製造中止に関しても、それが秋田からの全面撤退を意味するものでは必ずしもなかった。第3章でみたように、鹿児島への移動が難しい従業員の雇用継続にも配慮しつつ、当時製造課長であり秋田出身でもあった進藤

⁹ 以上に関しては、平沢（2016a）による。

氏によるスピン・アウト＝新会社 SKY の設立を支援する形で、秋田での電球製造を実質的には継続したのである。

その意味で、本事例でみられたスピン・アウトによる新会社設立は、製造拠点の移転にともなう地域雇用への影響に配慮した変動緩和措置としての側面を有していたととらえることができる。ただし、新会社が利益を確保しつつ経営を展開するうえでは旧従業員全ての雇用を継続できたわけではなく、新会社設立に際して人員の大幅削減による人件費の圧縮が実施されたことも、第3章からうかがえる点である。

さらに第2として、スピン・アウトによる新会社の事業展開は、雇用継続以外にも重要な役割を担うものであったことに注目する必要がある。すなわち、第4章でみたように SKY は、押野の新生産拠点＝鹿児島工場との生産の棲み分けを行いつつ、同時に相対的にロットの小さい小口受注にも対応することで、押野グループ全体の柔軟な生産体制を支えていた。

それとともに、AFC が押野グループへのフィラメント供給を一手に担っていた点が注目されよう。なお押野では同業他社とは異なり、東京品川に工場がある時代から電球の心臓部ともいえるフィラメントを内製化してきた点は先に指摘した。しかもその巻線技術には定評があり、それが同社に競争優位をもたらし、企業成長を実現する一要因となっていた¹⁰。

これに関連して第3章では、鹿児島に工場を移転した際にはフィラメントも一緒に移転し、それを秋田に供給することになっていた事実が指摘されている。しかし品質などの面から困難に直面し、当初の構想とは異なり鹿児島から秋田へと製造装置を再移転し、AFC がそれを担当することとなった。そしてそれは、上述のように同社社長の進藤氏が、電球製造のみならず技術屋としてフィラメントの生産技術にも通じていたことに起因していた。以上のように、AFC は押野の優れた製造技術をも継承しつつ、押野製 SML の競争優位を支える役割を担っていたととらえることができる。

その一方で、第3として、SKY・AFC の事業展開は、逆に押野によって支えられていた側面にも着目する必要がある。具体的には第3章の証言にあるように、スタートアップ時においては、資本金を超えて必要となった運転資金のショートに対して押野からの支援が行われた。

さらに、SKY・AFC は独自の営業、販売チャネルをもたなかったため、その製品は全て押野から受注し、押野を通じて販売された。その際、第4章の証言にあるように、押野は一切のマージン（手数料）をとらなかった。また、いわゆる最低生産保証はなかったものの、平均すると損益分岐点を超えるオーダーを SKY に出す形で同社の経営を支えたのである。

およそ以上のような押野と SKY・AFC の関係が形成されるなかで、地域経済への悪影響を極力緩和しつつ製造拠点の移転が進められたとみることができよう¹¹。

参考文献

- 菊池慶彦（2007）「日本における電球産業の形成」（『経営史学』42巻1号）
- 菊池慶彦（2012）「日露戦後の電球産業の成長」（『経営史学』47巻2号）
- 西村成弘（2005）「特許プールと電球産業統制」（京都大学『経済論叢』175巻1号）
- 西村成弘（2016）『国際特許管理の日本的展開』有斐閣
- 平沢照雄（1996）「1930年代日本における輸出電球工業の展開」（筑波大学『経済学論集』36号）
- 平沢照雄（2001）『大恐慌期日本の経済統制』日本経済評論社
- 平沢照雄（2004）「1930年代日本における電球工業統制の構造と展開」（筑波大学『経済学論集』51号）

¹⁰ 同上。

¹¹ 先にも述べたように、品川から秋田へと移転した輸出電球メーカーのほとんどが、輸出電球団地の閉鎖に至る過程で市場からの退出を余儀なくされていた。これに対して押野は、クリスマス電球から SML への製品転換を行うことで新たな企業成長を実現した（平沢2016a）。また本論文で明らかにしたように、一方で鹿児島への工場再移転をはかりつつ、他方で秋田にスピン・アウト企業を設立し支援した点でも、上記メーカーとは異なる特徴を見出すことができる。

- 平沢照雄（2013a）「近代大阪における電球工業の展開と構造」（大阪大学『経済学』63巻1号）
平沢照雄（2013b）「戦後日本における輸出電球工業の展開と輸出規制」（『歴史と経済』218号）
平沢照雄（2016a）「戦後日本における輸出電球メーカーの地方展開」（『国際日本研究』8号）
平沢照雄（2016b）「秋田における新LED電球の開発」（筑波大学『経済学論集』68号）

[付記] 本研究は日本学術振興会（JSPS）科研費（課題番号17330077、18K01718）の助成を受けた研究成果の一部である。

論文

非実用的学習環境における日本語教育の意味付け

—大学教師のライフストーリーから—

On the Role of Japanese Language Education in a Limited-use Environment:

An Analysis of Life Stories of University Teachers

シヨリナ ダリヤグル (Dariyagul SHORINA)

筑波大学大学院人文社会科学部 博士後期課程

本研究の目的は、カザフスタン日本語教育の事例を取り上げ、日本語が非実用的学習環境において教育実践を行なっている教師が語るライフストーリーを通して、教師が持つ日本語観・日本語学習観・日本語教育観を抽出し、カザフスタンにおける日本語教育の意義を考察することである。調査では、日本語学習者の立場を経て日本語教師として日本語教育に関わっている現地の非母語話者教師を対象とした。非構造化インタビューの方法を用い、まず調査協力者の日本語学習動機、学習方法という学習者の経験を尋ね、次に教師としての経験を記録した。分析の結果、日本語教育は実用性と直接関連がなくても、日本語学習自体に価値が置かれており、教師は日本語教育の目的として日本語のスキルを育成することを目指す側面だけではなく、日本語の学習を通して人材の育成を目指すことを重視する特徴が見出された。

This paper examines the learning environment of Kazakhstan, an area where Japanese language education has limited practical potential. Life stories of Japanese language teachers are employed to analyze their views on Japanese language, Japanese language learning and teaching, in order to define a purpose of the Japanese language education in Kazakhstan. Data collected from non-native teachers who experienced a Japanese language learner stage and who work in Kazakhstan is analyzed. Unstructured interview methods were used by the author to inquire into the teachers' experience as learners in terms of their motivation to study Japanese and learning methods, and about their teaching experiences. The analysis shows that even when the Japanese language education is not directly related to practicality, Japanese language learning is valued for its own sake. In addition to fostering language skills, the teachers stress the importance of training human resources by means of teaching Japanese.

キーワード：カザフスタンの日本語教育 ライフストーリー 非実用的学習環境

Keywords: Japanese Language Education in Kazakhstan, Life Story, Limited-use Environment

1. 日本語教育環境の多様性

日本語教育を外国語の学習・習得環境の観点から捉えると、「第二言語環境 (Japanese as Second Language、以下 JSL) と「外国語環境 (Japanese as Foreign Language、以下 JFL)」という大別が考えられる。実用性が高い JSL に比べ、目標言語である日本語が生活言語として使用されない JFL では、言語習得の場が主に「教室習得」になる傾向がある。JFL でも、日本との経済的、政治的関係等の社会的要因の相違から、JFL でも各地域の特徴があり、日本との経済、政治関係等といった社会的要因がその国・地域の日本語教育に強い影響を与えている。加えて、上述した JSL と JFL の区別だけではなく、アニメ等の影響により、日本語を学習する目的や動機が多様になってきていることから、情意的側面にも研究対象として焦点を当てるべきであろう。以下に、日本語教育の学習環境を、

社会的要因及び情意的要因という観点から考えていきたい。

社会的要因に関しては、歴史的、地理的、経済的など様々な要因が考えられるが、日本語母語話者とコミュニケーションする頻度や日常的に日本語・日本文化に接触する機会の多さが挙げられる。頻度や接触の多い代表的な地域として歴史的関わりが強く、地理的にも日本に近く、経済・観光などの日本人との交流が多い韓国や中国の大都市での日本語教育が代表的である。

そうした地域に対し、社会的要因からアイソレートされた日本語教育の地域では、日系企業の進出も少ないため、日本語と日本に関わるインプットが教室内に限定されやすく、日本語・日本文化の接触も多いとは言えない。福島・イヴァノヴァ (2006:49) は、このような学習環境を、「地域内に日本語コミュニティがなく、旅行、留学等で日本に行くことも稀で、教室外で日本語と接触のない海外環境における日本語学習環境」という特徴から「孤立環境」と定義している。そして、福島・イヴァノヴァは「孤立環境」にある中央アジアのウズベキスタン日本語教育の現状を改善する方法として「社会文脈化」に基づいたコースを設定することを提案している。そこでは、現地の学習者と教師のビリーフ調査の結果及びウズベキスタン日本語教育の事情と日本との外交文書等から、ウズベキスタンでの日本語教育のニーズを「人材育成」及び「相互理解」としている。

同様の観点から、荒川・和栗 (2007) はカザフスタン日本語教育の学習環境の問題として日本・日本文化のプレゼンスが薄く、日本語の教室外で日本語に接触できる機会が非常に少ないという点を改善すべく、授業中に日本事情や日本のニュースの紹介及びディスカッションという活動を通して日本に接触する試みを行なっている。活動結果の授業評価のアンケートでは、日本事情・日本文化に接触できる活動が高評価され、このような活動の時間をもっと増やして欲しいという要望があった。しかし、カリキュラム上、日本語の学習時間を消滅することは困難であり、在留邦人の人数も少ないカザフスタンの現状ではコースの受講生の要望に十分に対応することが難しく、課題解決には別の手段を考える必要性が述べられている。

上述した社会的要因は日本語自体が社会とどのように関わっているか、日本語教育がどのような状況で行われているかという現状に関わる点にある。学習環境が非孤立的であるか、孤立的であるかが、学習者個人の学習動機、さらに日本語教育機関の授業内容にも影響を及ぼしていると考えられる。

先行研究として、日本語学習環境について、日本語教育の地域差を述べた佐久間 (2006) に触れる。佐久間は海外の日本語教育の特徴を大きく、次の三つのタイプに分けている。①オーストラリアや韓国のように、前期中等教育において「中等教育段階以下の学習者が多い」地域、②ポーランドのように就職等に直接な繋がりが薄く、日本語の使用が限られた「実用に直結しない日本語教育が多い」という地域、そして、③観光業に関わる日本語教育の必要性が高いインドネシア等の地域である。

しかしながら、佐久間の分類は、あくまでも地理的分類に終わっており、学習目的や学習動機という情意的視点が欠けている。①の年少者を対象にした日本語教育の地域にしても、生徒の人格形成過程において行われており、学習目的が日本語の運用能力を育成することより、多言語・多文化に触れることを通して形成される自己認識や視野の広がりという側面が強く、日本語の実用性が主たる目的ではない。さらに、②の「実用に直結しない日本語教育が多い」地域では、その地域内において、日本企業の進出が多くなく、就職や進学等に日本語を生かす機会が制限されており、学習者の人数も多くない。日本語の実用性が限られているため、学習目標が明確に見えないのが現実的課題である。その一方で、③の「観光業に関係のある日本語教育が多い」地域においては、日本からの観光客が多く、ガイドを育成するための日本語や旅行会社やホテルの事務のための日本語の実用性が高い。

このような日本語の「実用性」という視点から、JFL 環境を分析したい。社会的要因から見た日本語教育環境の孤立性と、日本語の実用性という観点から日本語学習に関わる情意的要因は、総合的に学習環境に影響を与えている。孤立性という社会的要因は、あくまでも地理的区分であり、日本語学習者の個のレベルの分析には適さない。どの地域にも個のレベルで「実用性」の異なりがあり、日本語を学ぼうとする学習者がいて、それを支えている教師がいる。社会的要因の「非孤立性 孤立性」と情意的要因の「実用性の程度」を合わせて考えると、「非孤立・実用的学習環境」、「孤立・実用的学習環境」、「非孤立・非実用学習環境」、「孤立・非実用的学習環境」という四つの組み合わせが考え

られる。

はじめに、「非孤立・実用的学習環境」であるが、就職だけではなく、旅行や趣味等幅広い分野において日本語の実用性が高く、日本・日本語・日本文化が身近にある学習環境をいう。日本からの直行便が多い韓国や、中国の大都市での日本語教育においては、「非孤立・実用的学習環境」の地域として挙げられる。次に、日本語学習がアイソレートされている環境であっても、日系企業の社員研修センターや集中的に介護士・看護師を育成する研修センター等は、日本語の実用性が非常に高いため、「孤立・実用的学習環境」と考えられる。三つ目に「非孤立・非実用的学習環境」としては、例えば地域内に日本語・日本文化に接触することは可能であるが、日本語の実用性があまりない学習環境であるヨーロッパや日系人の住む中南米の日本語教育の状況が挙げられる。一方、日本との繋がりが薄く、孤立環境であり、地域内に日本語を実利的に生かす機会も非常に限られている「孤立・非実用的学習環境」として、中央アジアにあるカザフスタン日本語教育の学習環境が挙げられる。このような社会的要因と情意的要因を組み合わせた四つの学習環境のタイプを図1で示した。図1は、実用性と孤立性をパラメータとして考えた際のキューブリックである。矢印の方向性は環境の良し悪しや、進化を示したのではなく、対立を示したものである。

2. 研究目的

上述した四つのタイプの中で、「孤立・非実用的学習環境」の日本語教育が最も不利であると捉えがちである。例えば、福島・イヴァノヴァの「孤立環境」という定義と佐久間の「実用に直結しない日本語教育が多い」という分類は、両者ともそうした環境の特質を問題視し、環境の不利を柔らげるため、カリキュラムやシラバスを見直し環境の状況を改善する方法を探っている。しかしながら、環境の特質のみを取り上げ、固定的に環境を捉える視点には限界がある。視座を変えれば、「孤立・非実用的学習環境」という特徴があるからこそ、非母語話者同士の日本語教育コミュニティが強く、教室内が重要な場であるという意識が高まる可能性もあるが、実際にはこのような学習環境で日本語を学ぶ、教えるのはどのような意味があるのかという検討はまだ十分に行われていない。このような学習環境をより理解するために、その地域の日本語教育コミュニティが置かれている様々な社会的文脈にも着目し、内面からより深く理解する必要があると思われる。

そこで本研究では、「孤立・非実用的学習環境」の事例としてカザフスタンの日本語教育を取り上げ、そうした学習環境において教師がどのような日本語観・日本語学習観・日本語教育観を持って日本語教育に関わっているかを分析し、カザフスタンの日本語教育がいかにか構築されているかを考察する。

3. 研究方法

(1) ライフストーリー研究

教師が個人個人で持っている日本語観・日本語学習観・日本語教育観はその教師が受けてきた教育経験や自らの実践経験を通して形成されている。また、日本語観・日本語学習観・日本語教育観には教師の信念が含まれていると考えられる。教師の信念に関する研究としては、主に Horwitz (1987) が作成した質問紙が用いられ、調査されてきた。しかしながら、質問紙のアンケートを用いた調査は回答が選択肢で定められており、量的な結果しか提示できないという限界がある。また、調査実施時点の状態、つまりある段階のみの現状しか把握できない点も教師の生の声を反映しているとはいえない。そこで本研究では、教師が持っている日本語観・日本語学習観・日本語教育観の総合体(以下「観」

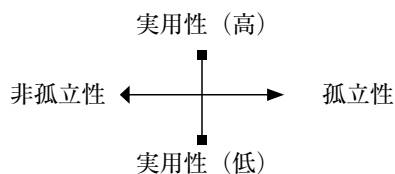


図1 学習環境要因の総合体

と称する)は、ある状況において経験した出来事を意味付けることによって変化していると考え、その変化及び形成を積極的に教師の視点から捉えるために、カザフスタン人日本語教師を対象としたライフストーリー研究を行う。

ライフストーリー研究は2000年代から日本語教育の分野でも注目を集めてきた。三代(2014)は日本語教育におけるライフストーリー研究の広がりについて、学術的背景及び社会的背景に分けて説明している。学術的背景としては、人文社会科学全体において研究法に関わる議論がなされ、質的研究法の意義が見直されたことである。そして、日本語教育もその流れの中で質的研究への注目が高まった。学術的背景及び社会的背景は相互的に深く関連しているが、社会的背景としては学習者・環境・教師が多様化してきた状況において求められる日本語教育が見直されていることである。今まで「前提」とされてきたことが問われていることから、ライフストーリー研究は学習者と教師の主観とその要因に着目し、量的研究では見失われていた側面から日本語教育を位置付けたものと言える。

ライフストーリー研究はライフヒストリー研究法に発したものである。桜井(2005)は、ライフストーリー研究を語り手の経験や見方の意味を探索する、主観的世界の解釈を重視した研究法としている。ライフストーリーは聞き手に向けて、語り手が自分の人生・生活についての個人の語るストーリーである。桜井(2002)は個人の「生」について、次のように区別している。一つ目は、実際に起こっている外的な行動や状況について観察者によっても把握できる「生活としての生(life as lived)」である。もう一つは、当事者の思想や感情から形成されている「経験としての生(life as experienced)」である。そして、もう一つは自分の人生について語るという行為から生成される「語りとしての生(life as told)」である。ライフストーリー研究はライフストーリー・インタビューを通して生成される「語りとしての生(life as told)」として研究されるものである。

語られたライフストーリーには「主観的世界の解釈」という側面が強調されているが、その「主観」について桜井(2012)が述べている「語りの様式」を基に検討したい。桜井はライフストーリー・インタビューを通して生成された語りについて、「何を語ったか」という語りの内容のみではなく、「いかに語ったか」という語りの様式が重要であると指摘している。その語りの様式は個人的な経験が語られるパーソナル・ストーリーがあり、また語り手が所属しているコミュニティーに流通しているモデル・ストーリー及び所属しているコミュニティーを超え、全体社会に流通しているマスター・ナラティブという三つのレベルが含まれている階層構造である。語り手はモデル・ストーリーとマスター・ナラティブに基づいて、自己を社会やコミュニティーにおいて位置付けている。さらに、桜井が指摘しているように、語り手がどの程度モデル・ストーリーとマスター・ナラティブに対して同調しているかが、語り手の独特なライフストーリーとして成立するのである。従って、ライフストーリー研究が個人的な経験のみに焦点を当てるのではなく、階層構造におけるマスター・ナラティブとモデル・ストーリーに対する語り手の独自の立場から表れる視点を「主観」としている。

(2) ライフストーリー研究がもたらす新たな視点

日本語教育におけるライフストーリー研究では、多様な背景と状況で日本語を学ぶ学習者及び日本語を教える教師の人生や生活を対象にしており、これまで知られていなかった教師自身の視点を社会的関係性から捉えようとしている。

以下に、桜井の「語りの様式」という枠組みから日本語教育におけるライフストーリー研究の可能性を示したい。上述したように、「語り様式」は個人的な経験が語られるパーソナル・ストーリー(以下、PS)、語り手が所属しているコミュニティーに流通しているモデル・ストーリー(以下、MS)そして社会全体において語り手のコミュニティーに対する支配的なマスター・ナラティブ(以下、MN)から階層化されている。本研究の対象であるカザフスタン日本語教育を「語りの様式」の観点から考えていきたい。カザフスタン日本語教育の「孤立・非実用的環境」という要因はカザフスタンの社会全体というマクロ状況において、日本語教育に対するMNに当てはまると考えられる。例えば、福島・イヴァノヴァの「孤立環境」という定義と佐久間の「実用に直結しない日本語教育が多い」という分類に関する視点もこのMNに着目する側面が強い。本研究では、「語りの様式」の三つの立場からカ

ザフスタン日本語教育を総合的に捉える。そのために、カザフスタン全体の状況を表す「孤立・非実用的環境」というMNに基づいて、教師が持っている「観」を明らかにする。「観」はそのコミュニティに流通しているMSに基づいて、ミクロレベルで個人的な経験(PS)の意味付けを通して形成されている。したがって、教師の「観」に着目することで、カザフスタン日本語教育コミュニティを内面から捉える有効な手段になると思われる。

4. カザフスタンにおける日本語教育の概要

本節では、カザフスタン日本語教育の歴史に触れ、カザフスタン日本語教育の実施状況について述べる。カザフスタンにおける日本語教育は1992年にアルマティ市のカザフ国立大学に日本語コースが開設されたことから始まる。教育機関、学習者数と教師数に関する変化を1998年から2015年にかけて国際交流基金が行った調査に基づいて表1にまとめた。

2000年代の初頭は高等教育機関だけではなく、年少者を対象に中等段階においても日本語教育が実施されていた。しかし、2009年以降は初等・中等教育の日本語教育が閉講され、一方で、一般市民を対象にした機関における日本語コースが開設されている。現在、カザフスタンの日本語教育は高等教育を中心に行われている。

学習者数に関しては、2000年代初頭は学習者数が増えており、特に2006年は学習者が圧倒的に増え、これまで学習者が最も多い年となった。そのような状況において、教師数も増加している。その後、教師数はある程度安定しているが、学習者数は減少している傾向が見られる。

国際交流基金(2002)は2000年から2002年にかけて、効果的な支援のあり方を把握するために、ロシア・NIS諸国を対象に日本語教育の現状に関わる「海外日本語教育機関調査」を行っている。ここでは、カザフスタンにおいて認められる日本語教育の支援に関して、教材不足や設備の問題という日本語学習を支える環境の弱点が取り上げられた。さらに、現地の教師の日本語教育の能力を向上させる必要性も述べられ、その対策として巡回セミナーや勉強会を定期的実施することが提案された。学習者の学習意欲の問題については、日本の映画の上映や生け花や茶道のデモンストレーション等を行い、日本文化に接触する機会を与えることによって、学習意欲を維持する方法が提案された。様々な問題を乗り越え、今現在、高等教育では3つの大学及び一般市民向けの1つの機関が日本語教育の中心となっている。3つの高等教育機関は日本と日本語を専攻として学べる大学であり、通訳、日本史、東洋学の専門家を育成している。さらに、教材や設備に関わる援助と共に教師研修やセミナーのような日本からの支援を優先的に受けてきた教育機関でもある。カザフスタンの主な日本語教育は大学で行われており、大学で教えている日本語の教師が日本語教育の中核的な実践者であると言える。

5. 調査方法

本研究で扱うデータはカザフスタン人日本語教師を対象に2015年7月から9月にかけて行ったライフストーリー・インタビューのデータである。

インタビュー内容は大きく分け、学習者としての経験及び教師としての経験である。はじめに調査協力者の日本語学習の動機や学習方法等について尋ねた。次に、教師になった理由やきっかけについて質問し、教師としての経験について語ってもらった。インタビュー中は基本的には調査協力者が自

表1 カザフスタンの日本語教育の現状(国際交流基金1998-2015年の調査より作成)

年度	初等・中等教育			高等教育			その他 教育機関		
	機関	教師	学習者	機関	教師	学習者	機関	教師	学習者
1998	-	-	-	4	10	296	-	-	-
2003	3	3	220	8	23	775	-	-	-
2006	3	3	226	8	35	1,073	-	-	-
2009	-	-	-	8	42	723	1	-	357
2012	-	-	-	4	41	180	1	-	171
2015	-	-	-	5	30	126	1	-	225

由に話せるように配慮した。語りの途中で筆者から「これについてももう少し詳しく教えてください」のような確認の質問も行った。

カザフスタンでは、一般的に国語であるカザフ語及び共通語であるロシア語という二つの言語が使用されている。そこで、ライフストーリー・インタビューにおいてスムーズに語りができるように語り手にとって語りやすい言語を選択してもらった。本稿では、ロシア語で語られたライフストーリーインタビューのデータを扱う。インタビューは調査協力者の許可を得て、録音し、録音したデータをそのままトランスクリプションした。次に、トランスクリプションに基づき、分析の対象となる部分を和訳した。なお、翻訳による意味のズレを避けるために、作成したトランスクリプションの内容をインタビューに答えた調査協力者本人に確認してもらった。また、個人情報に当たる調査協力者の人名、教育機関名等は特定できないように省略した。調査協力者の人名は筆者が付けたアルファベット文字を使用した。ライフストーリー・インタビューは12名の教師を対象に行った。なお、本稿ではそれぞれ異なる教育機関に所属している教師 A、教師 B、教師 C の3名のデータを扱う。

次節では、まず調査協力者の背景を表2に示し、3名の教師が語ったライフストーリーを要約する。そして、教師の語りから読み取れる共通の「観」について述べる。

6. 結果と考察

(1) 調査協力者の紹介

カザフスタン日本語教育は1992年に始まったが、機関数、学習者数、教師数に関しては年度によって変化があり、異なる状況が見られた。学習者数、教師数の増加と減少及び教育機関の入れ替えはそのまま、カザフスタン社会全体における日本語教育の位置付けの変化を示していると言える。本論文で取り上げる3名の教師はそれぞれ異なる時期から日本語教育コミュニティに関わっているため、この3名に対して調査を行うことで、より幅広くカザフスタン日本語教育の現状を捉えられると思われる。

26年目を迎えたカザフスタン日本語教育を1992年から2004年までの前半と2005年以降の後半に区切って考えると、教師 A と教師 B の2名はカザフスタン日本語教育が始まった90年代に日本語教育コミュニティに学習者として参加し、後半の段階から教師として関わっている。その一方、教師 C は後半の段階のみを経験している。以下の表2に、教師3名の日本語学習歴と教師歴を示す。

(2) 調査協力者のストーリー

調査協力者のライフストーリーをもとに分節されたストーリーをテーマごとに分け、記述する。「」は調査協力者の語りの引用である。

教師 A：30代女性、日本語学習歴：5年、日本語教授歴：8年、インタビュー時間：1時間20分

日本語を学び始めた理由ときっかけ：

教師 A は高校の時からドイツ語などを学び、言語学習が得意であった。そこで、大学でも言語の学習をしたいと考えた。国費学生として X 大学に入学し、入学してから学習する言語を選択するという流れであった。その時、韓国語に少し興味を持ったが、「当時は世界の注目がヨーロッパではなく、アジアにあって、エクゾチックなイメージがある日本語を学ぶことにしました」。しかし、日本について「日本はとても発展している国」ということ以外は知識がなかった。

表2 調査協力者のプロフィール

調査対象者	日本語学習歴 (年)	卒業後進路	調査時点の教師歴 (年)
教師 A	1998-2003	日本史の教師	2006-2015
教師 B	1999-2004	事務員	2006-2015
教師 C	2007-2011	日本語教師	2011-2015

日本語学習の楽しさ：

日本語を学び始め、日本語が好きになったという。クラスの友達同士の友好的な競争があり、日本語を学ぶのはとても楽しかったことがその理由である。そして、日本語母語話者の教師もいて、漢字を少し困難に感じたが、日本語を学びたいというやる気が強く、宿題が多くても、それを楽しくやっていた。

日本語能力に対する自己評価：

日本語を学んだ3年目には、歴史学あるいは言語学という専攻を選択しなければならなかった。クラスのみんなで「歴史学にする」と約束していたのに、結局教師Aを含む二人だけが主専攻を歴史学にし、クラスの仲間と別々になった。その結果、大学の4と5年目は日本語の授業が減り、日本史に関連する授業が多くなった。そして、「新しいクラスのメンバーは欠席も多くて、やる気もなく、クラスの雰囲気は急に変りました」、「その時、私は日本語のレベルが急に落ちました」のように、自分の日本語のレベル低下を学習環境の変化と関連付けている。

日本史を教える教師が不足していたため、卒業後も大学に残り、日本史の授業を担当することになった。日本史の授業を母語で教えていたが、しばらくして短期研修で初めて日本に行くことになった。日本では「以前は間違いをしてしまうと思って、日本人と話すのはちょっとストレスでした」という緊張感がなくなり、「自分の日本語を低く評価していました」という意識の変化が見られた。

教師としてのロールモデル：

日本語を問題なく使えたことによって自分の日本語に対する自信がついた。その結果、帰国後は日本語の授業も担当することにした。

教師Aは日本語教師になり、自分が受けてきた日本語教育を基盤のモデルとした。その中で、特に自分にとっての「初めての先生」を肯定的に捉え、「初めての先生」と同様に学習項目に非常に細かく触れている。例えば、ひらがなの文字を導入している際「文字を一つ一つ」と「学習者を一人一人」の様子を確認しながら、導入している。また、学習者の理解をモニターしながら、必要に応じて教室外でも個別に対応することが珍しくない。

教師としての失敗経験：

教師としての当初には、「日本語を学びたい」という学習者の要望に応える為に「何でもしてあげたいという気持ちでした」、「自分が知っていることを全部与えたかったです」という熱心さであった。

そして、あまりやる気がなかった学習者に対して、日本についての面白い話をし、積極的に問題を解決するようにしていた。しかし、積極的に授業外にも個別に対応しても、学習者の学習態度に変化がなかった。クラスには別の専攻を目指したが、奨学金の関係や受験の結果によって仕方なく日本語を学ぶことになった学習者もまれにいる。そういう「元々日本語に興味ない」学習者に対して、教師があまり何もできなかったという経験がある。

現在の姿：

日本で研修生として、教師が学習内容に表面的にしか触れない日本語の授業を経験している。また、興味を持ち、同僚の授業を見学している。だが、日本で経験した教え方と身近にいる同僚の「説明しない」、「練習もしない」という方法に関して疑問を持ち、改めて「私は違います」と対立的な立場を示している。そして、教師が学習者と一緒に細かく指導する作業の重要性を示し、そのような教師の対応が言語学習の成果に関わる条件として位置づけている。

学習者との関係：

「細かく」、「詳しく」学習項目に触れている教師Aは「私の学生は授業の時、勉強以外に話したいテーマがたくさんあって、授業を計画通りにできなくなります」ということを問題にしている。しかし、学習者に相談したいことを無視せずに「それについて授業の後で話そうね」としている。「私は学生にとって何でも相談できるお母さん」、「先生と学生という距離をあまり起きません」という立場であり、授業以外の時間でも学習者と接触することが多く、学習者との信頼関係の構築を重要視している。しかも、日本語学習に限らず、どんなことでも話し合える環境を作っている。

「今の学習者」:

教師 A は「私たち、教師に言われたことだけをやって、教師に誘導されていました」とし、両親や教師のような立場が上の人に従うことを現地のメンタリティーであると説明している。それに対して、「今の学生」はそうではなく、「もっと自由」「もっと積極的」「すべて自分次第だと分かっています」という変化があることを自分の学習者を見て、実感している。

教師 B : 30代女性、日本語学習歴 : 5 年、日本語教授歴 : 8 年、インタビュー時間 : 1 時間17分**日本語を学び始めた理由ときっかけ :**

教師 B は、日本という国を肯定的に捉えていた母親に勧められ、日本語の学習を始めた。当時、法律を専攻に学ぶことが人気であり、教師 B もその流れに沿って「優秀な法律家」になりたかったと言う。しかし、法律を学ぶ人が多く、就職することができないという恐れがあったため、当初は明確な学習目標がなかったが、「日本語は将来性がある言語」というイメージがあったことから、日本語学習を始めた。

日本語学習に対する困難 :

日本語学習について、教師の教授力及び授業の内容に対する不満が学習に困難を感じた原因として語られた。授業中にあまり理解できなかった学習項目を自宅で自習した。その中で、漢字は、ある程度自分で学習できれば、文法については、先生に頼らざるを得ないと感じた。

日本語が生かせない時期 :

このように日本語を学習してきた教師 B は日本語の成績が良かったと強調している。それにも関わらず、希望していた機関に就職できなかったため、卒業後は教師になるまで、しばらく日本語と全く関わりのない仕事をしてきた。しかし、5年間日本語を学び、大学卒業後は日本語を生かす可能性がなくても、日本語力を維持するために、一般市民向けの日本語コースに申請し、週に2回中上級向けの日本語の授業を受けていた。

以上のように、日本語の使用場所や機会が限られていたことに対して、教師 B は非常に残念に思っていた。母親に「自分の専門を生かしてね」と言われたこともあり、日本語教師になりたかったが、そのような募集がなかったため、国際関係の仕事をすることを決断した。しかしながら、その時、卒業した大学から、教員不足で困っているという急ぎの連絡を受けたことがきっかけで、大学で日本語を教えるようになった。

教師としての経験 :

教師になったばかりの当時、2名の教師が日本企業に就職し、退職した。そのため、教授の経験がなかったにも関わらず、数多くの授業を担当することになった。このような状況において、教師 B は自分の日本語に対して不安があり、学習者の立場に戻り、授業で扱う教科書を予習した。

教師研修の経験 :

教師 B は日本語力があるので、日本語が教えられると判断され、教師になった。そして、日本語を教える際、自分の教授力より日本語力に注目する傾向であった。また、日本語を実際に教えながら、教授の経験を重ねたが、カザフスタン国内において、教授法について学ぶ機会があまりなかった。そこで、日本で教師研修を受けた経験を通して、自分の授業に対するいくつかの気づきができた。研修の前は教師の説明等で教師の発話が多く、学習者には話す機会が限られていたと自分の授業を振り返る。

現在の姿 :

教師 B は現在の自分を自分が受けてきた授業と関連している。使用教材が限られていたことを強調し、受けてきた授業が自分の日本語力に良くない影響を与えたと批判的に捉えている。そして、教えるスタイルとして、自身の受けてきた日本語の授業をアンチモデルとして捉え、多様な教材を使用し、数多くの課題を提供している。その一方で、自分の教授スタイルは教師 B 及び学習者にとって負担が多すぎることを認めつつ、学習環境の関係で自分の教えるスタイルを変えることは難しいと判断している。

さらに、現在の教師 B は学習者の学習意欲の重要性に注目し、中でも、特に教師の役割を強

調している。「よく」学習することを「いい成績」及び「就職の可能性」と関連付け、学習者の動機付けを高めるために、外発的な手段を使用している。また、授業外の時間にも、効果的に学習できるように、学習者に多様なリソースを与えている。

教師としてのやり甲斐：

教師Bは日本語の教師であることを非常に肯定的に捉え、その理由として、自分が日本語を教えているだけではなく、授業の準備等で、日本や日本語についてもっと知ることができ、自分の成長を感じる側面があると語った。

教師C：30代女性、日本語学習歴：4年、日本語教授歴：5年、インタビュー時間：1時間25分 日本語を学び始めた理由ときっかけ：

教師Cはそもそも外国語を学習したいという要望があり、日本語の学習を開始した。当時は日本と日本語ブームの時期であった。しかしながら、教師C自身は大学に入学する前「日本」と接触する経験があまりなかったと言う。

日本語学習の楽しさと不安：

教師Cは日本語学習について、1年目は授業が面白く、教師の対応もよく、日本語の学習を楽しんだという経験が語られた。しかし、学習内容が増加し、それにつれて、成績が低下したことが原因で日本語を学習する動機が減退した時期もあった。

学習する文法の項目が非常に多く、全てを把握するのは難しかった。また、新しい文法が使われている文章や会話をそのまま暗記するという宿題が多く、学習者の負担が大きかった。そして、日本事情に関わる情報も全て日本語で与えられており、同級生の中、途中で辞めた人もいる。しかし、教師Cはその時に、「日本語の学習は自分のためだ」という意識が強化され、日本語学習に積極的に取り組むことを決意したと言う。

教師としての失敗経験：

一緒に入学した同級生の18名の中で、辞める人もいたため、最終的に卒業したのは6名のみである。しかもその6名の中で、数人のみが日本語と関連のある仕事をしている。教師Cは大学3年目から日本語を教えることに興味を持ち、普段学習者が見えない教師がやっている作業について積極的に調べたとする。そして、大学を卒業し直後、同大学の日本語教師になる。

教授の経験が全くなかった教師Cは自分の授業について「一方的に説明していました」と批判的に評価している。コースの1年後は、学習者が目標のレベルまで達成できなかったことを、自分の教え方の失敗と関連づけている。また、学習者であった自分自身の立場から、教師になった立場に切り替えられなかった時期もあり、学習者に対して、「優しすぎました」と反省している。こうした自分の姿勢が学習者に望ましくない影響を与えたことから、教師の役割について、日本語の文法を説明するだけではなく、教室において、適切な学習環境のために、学習者を管理するという役割の重要性が語られた。

教師研修の経験：

教師Cは同僚から教授法に関するアドバイスや指示を受け、授業を進めてきた。しかし、日本で半年間非母語話者教師のための研修を受講し、様々な発見ができた。その研修には教授法に関する基礎的講習や具体的な教え方の実習もあり、非常に有意義であった。研修前の自分の授業は教師の存在が大きすぎたと反省し、学習者に日本語を話す機会をもっと与えるという授業を目指している。しかし、その一方で、研修中に教わった「学習者主体」の授業がスムーズにできないときもあることから、研修で教わった日本語の教え方を理想、参考にはしていても、学習者の要望に応じて、また自分の状況に合わせて、教師中心に説明する授業も行っている。

現在の姿：

学習動機の重要性について気づきがあり、学習者の動機を維持するために、授業の多様性を感じさせるために、工夫していると言う。

現在、同僚間でも学習者の自律性を重視し、自律性を育成するためのトレーニングを行うようにな

った。その背景には、授業時間不足と教師がいつでも対応できないという状況がある。内発的な動機を持ち、学習に取り組むという学習者への支援を目指している。そのため、成績を付けないという条件を設定し、外発的な動機に繋がることを避けている。その一方で、学習者に決まった時間に自習させることと課題を提出してもらい、チェックすることによって、学習者を管理している。

(3) 考察

教師3名のライフストーリーを見てきたが、次に3名のライフストーリーの語りから読み取れる日本語観・日本語学習観・日本語教育観についてまとめる。それぞれの「観」の中身を表す見出しを作成し、【 】に示す。

日本語観に関しては3名の語りの中に共通している捉え方が見られた。さらに、日本語観が変容しているプロセスも見られた。教師A、教師B、教師Cは日本語を学び始める段階においてカザフスタン社会全体に流通している【発展している国の言葉】、【珍しいことば】というMNに基づいて日本語を学び始める。しかし、【発展している国の言葉】、【珍しいことば】という日本語観が日本語に対する全体的なイメージを表している一方、実用性の可能性が見えない。具体的には何のための日本語かという教師自身の日本語観がまだ形成されていない段階である。それは、日本語学習者が最も多かった2000年代においても、教師Cが語る「日本語のブームだったので、日本語を学ぶことにしました」の状況も同様であり、日本と日本語に対する憧れが表れている一方、実用的な側面が見えない。

このような状況で日本語を学び始める3名の教師が日本語学習を通して、初めて日本・日本文化・日本語に接触する。教師A、教師B、教師Cは漢字学習の大変さや文法学習等、困難に感じたことがあり、また、教師Cの語りに見られたように日本語学習の大変さで大学を辞めた人もおり【難しい日本語】という日本語観が形成されている。しかし、教師A、教師B、教師Cの場合は【美しい日本語】という日本語観も形成されており、それが日本語学習を支える価値観であった。

さらに、大学卒業後に自分のものになった日本語を生かす機会があまりないという現実に直面する教師には、【忘れたくない日本語】及び【生かしたい日本語】という日本語観が見出された。そして、【発展している国の言葉】、【珍しいことば】というMNの社会的コンテクストを外れ、【難しい日本語】、【美しい日本語】というコミュニティのMSを経て【自分を形成する日本語】という日本語に対する自分自身の位置付けが示された。

次に、教師のライフストーリーから見られる日本語学習観について考察する。日本語学習観は上記の【難しい日本語】という日本語観とも関連している。そして、「孤立・非実用的学習環境」にあるカザフスタン日本語教育において教師の存在が大きいことが見られた。3名の語りには、日本語のインプットは主に教師あるいは教師が提供する教材や資料に限られている。そこで、【日本語学習は詳しい説明が必要】及び【教師は学習リソースを与える】と教師の役割が強調されている日本語学習観である。また、教師の存在が大きくなるにつれ、日本語学習が「教室」という場に限定されている現状が見られた。

最後に、教師の日本語教育観について考察する。カザフスタンでは、日本語の能力があれば、日本語が教えられる人材と判断されることが多い。教師A、教師B、教師Cは日本語の教授法について学んだことがなく、教師になってから「日本語はどう教えればいいのか」、「どうすればいいか、全くわからなかった」という問題に直面する。3名の教師が日本語を教える立場になった直後、【日本語学習は詳しい説明が必要】という自分の日本語学習観に基づいて日本語を教え始める。その結果、「一方的に教えていた」、「知っていることを全部伝えたかった」という行為が語りに見られた。しかし、自分の行為のみではなく、学習者の様子や反応にも注目することで、日本語教育観を検証するきっかけとなる。また、教師Bと教師Cは日本で教師研修を受けているが、その研修を通して教師としての視野が広がり、重要な経験として語られた。自分の実践に関する日本語教育観は主に教室の参加者同士の生のコミュニケーションを通して形成されおり、日本語を教える際に教師と学習者間の信頼関係の必要性が感じられ【信頼関係を構築する日本語教育】と形成された日本語教育観が重要な側面として語られている。

7. まとめと今後の課題

「孤立・非実用的学習環境」の事例として、カザフスタン人日本語教師のライフストーリーを通してカザフスタンの日本語教育をカザフスタン社会、日本語教育コミュニティ、そのコミュニティを支えている教師という階層から見てきた。学習者及び教師の経験を持ち、日本語教育に関わっているカザフスタン人日本語教師には【自分を形成する日本語】という日本語観、【日本語学習は詳しい説明が必要】という日本語学習観、【信頼関係を構築する日本語教育】という日本語教育観が見出された。

日本語の実用性がそれほど高くないカザフスタンでは日本語を学習するきっかけが漠然としているが、【自分を形成する日本語】という日本語に対する位置づけが実用性を重視する言語教育の理論に反して、日本語学習を通して日本語そのものに接触すること自体が動機になっていると思われる。それは嗜好的な意味づけとも言えるが、言語を学習するプロセスを通してその言語が自分の資源になり、新たな自分に出会うということであり、このプロセス自体に意味があることが考えられる。【自分を形成する日本語】とは、地理的などの社会的要因ではなく、個人的で情意的な要因に位置付けられるものである。

そして、【日本語学習は詳しい説明が必要】という日本語学習観から、社会的要因として孤立しており、情意的要因として実利がない非実用的環境では、日本語の「教室」が果たす重要な役割が明らかになった。その「教室」は当然日本語の文法を学び、会話を練習するなどという言語学習活動の学びの場である、それと同時に教師にとって自分のものになった日本語を生かし、自己実現を可能にする場でもある。教室内で日本語学習を通して、日本と日本文化に触れる機会が得られ、非母語話者同士が日本語コミュニティを構成する特徴が見られた。このような状況で「教室」の参加者同士の相互理解が重要になり、【信頼関係を構築する日本語教育】という日本語教育観が形成されている。

このような現象は教師のライフストーリーからその教師の「主観」に焦点を当てたことによって、社会的な状況に反する教師の独自の立場を把握することができた。そして、本研究で取り上げた教師のライフストーリーは実用性を重視した日本語教育の環境に対し、「自己実現性」という日本語教育の側面が見られとことは、カザフスタンのみならず、日本語が非実用的である環境における日本語教育にも有益なヒントとなると確信する。

さらに、教師の語りには「今の学生は違う」、「今の学生は日本のことをよく知っている」、「今の学生ははっきりした目的があって、日本語を学んでいる」のように、学習者の変化についても語られた。その学習者の変化には日本語教育に関わる社会的要因及び情意的要因の変化もあり、カザフスタン社会全体の現状が変化していると思われる。このことから、「孤立・非実用的学習環境」が固定化されているのではなく、時代とともに変容していると考えられ、今後、「孤立・非実用的学習環境」の変容の過程について明らかにしていきたい。

参考文献

- 荒川友幸・和栗夏海 (2007) 「カザフスタンにおける日本語初級カリキュラム—日本人材開発センターの新しい試み—」『国際交流基金日本語教育紀要』 3, pp.123-133.
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学 ライフストーリーの書き方』 せりか書房
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』 弘文堂
- 桜井厚・小林多寿子 (編) (2005) 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』 せりか書房
- 福島青史・イヴァノヴァマリナー (2006) 「孤立環境における日本語教育の社会文脈化の試み—ウズベキスタン・日本人開発センターを例として—」『国際交流基金紀要』 3, pp.49-64
- 三代純平 (2014) 「日本語教育におけるライフストーリー研究の現在—その課題と可能性について—」『リテラシーズ』 14, pp.1-10.
- Horwitz, E. K. (1987) Surveying Student Beliefs about Language Learning. In A. Wenden & J. Rubin (eds.) *Learner Strategies in Language Learning*. 119-129. London: Prentice Hall International

参考ウェブサイト

国際交流基金「海外日本語教育の現状 1998年度日本語教育機関調査」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey98.html>

国際交流基金「日本語教育国別事情調査 ロシア・NIS 諸国日本語事情」

https://www.jpf.go.jp/j/publish/japanese/russia_nis/

国際交流基金「海外日本語教育の現状 2003年度日本語教育機関調査」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey03.html>

国際交流基金「海外日本語教育の現状 2006年度日本語教育機関調査」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey06.html>

国際交流基金「海外日本語教育の現状 2009年度日本語教育機関調査」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey09.html>

国際交流基金「海外日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html>

研究ノート

来たるべき多言語世界における日本語の翻訳発信のために
For the Translation and Presentation of the Japanese Language in an Evolving Multilingual World

津城 寛文 (Hirofumi TSUSHIRO)
筑波大学人文社会系 教授

英語が現代世界の国際語となる中、言語の多様性を確保しようとする試みも、各所でなされている。単調な生物世界が生態学的に脆弱であるように、単調な言語世界も言語生態学的に脆弱であるに違いないという直感、また人類にとって言語の多様性が、コミュニケーションを妨げるデメリットではなく、表現の豊かさを広げるメリットであるという実感を、少なからぬ人々が共有しているからである。諸言語が混在する現状を超えて、多様性と交流性が並び立つ将来の言語世界は、多言語的かつ高度に翻訳対応的になるに違いない。

日本語は、世界的に評価の高い文学作品だけでなく、人文社会系の分野でも豊かな「作品」を持ちながら、グローバルな英語化の波に曝され、とくに学術用語としては絶望的であるかのごとき扱いを、各方面で受けつつある。将来的な多言語世界で、日本語も重要な学術用語の一つとしての地位を確保するためには、一方では貴重な言語遺産を核心に保ちつつ、他方では、翻訳に適合的なインターフェイスとしての文体・書式を作るという、両面作戦を展開する必要がある。ここでは後者の課題に重点を置き、先行例を検討しつつ、ここ数年で急速に発展している機械翻訳の活用を含む、いくつかの戦略を考える。最後に、機械翻訳に人文系の対訳データ資料を提供するための、具体的な作業を提案する。

Whereas English is becoming the international language of the contemporary world, counter efforts to secure the diversity of languages can be observed here and there. Not a few people share the intuition that a monolingual world must be fragile just as a monotonous life world is so ecologically; likely the feeling that the diversity of languages is not a demerit which hinders communication, but a merit which amplifies the fertility of expressions. Beyond a world of crowded languages, the forthcoming world must be multilingual and highly translation coping, where diversity and interchange of languages coexist.

The Japanese language has produced not only highly esteemed literary works but also rich 'works' in humanities and social sciences. But it has been exposed to the globalization of English and so often disqualified as academic language. Supposing a multilingual world in the future, however, the Japanese language can occupy a significant status in academism. For this sake, we need operations on two fronts: one is to preserve a unique heritage language in the center, the other is to innovate interfacing styles and formats of Japanese which shall be translation coping. Here I focus on the latter front and consider some operations, including the utilization of machine translation which has made rapid developments recently, with reference to precedent examples. Finally, I propose a concrete procedure to provide sentence-by-sentence translated data to machine translation projects.

キーワード：翻訳、多言語世界、日本語表記、和英混交文、機械翻訳

Keywords: Translation, Multilingual World, Notation of Japanese, Japanese-English Mixed Style, Machine Translation

1. 使用言語をめぐるポリティックス

日本語は、近現代世界の主流言語とのあいだで、「言葉の壁」があまりに高いため、明治以来、さまざまな嘆きが語られてきた。文化的、言語的な敗北感の極致では、日本語を捨てて、国際語を国語に、といった投げやりな主張も、唱えられた。

エスペラントにも関心を寄せる田中克彦は、柳田国男が1920年代、ジュネーブでの国際連盟委任統治委員会に、日本代表として出席したおり、英語やフランス語を自由に話せず、悔しい思いをした、というエピソードをあげている。そのような特定言語の支配に対する不公平感、国際語の理想主義の高まりから、エスペラント運動が世界でも日本でも、最も盛んになっていたのが、第一次世界大戦から国際連盟にかけての時代であり、柳田もエスペラントの勉強をはじめたほどだったという（鈴木、田中、2008）。

そのエスペラントを公用語とする論は、ほとんど話題にならなかったのに対して、時代をさかのぼる明治の森有礼の英語公用語化論、とくに第二次世界大戦直後の志賀直哉のフランス語公用語化論は有名である。志賀は「国語問題」（1946）において、「此際、日本は思ひ切つて世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとつて、その儘、国語に採用してはどうか……フランスは文化の進んだ国であり、小説を読んで見ても何か日本人と通ずるものがあると思はれるし、フランスの詩には和歌俳句等の境地と共通するものがあると云はれてゐるし、文人達によつて或る時、整理された言葉だともいふし、さういふ意味で、フランス語が一番よささうな気がする」と述べた（志賀、1974）。

「小説の神様」と呼ばれた志賀の、60歳代でのこのナイーブな言語観について、田中克彦は「母語への絶望というよりも……日本語ではやれないことがフランス語ではやれるかもしれないという、未知の、あるいは十分には知らない言語への期待……要求の大きさに胸を突かれる」と述べている（田中、1989）。国際語と距離の大きい日本語母語話者の私たちの多くは、柳田の悔しさ、志賀の無力感、田中の驚きに、多少とも共感できるし、日本語の将来に責任を持つ者たちの大小の危機感も、随所で見聞きするところである。

本稿は、「日本語」の専門家ではなく、「言語学」の専門家ですらない筆者が、機械翻訳も射程に入れて、日本語の将来のさまざまな論点に触れ、ランダムな問題提起をする研究ノートである。非専門家として、敢えて言えば分野横断的であることを目指して、専門家の気づきにくいところを浮き彫りにするのが目的である。さまざまな問題点を提起するだけで、解決する段階には至っておらず、当然ながら、専門的な正確さは主張していない。本稿がきっかけとなり、専門家を巻き込んださまざまな議論が起これば、研究ノートとしての目的は果たしたことになる¹。

（1）非対称は政治的に不公正

「理想的な国際語」は、すべての使用者にとって「等距離」のものでなければならないが、現実には、国際的に活躍するには英語が必要という「非対称な関係」を直視しなければならない、といわれるような「理想と現実」がある。英語から遠い言語の話者は、それぞれの距離に応じて、非対称な負担を強いられており、これを政治的に公正なものにする課題を、共有している。

非対称の最も極端なケースは、絶滅の危機に瀕した言語である。一例として、シベリアのチュルイム語の報告をみると、調査者が、流暢なチュルイム語話者に「話者だと明かさずにいた理由」を尋ねると、「不名誉なものと思う意識を植えつけられてきた」「先祖の言葉が失われるとは思ひもしなかった」と答えたという（ハリソン、2013）。国内の標準語と方言のあいだに働く力学も、度合いは異なっても、さまざまな優越言語と劣勢言語のあいだに働く力学と同じ言語政治の問題である（原、2013）。

生物多様性の観点から、絶滅危惧種の保存が唱えられるように、文化多元主義の観点からは、少数派言語を保護し、絶滅危惧言語を保存する必要があると訴えられている。それぞれの言語文化を守ることは、

¹ 本稿は、JSPS 科研費、挑戦的研究（萌芽）「『日本語文化』の保存・刷新・発信のための分野横断的・統合的な理論構築」（課題番号：17K18610、代表者：津城寛文、H29～H31年度）の成果の一部である。

政治的ナショナリズムとは区別され、また文化ナショナリズムとも一線を画する、人類文化全体の豊かさのための多言語主義の営みである。人類の未来が、互いの命を消尽し合う戦場や、時間や労力を収奪する工場ではなく、共に学び合う学校だとすれば、このような多様性は、デメリットではなく、むしろ教材の豊かさになる。

(2) 非対称を価値転換する

「保存」という発想には、そのままでは衰弱・衰退して消滅する、という含意がある。日本語は、衰弱・衰退しているかということ、まだ生き活きとしている。その生命力は、日本語で考え、日本語で書かれた文学が、諸言語に自発的に翻訳されて、それらの言語の話者にも感動を与えていることから明らかである。使用者人口からしても、日本語が消滅し去ってしまうことはないので、危惧は、二流の言語になり下がる、ということになる。

この危惧に対応して、「母語は掛け替えのないもの」という以上の期待が、危惧を語る同じ論者によって語られる。それは、カナ、かなといった「＜自分たちの言葉＞の文字をもっている」こと、「西洋の衝撃」に直面した非西洋圏のなかで、「日本近代文学の奇跡」と言われる偉業を成し遂げたことなど、日本語の文化的価値を知れば、このような「高みに達した言葉」が読み書きされなくなれば「人類の文化そのものが貧しくなる」のではないか、「そのような日本語であり続ける運命を……選び直す」のが、日本語に対する、さらには人類の未来に対する義務ではないか、というものである（水村、2008）。

この危惧と期待は正しいが、一つ不足しているのは、国際語が交替する、という歴史的通則を強調していないことである。英・米の旧植民地は、現在、英語という国際語を駆使できるメリットを享受しているが、独・仏や、スペイン・ポルトガル、また日本の旧植民地や、ロシアや中国の支配地域は、不運なことに、そうっていない。英語がいつまで国際語であり続けるかどうか、保証はない。このように、国際語が交替するのに対して、母語はかけがえのないもの、と理解できれば、母語保存はただの懐古的な趣味ではなくなる。

いずれにしても、非対称な劣位に置かれた母語側には、二重三重の錯綜が課される。そしてここから、受け取り方は2つに分かれる。一方で、こうした錯綜した状況は、ローカルな母語話者に労苦を強いるデメリットの裏に、それが精神の一層の深化につながるメリットが強調される。たとえば、荻生徂徠や福沢諭吉が「マイナス点をプラスに転化する」「困難を逆手にとって……有利な点がある」「自覚さえあれば……深く知りうる」と主張したように、である。他方、間欠的に起こる、国際語公用語論があり、これには一定レベル以上の知識人が国際語で勝負しやすいというメリットと、国民・市民が知識人層とそうでない層とに分離し、また言語遺産が衰退するデメリットが懸念されている。たとえば、森有礼が英語を国語にと主張したのに対して、反対者が「インドの例」を引き合いに出して、一般大衆とエリートの言葉が二つに分離すると反駁したように、である（丸山、加藤、1998）。

多言語状況を活用しようとする前者の立場は、「どのようにして」保存、刷新、発信するか、という工夫を考えているが、今のところ、後者の英語第二公用語化と置き代わるほどの名案は、クリアに出していない。一例として、早くから日本語の刷新と発信について論じてきた鈴木孝夫は、「国際化への道筋」つまり、日本語を国際語に接続する道筋として、じっさいに見られる第一の「征服型または植民地型」と、第二の「自己植民地型つまり自己改革型」に加え、「第三の道」として、将来的な「汎世界型つまり世界相互依存型」を区別した。日本が第二の道を進んだ理由として、西洋語が日本にとっての「威信 prestige」であり、その幻影に対する憧れという「蜃気楼 mirage 効果」があった、と述べて、これを第三の道へと切り替える必要がある、というのが、鈴木の一貫した主張である。言われていること自体は新しくないとはいえ、「蜃気楼」とは「幻影 illusion」の一種であり、フランス語から英語に入った prestige はもともと「幻影」を意味するなど、西洋語の知識を用いた洒落た表現になっている。

現代日本でも、「第二の道」を追い求める人びとは、英語公用化論者を中心として、少なくない。もしこれが望ましいとすれば、近代日本が植民地化を免れるために、産業を振興し軍備を整え、植民

地主義まで学び、言語的には母語を確保し、苦心して主要文献をすべて日本語訳し、母語での高等教育を可能にした歴史は、皮肉なミステイク、われわれ日本語母語話者にとっては、悲しい喜劇になる。

鈴木という「第三の道」は、必要性が自覚されて久しい、しかしながらいつまでも解決されない課題である。そのための鈴木の提案は、整理すれば大小3つほどになる。一つめは、人文社会科学が、自然科学のように国際的な貢献をするために、「日本語で書かれている優れた業績」の翻訳・発信を支援すること、二つめは、「国連の公用語に日本語を入れる」こと、三つめは、日本人がとにかく英語を使い出すこと、ただし日本人に使いやすく「日本語化」したリング・フランカ的な新しい人工言語「イングリック Englic」で、優越言語と「一種の言語戦争に入ること」である（鈴木、2011、2015）。

2. 日本語の変容——クレオール化、和漢混交文、和英混交文

鈴木の提案のうち、三つめは、いわば日本版クレオールの提案であり、「クレオール化 creolization」としてまとめれば、孤立した思想ではない。

(1) クレオール化

クレオール語と日本語との関係を集中的に論じている一人、田中克彦の教科書的な整理によれば、「クレオール Creole」という言葉は、ポルトガル語「クリオウロ crioulo」に出自があり、「その土地生まれの」人や物を指した。語源を遡ると、ラテン語の祖型「creo」に至る。「クレオール学の祖」フーゴ・シューハルト（Hugo Schuchardt）は、「俗ラテン語」段階のラテン語の研究から出発し、そうしてできたロマンス諸語から、さらに「新しいロマンス語、つまりクレオール語が生まれてきた」と捉えた。言語が崩れ、新しく作り変えられるプロセスは、「切れ目のつけられない、濃淡さまざまな移行状態」であり、クレオール語の前段階には、つねに道具としての「ピジン pidgin 語」がある。「ピジン語しか話さない親をもったこども」は、「それを受けとり、自分のなっとくが行くように構造化」して、クレオールと呼ばれる「母語」の話者となる。このように、「すべてのことばは、まじりあうことによって変化し、発展してきた」と捉えれば、ロマンス諸語や英語が、「歴史の上で、強いクレオール化を経験した……単純化された言語」であるとわかる。しかし、この「単純化」ということを、欧米のクレオール研究者たちは、「貧弱にする」というニュアンスで、reduce とかりダクション reduction と表現する。「西洋語人がクレオール語を、かれらの母語と対等の言語としてみることはなかった」のである（ショダンソン、2000）。

ところが、もし「日本人がクレオール語をみれば、そこに自らの母語、日本語のすがたを、別の形で再発見する」というのが、田中の主張である。日本「なまり」とか、「日本式」英語とか、揶揄的・自嘲的に言われている事態を、「なまることがささやかながら世界の思想と人類の文化に貢献」すると考えることが、「クレオール学から私たちが学ぶべき最も大切な点」と捉え直される。クレオール語は英語やフランス語を単純化したものだから、日本語も英語を取り込んで独自に単純化してよい、日本語そのものも単純化してよいという、単純化の志向が明らかである（田中、1999）。

まとまったハーン研究を持つ平川祐弘も、ハーンの体験を「今日的にいいなおせば、グローバリゼーションと表裏をなすクレオリゼーション creolization の問題」と捉えている。

世界文学史のあちこちに、「母国語優位を主張する説……ナショナル・ポエティックス」が見られる。敢えて「優位」が主張されない場合でも、母国語で書くべきという主張はなされる。知的な内容なら別種の言語で操作できても、「詩」のような「心の底からの感情の叫び」は、母語でなければ表現できないからであり、この「心の声」は、ナショナリズムと結びつきやすい。

こう一般論を述べたあと、平川は「その母語すらも維持できなくなるほど外部からグローバリゼーションの圧力がかかってくる時はどうすればよいのか」と問いかけ、「非主流のマイノリティ」側にとって「混交は不可避」、つまり広義のクレオール化は不可避と自答している。では、クレオール化は不幸なだけなのかというと、苦しみにはつねに償いがあるように、「クレオール性礼賛 eloge de la creolite」という価値転換が起こる。旧植民地で、かつての宗主国の言語という「負の遺産」が、「支

配の旧悪」を弾劾するための言語となり、また自己表現をするための言語に転換した。「人間存在は多様性と異質性の中に花さく」という宣言は、クレオール化の価値を高らかに主張したものとされる(平川、2013)。

世界の中の日本語の立ち位置を考えた平川、鈴木、田中は、さまざまな違いはありながら、英語との「混交」による「クレオール化」ということでは一致している。本稿も、はるか遠くに「多言語世界」を見据えてはいるが、多言語との対応をいっき目指すのは困難なので、まず第一歩として、国際語である英語を橋渡し言語 vehicle language、あるいは、いわばハブ言語 hub language として戦略的に利用し、そののち、多言語世界への接続を考えたい。

(2) 和漢混交文と和英混交文

「広義のクレオール化」の課題が、現代特有のものではないことは、漢字文化との遭遇による、カナ、かなの創出、「和漢混交文」の成立から明らかである(築島、1977)。カナ・かなで表記される古来の大和言葉と、外来の漢字から成り立っている和漢混交文は、現代日本人がふつうに使う日本語であり、ほとんど意識されないが、注意を促されれば、その混交に気づくことができる。ひらがなやカタカナや和漢混交文の発想は、想像されるとおり、日本のオリジナルというのではなく、中国や、とくに朝鮮の影響がある。宣命小書体、文字の大小といった表記は、日本列島における使用に先立ち、古代朝鮮における漢籍や仏典の「注釈・音義」「訓注形式」に、「漢字に、その字義に対する朝鮮固有語をあてる用法」があり、それを渡来人が持ち込んだものである(沖森、2003。船山、2013)。現在のわれわれが直面しているのも、同様の課題である。日本語のさらなる中・長期的な保存のための装置、工夫として、和漢混交文に相当するものを見ると、とりあえずは「和英混交文」となるだろう。

和英混交文ということ、私が考え始めたのは、高校の英語の授業で聞いた、教師の「hero が heroine を lagoon で shark から rescue した」という一言である。“The hero rescued the heroine from the shark in the lagoon.”と言われると英語だが、「てにをは」と「する動詞」その他で、外国語単語をつなげると、日本語として、コード・スイッチングなしに理解できる。このように、私はかなり前から、和英混交文ということを考えていたが、このキーワードのオリジナルはどこにあるだろうか。

『岩波講座日本語』の「和漢混濁文」論文をみると、「漢文訓読」は、「外国語の文章を解説しようとして、受動的に日本語によって読み下した、消極的な翻訳の手法」であり、他方「和文」は、「積極的に自らの日本語の文章を生産していく態度に立った時の一つの文体」であり、それらが合流して、「和漢混濁文」が成立した」と跡づけたあと、その延長線上で、「翻訳口調」「翻訳臭のある文」「直訳の文」と呼ばれるものを、「和洋混濁文」「和漢洋混濁文」と言えないか、と述べている。しかしその「概念が確立していない」ので、自らそう名乗る文体は目に付かないという(山田、1977)。ここでは、「翻訳口調」や「直訳の文」を「和洋混濁文」と呼ぼうとしているが、日本文にアルファベットやカナ書きの単語が積極的に入るわけではないので、私の考えている和英混交文とは異なっている。

漢字二字による翻訳語の「カセット効果」説で有名な柳父章は、和英混交文とは言っていないものの、その寸前まで来ている箇所がある。「□□な□□が□□□□で□□……」という文体の、□□の部分には、「カタカナの外来語でも、漢字の翻訳語でも、アルファベットの言葉でも」、きわめて簡単に入れることができる、この「便利な外国語受け入れ構造」は、「日本人が千数百年かけて創り上げてきた……日本文化最大の発明」だと述べている(柳父、1998)。

最近では、英語学習法を工夫している池田和弘が、「実戦の場面で本当に役に立つのは英語構文の知識よりむしろ単語の知識」であり、「単語であればただ並べていくだけで」意味が通じると述べている(池田、1992)。ポイントは、英語学習において、日本語の中に英単語を入れて覚える、ということであり、これをエッセイで「和英混交文」の主張につなげている²。

² 池田和弘オフィシャルブログ「筑波大学 ICR・国際日本研究専攻共催特別シンポジウムに出席」<http://kazuhirokeda.com/blog> 2017年4月22日最終確認。

では、日本語と英語は、どのように混ざるのだろうか。単純に「個別単語がX語からY語へと入っていく……借用語」は広く見られるが、言語接触の現場からは、もっと絡み合った報告もある。「日本語が話せるアメリカ人」と「英語が話せる日本人」のあいだの、「ジョンさんではでも you must have studied こう、一生懸命だったでしょう？ I studied about 三時間勉強したよ」という会話例では、前半では「コード切り替え」「コード・スイッチング」「コード交換」が起こっており、後半では「同じ情報 (study、勉強) が両方の言語で重複」している。別の例では、「yesterday, meらは松本ドクターとカノに乗ってボービタイの前で fishing をしたけど、nobody caught any スクモメ」のように、「英語と日本語がほとんどそのまま同一文内で入り混じった」だけで、「ピジンに見られる単純化やクレオールに見られる文法体系の再構築」はない (ロング、2013)。

これらが示すように、「混交の度合い」はさまざまあり得る。試行錯誤を繰り返した和漢混交文について、「混交の度合いは……一様ではない」と言われているのと事情は同じであり、さまざまなスタイルや表記が、長い時間をかけて、一定の幅に収斂していくことが想像される。

3. 日本語の表記——ルビ、原語併記

日本語にはさまざまな側面があるが、本稿ではまず「表記」に焦点を絞る。和英混交文その他、あり得る日本文について、翻訳に適合的という観点から見直したとき、未来の日本語を論じている者たちは、表記に関して、どのような提案をしているだろうか。

(1) ルビ

井上ひさしに、ルビを積極的に評価するエッセイがある。^{ルビはそんなとくかをかかんがえる}「振仮名損得勘定」というタイトルの章で、繰り返し批判の対象となるのは、ふりがなを「黒い虫」と呼んだ、山本有三のいわゆる「ふりがな廃止論」である (山本、1939)。この論は、雑誌発表時には総ルビであったが、単行本に収められたとき、主張どおり、ルビはすべて取られた。当時、官民あげてふりがな廃止が目指されたが、力づくでは統制できない需要があり、便利さもあって、廃止しきれなかった。そしてその後の流れは、漢字の緩やかな制限 (当用漢字、同音の漢字による書きかえ、など) に留まり、ふりがな問題はほとんど語られることはなくなった。

これに対する井上ひさしの見方は、「振り仮名がさかんになって行く動きと、一部の人たちのための知識や知的な楽しみが大勢の人びとのものになっていく動きとは完全に見合っている」、つまりエリートの独占する「知的な楽しみ」が、ふりがなによって「大勢の人びと」に開放された、というものである。実際、明治以来の印刷物は、『聖書』の翻訳を含め、総ルビのものが少なくなり、これが庶民の知的レベルの嵩上げに、効果があったとされている。

みづからを「知識人」とは呼ばない井上ひさしは、知識人と大衆という傲慢な二分法を嫌うので、自称知識人が「大衆」と表現するところを、「大勢の人びと」と呼ぶ。その「大勢の人びと」のための、学習の便宜となるふりがなとは別に、作家である井上は、いわば「方法としての振仮名」にも言及している。そこでは、「蹂躪」が「ジュウリン」とも「ふみにじる」とも読めるとき、「どちらの語を書くつもりであったか」、ふりがなで示すことができる。たとえば滝沢馬琴の「振仮名への「執着」」「過剰なまでの振仮名の使用」は、「方法 (manière=マニエール)」的に追及した「振仮名のマニエリズム」として、表記の多重化が、文章の多重化、複雑化につながることも、説き分けられている (井上、1981)。サザンオールスターズの「素敵な夢を叶えましょう」の歌詞について、「表現としての振り仮名」といわれるのもこの例である (今野、2009)。

ふりがな (漢字を「翻訳」する1つの方法にほかならない) を含む翻訳について、論者の知的な背景を見ると、これを消極的に見る考えと、積極的に捉える考えとが、それぞれの立場と相関することが、あらためて浮き彫りになる。アカデミズムの主流を歩み、手引きを必要としない知識人は、これらを大衆のための便宜として許容するか、あるいは恥ずべきものとして拒否する傾向にあるが、主流から外れた者や、一次文献を読む環境にない独学家や、教養を求める「大勢の人びと」は、自他のた

めの次善の手引きとして、これらを重視せざるを得ない。

一例として、「リゴリスティックな研究者」吉川幸次郎が、「翻訳というものは、要するに方便」としたのを受けて、篠田一士は、上田敏批判の中で、「吉川の翻訳観を全面的に支持」し、「注解入り、さらには原文入りの訳詩集や評釈本」が登場してきたのを、当然のことと判断した、という。「上田敏批判」とは、一世を風靡した訳詩集『海潮音』が、直訳とは真逆の、なかば創作のような意識で、西洋への憧れを誘った現象を指している。このエピソードについて川村二郎は、「研究者は知らず、現実的に一般文学読者の場に身を置いて考える時」、注解・原文付きの翻訳は「疑問」であると述べている（川村、1981）。これは一見、一般読者の立場を代弁しているようであるが、私はむしろ、翻訳の情報開示を否定するのは、一般読者から学習の機会を奪うものではないか、とも思う。すべての翻訳作品ではないにせよ、一部の翻訳作品を「注解入り、さらには原文入り」で提供することは、「大勢の人びと」の「知的な楽しみ」の手引きになる。井上ひさしが擁護しているのは、これである。

煩瑣な注解や多重表記の方向とは逆に、日本語のクレオール化を唱える田中克彦は、明治の井上哲次郎や、敗戦直後の志賀直哉らの「深い日本語ベシズム」を共有し、ふりがな廃止より前に、そもそも漢字の制限、廃止を主張する。「日本語が世界の国際舞台では使いものにならない」こと、しかし「そう簡単に日本語をすて」られないことを痛感するゆえに、英語やエスペラントをまるまる採用する、という選択肢はない。そこで候補にあがってきたのが、日本語を「国際舞台」で通用するように変化するという、クレオール化の方向である（田中、1999）。そして日本語をクレオール化していくか工夫は、漢字廃止、ローマ字書きという、表記に関する2つの提案である。

すべての言語が「国際言語マーケットでセリにかけられている」現在、日本語も、内輪の「村ことば」ではなく、「世界に開かれたことば」になることが求められており、「使い勝手」のよい「実用の日本語」が必要である、というのが、漢字を制限する論拠である。これまでも、同様の考えから、一種類の文字だけで日本語を表記する「カナモジ運動」や、「ローマ字運動」があり、もしこれを認めていたら、外国人にとって日本語の壁が低くなったのに、「受け入れられてはいない」、というのが田中の嘆きである（田中、2011）。「すべて」という極論ではなく、「一部」の漢字廃止、ローマ字表記、かな表記を認めようということであれば、この提案は具体化する価値があり、じっさいに、「やさしい日本語」や「文簡易化」その他が試みられてもいる（フィンチ他、2005。庵他、2010）。

（2）原語併記

鈴木孝夫は文体について、二つのことを述べていた。1つは、ジャパニーズ英語の一種である「イングリック Englic (English-like-language)」であり、「リング・フランカの側面が大きくなった」英語を原料に、「私たちの作った新しい人工言語」を使う、という提案である。この日本的にクレオール化した Japanese English の提案が、繰り返し述べられているのに対して、逆の、いわば英語化した日本語 English Japanese、つまり和英混交文の提案も、非自覚的ながら、ところどころに読み取ることができる。

漢字を「中国の発音通り」に「音読」し、「日本単語の発音をあて」て「訓読」する、という二重読みと、「概念そのものは、視覚に訴える「水」という文字で表記」されていることについて、「あまりになれてしまって、その意味を深く考えることをしない」が、「非常に素晴らしいこと」と、鈴木は考える。英語とヨーロッパ古典語との関係を見ると、たとえば、「anthropology (人類学)」の「anthropo-」はギリシア語で「人」を意味するが、このような「高級語彙は一般の人の理解の外」にある。これに対して、日本語で「人類学」とあれば、正確には分からなくても、中学生でも「ひとのたぐい」と理解できるのは、「二通りの読み分けを、ほとんどすべての概念（漢字）に対して行える」からである、と対比される。

その上で、英語をどのようにして、日本語の中で、音読み、訓読みするか、という話になる。ヨーロッパ系の外来語は、現代日本語では、カナ書きされる。たとえば「パイプ」というカタカナ語は、たばこを吸うパイプ、ガス管など、管状のものを指す。元の英語では同一の言葉であり、英語を母語とする人は、そこに共通性を認めることができるが、しかし、普通の日本人にはできない。そこで提

案されるのが、「パイプのことを、綴りも表記も英語そのまま日本語に入れて、pipe と書き、しかもこれをくだ(管)とも読む一種の訓読みの習慣」であり、こうすれば「タバコのパイプとガスのパイプは別々の言葉に分化しないですんだと思う。漢字に対して日本語はまさにこれをやっている」とされる(鈴木、1975)。これはまさに、和漢混交文をモデルにした、和英混交文の提案である。

(3) ルビ、原語併記

漢字に訓読みがあり、時にフリガナが付くことで、煩瑣であっても知的レベルを高める学習上の効果があるのであれば、和英混交文では、そこにさらに英語が混ざることで、さらに煩瑣になるが、それがさらに「日本人の知的生活のレベルを高める働き」をする可能性がある。その基盤は、和文であり、ところどころ漢字に加え、カナ書きやローマ字の原語を入れ込む、振り付ける、あるいは貼り付けることで、字面は錯綜するが、意味はわかりやすくなる。

カナダ出身のジャーナリストで、日本に帰化したベンジャミン・フルフォードは、実験的な著書で、「英語(あるいは他の外国語)混じりの4重表記」を試みている。「4重表記」とは、「ひらがな、カタカナ、漢字」の「3重表記」プラス英語(他)のことで、「いわば日本語表記の未来形」とされている。実はこれは、フルフォード個人の仕掛けというより、Kobunsha Paperbacks(光文社ペーパーバックス)の方針である。表記の一例は、「匿名預金 とくめいよきん anonymous account」というように漢字にルビが付くだけでなく、「社会主義国家と変わらぬ統制経済 コントロールド エコノミー controlled economy」というふうに英語にルビ(発音のカナ書き)が付いているところもある(フルフォード、2004)。この奇妙なスタイルの叢書は、和英混交文の実例であり、同様の著書がいくつか出版されている(フルフォード、2002、2003)。

類似の別のシリーズとして、講談社 Kodansha Ruby Books があり、これは英単語のところどころに和訳をルビのように付けることで、「日本語と英訳の対照本よりは相当見やすい」「もっと普及しても良い形式だと思う」という読者レビューがあるとおおり、対訳より手間が少ない³。

ほかにもさまざまな可能性があるが、「日本語は捨てられない」のであれば、膠着語としての性格は変わらず、「てにをは」と「する」でつながる単語に外国語(とりあえずは英語中心)が混ざる「和英混交文」以外の方向はあり得ない。様々な度合いの和英混交文から、「ジャパニーズ英語」への移行は、連続的であり、英語に、そして英語を介して多言語にも、容易に変換されるので、日本語ベースの発信型の文体となる可能性がある。

4. 表記と内容の組み合わせ

鈴木らは漢字について、「欧米の言語学が見落とした漢字の隠れた働き」は、「文字のもつ視覚的刺激」である、と指摘した。日本語が「非効率」だという批判に対しては、「日本が立派に発達した……事実」を対置して、「漢字仮名混じりの表記法を採っている日本語の全体としての効率が極めて高い」、とくに、訓読みは「外国語の手引き」であり、「日本人の知的生活のレベルを高める働きをして……日本語を救った」と述べていた(鈴木、2014)。

ここで注目したいのは、一般人の知的レベルを嵩上げするために、表記のための文字をいくつも混ぜて、あえて複雑にするという、「複雑化」が示唆されていることである。カナモジ運動や、ローマ字運動、エスペラント運動が広がらないのは、どれも原理主義的に一元的な「単純化」だからである。表記も語彙も多元的なほうが、それぞれを支持する人が足し算されて、広がるにちがいない。

(1) 表記の単純化／複雑化、内容の平易化／晦渋化

一元的な単純化を説く田中と、多元的な複雑化を説く鈴木が対論したら、どうなるだろうか。興味深いことに、ローマ字表記の「部分的」な導入ということが、落とし所の1つとなった。鈴木が「言語財を輸出」する希望を述べたのに対して、田中は、外国人に対しては「ローマ字日本語を第二の日

³ Amazonの『そして誰もいなくなった』[英語版ルビ訳付] 講談社ルビー・ブックス(英語) 新書(1999/4/28)のレビュー。2018年10月15日確認。アドレスは長すぎるため省く。

本語として認める」のがよい、ちょうど中国の製品が「全部ピンインと漢字の両方で」書かれているように、「バイリンガルというよりもバイリテラル」がいい、「漢字をやめて日本語そのもの」を、「ローマ字でも何でもいから日本語」を、と提案した。これを受けて鈴木は、「今まであまり考えなかった」が、「英語を第二公用語にするより、はるかに現実性のある良い考えだ」と応じた（鈴木、田中、2008）。これは、日本語を外国人に広める課題について、「単純化」で合意したものである。

こうした鈴木と田中のさまざまな提案を持ち寄って、さらに日本人にとっての戦力となる日本語、ということを見ると、日本文に、ローマ字、アルファベット（その他の文字）も、随所で併記したり、ルビヤ注で付けたりする、「複雑化」の方向もあり得るのではないだろうか。

「複雑化」を最も単純に考えると、複数の言語を混ぜるのではなく、それぞれ分離して並べるだけの、多言語表示である。聖書や仏典の和英対訳版、ポリグロット版聖書など、ページを分割して、または見開きのページで対応させる書式もある。これらに共通するのは、権威あるテキストという点で、全文を対訳で提供する価値が認められ、需要もある、ということである。また、現在は官公庁の事業や、行政の発行するパンフレットなど、実用的な文書で、多言語併記の取り組みが進んでいる（藤井、2013）。これは可能性ではなく、すでに現実である。

さらに、ここ数年の傾向として、大学等の事務文書で、一文一文対応の書式が増えてきたのに気付く。1例として、筑波大学・国際日本研究専攻のホームページは、トップページ（HOME）の冒頭がつぎのようになっており、日本語と英語を、同時に一覧できる⁴。こうした一文一文対応の書式のメリットは、大きな視線の移動がないことである。

こちらのホームページでは筑波大学大学院・人文社会科学研究科・国際日本研究専攻の講義のカリキュラム、教員紹介、入試情報などの情報提供をしております。

Find information about the Master's and Doctoral Program in International and Advanced Japanese Studies in the Graduate School of Humanities and Social Sciences at the University of Tsukuba.

（2）日本文の4つのタイプ

あらゆる言語が翻訳されるものであることを前提として、翻訳しやすさを念頭に、将来的な多言語世界における日本語の文体・書式のあり方を展望しよう。ここでは「表記」を軸とする視点から、単純化したモデル化を目指しているので、方法論上、その他のさまざまな論点は捨象することを断っておく。

表記について「単純 simple」と「複雑 complex」を対比したのに加え、さらに内容を考慮に入れて、「明快 clear」と「晦渋 obscure」を対比してみよう。この表記と内容の2つのパラメータを交差させると、つぎのような日本語の4タイプが出現し、それぞれの論者の立ち位置が、わかりやすくなる。

漢字については、周知のように、その視覚的な価値を見直す動きがある。ソシユール由来の「聴覚映像」というタームをみるたびに、私も「漢字は視覚映像ではないのか？」と違和感を持った。「音声言語」が直接的で、「文字言語」は副次的な形式にすぎないとする、ソシユールが強調した言語観が、それ以後の記号学一般では変貌し、「絵画や映画・演劇までも表現としての言語」とみなされ、「漢字も……文字映像として新しく位置づけられようとしている」のである（白川、1978）。漢字はこうして、言語史の最後尾から最先端に、移されようとしているのだが、これを4タイプの中で考えると、適切な漢字を混ぜることで、表記はある程度「複雑」化するが、意味内容としてはわかりやすくなり、む

表－1 日本語の4タイプ

内容 content \ 表記 notation	単純 simple	複雑 complex
明快 clear	(A) 単純・明快	(B) 複雑・明快
晦渋 obscure	(C) 単純・晦渋	(D) 複雑・晦渋

⁴ <http://japan.tsukuba.ac.jp/> 2018年6月30日最終確認。

しろ「明快」になる。和漢混交文はこれであり、英語を積極的に混ぜる和英混交文も、一文一文対応の表記も同様であり、これらはすべて (B) 型になる。

「カセット効果」とは、西洋文化を受け入れる際、要所に「意味の凝縮したような難しそうな」、漢字2字の単語を用いたことを指しており、近代日本の翻訳の特徴をよく表現している。「カセット効果と意味は……反比例の関係」で、「意味が通じにくい言葉」が「カセット効果は強い」と定義されるように、表記については、字数が少ないという意味で「単純」化であり、意味理解については、「難しそうな」という意味で「晦渋」化、つまり (C) 型である (柳父、1998)。

近代日本哲学の一つの試みとして、「日本語による哲学」「日本語で哲学する」という一縷の流れがある。共通するのは、キーワードが、西洋語の翻訳ではない、オリジナルの日本語である、ということだが、その「日本語」には、いくつかのレベルがある。

前近代の国学の核心でもあったこの問題が、近代になってあらためて自覚されたのは、和辻哲郎の論文「日本語と哲学の問題」(1929初出、1935改定)においてであり、「日本語をもって思索する哲学者よ、生れいでよ」という結びの一節が、しばしば引用される。内容は、日本語で書かれた「文芸」や「歴史書」が豊かなのに対して、「学問的思想」は乏しいこと、思想が「漢語漢文」によって展開され、近代になって「日本語化した漢語の新しい組み合わせによって……ヨーロッパの学問の伝統をそのまま受け入れ得る……新しい日本語を作り出した」ため、「学問語と日常語及び文芸語との間には常にある距り」があること、などが跡づけられ、後半で、「あるということはどういうことであるか」なる文をめぐる、大和言葉の基本語が延々と論じられている (和辻、1962。飯島、2015)。

このうち、「日常語」を強調すると、「日常の日本語を一応ベースにして、術語や専門語をできるだけ使わないで」という立場が出てくる。「現代」の「日常」の日本語という意味であり、表記は「単純」さ、内容は「明快」さを目指す、(A) 型になる (中村、1985)。

「日本語で哲学する」から「大和言葉で哲学する」となると、キーワードが大和言葉になる (竹内、2012、2015)。この立場を極端に推し進めると、それは和漢混交文以前の、和文になる。表記は「単純」化されるが、非日常的な古語に、聞きなれない意味内容が盛り込まれ、漢字2字の近代翻訳語と同じような「カセット効果」を持つことになる。現代人には、かえってわかりにくい文体であり、(C) 型になる。

「単純」かつ「明快」な (A) 型の日本語は、もっぱら「ローマ字会」や「カナモジカイ」によって主張された。どちらの団体も現存しているが、勢力としては極小である。千年以上も続いた和漢混交文によって、漢字は日本語の血肉になっているからである。しかし、初期条件を踏まえたうえで、漸進的に刷新することは可能で、方針としては、漢字は全廃止ではなく、できるだけ減らしていくこと、通用する簡易な漢字に置き換えることが考えられている。外国人向けの日本語は、このタイプの成功例になるだろう。「在住外国人と地域住民とのコミュニケーション」を円滑にするための「やさしい日本語」の提案も、この A 型の典型的な試みである (庵他、2010)。

では、残った (D) のタイプは、どのような日本語だろうか。これまで引用した例で言えば、井上ひさしの言う「振仮名のマニエリズム」などが、これに当たる。ほかに適切な例を探すと、「編集」を自覚的な方法として、多彩な分野を横断している松岡正剛などが、表記に関しては「複雑」化、内容に関しても「晦渋」化を追求しており、この典型である。

松岡は、現代フランス思想が「インターテクスチュアリティ」(相互テキスト連関性) ということ提唱したのを受けて、この「さまざまなテキスト」がつながりあっていること、「どんなテキストもそれ自体が歴史的な「インターテキスト」であることから、それをさらに進めて、「インタースコア」という言葉を造語し、「相互記譜」と訳した。現代社会の「情報化」「編集化」は、あらゆるものを「スコアリング」し、それらが「カサネ・アワセをおこしている」、その全体集合が「インタースコア」である。松岡の「方法」はこのような「インタースコア」であり、対象は「日本」である (松岡、2009)。松岡が「インタースコア」という造語で目指しているのは、定義からして表記の「複雑」化であり、内容的にも「晦渋」化の側面がないとは言えない。鈴木や田中が、ヨーロッパ語について、それらが外国人に与える威信 prestige や蜃気楼 mirage 効果を語ったように、複雑化し晦渋化した日

本語は、外国語を母語とする知識層には、魔術的な効果を放ち得る。

ただし、難しい内容を精密に語ろうとすることと、晦渋化することとは、紙一重である。しかもそれは、著者の能力や嗜好だけでなく、読者の理解力によるところが大きい。日本語をキーワードにした哲学を試みる坂部恵は、「ふるまい、ふり、まい、せぬひま」という「四つの構成契機ないし成層」からなる系列を主軸とする、「増補されていくタブローあるいはチャート」を作成し、「ふるまい」には praxis、「ふり」には mimēis、「まい」には harmonia, rhythmos とギリシア語を対応させ、その周辺に、やまとことば（まねび、ならい、ひとがら、心ばせ、など）を、「日常の言語意識に即して」配置し、それを多くの漢語やそれぞれに対応するギリシア語に関連づけている。さらに、「ふるまい、ふり、まい、せぬひま」は、「はなし、かたり、うた、しじま」、「おもて（ひと・うつしみ）、うつり（よそおい）、ひびき、あわい・ふれ」に展開されている（坂部、1997）。多言語を駆使した議論は、私の乏しい能力ではすべてを明快には理解できないが、少なくとも、「晦渋」化という印象は受けない。これが (B) 型であるか (D) 型であるかは、一義的には決まらず、書き手と読み手の組み合わせに依存する。

4つのタイプの日本語から考えると、「わかりやすくする」という目的を、外国人向けと、日本人向けに、分ける必要があることが、浮き彫りになってくる。ひらがな（カタカナ）文やローマ字文の日本語を許容する、という方向は、外国人向けに壁を低くする、「単純」化・「明快＝平易」化である（(A) 型）。他方、ルビや、原語併記、大和言葉による単語の読み下しなど、表記を複雑にすることにより、むしろ理解がしやすくなる方向は、知的向上心を持つ日本人向けの、「複雑」化・「明快」化である（(B) 型）。日本語母語話者にとっての、教育的な和英混交文が目指すところは、とりあえず、この後者の方向になるだろう。どちらも、一方は日常生活用の日本語という意味で、他方は多数の言語に接続しようとする日本語という意味で、翻訳に適合的である。

クレオール研究が浮き彫りにしたように、言語はすべて、先行する複数言語が混ざったもので、原理的に「混成言語」である。その言語の表記や語彙を、一義的に「単純」化しようとするのは、民族浄化に類する、言語的クレンジングになる。ローマ字会やカナモジカイの挫折、また人工的な世界共通語である 에스ペラントの停滞が示しているように、過度な「単純」化への志向は、「確かさへの逃避」と表現される原理主義的なメンタリティーであり、現実にある曖昧さ、複雑さ、多元性、多重性、多義性を嫌うという意味で共通し、したがって狭く自閉している（フート、2002）。

民族浄化よりは、多民族共生、異文化共存、文化多元主義が望ましいし、現実もそうになっているとすれば、言語的にも、単純化ではなく、複雑化が望ましいし、今のところそうになっている。われわれに必要なのは、その現実の複雑さ、多重性を、理論的・実用的に洗練することである。

そのような多重・多様な表記や語彙の中では、統一化を強要する原理主義的な立場を除いて、多くの表記・語彙が、和歌や警句などの単純・晦渋な (C) 型、文体を彫琢した複雑・晦渋な (D) 型も含めて、安住することができる。日本語の一つの頂点である大和言葉は、一つの特異な表記・語彙として、死語ではなく、生きた化石として、息づくことができる。

（3）大和言葉のエッセンスの保存

複雑化し、多重化した日本語は、和英混交文を推進する一方、大和言葉も保存することができるが、ただしそれは、英語や現代文のような、実用的な道具としてではなく、書道や美術や音楽などと同様、また道徳や家庭科と同じように、広い意味での教養として保存することになるだろう。教養の必要を感じないのは、教養のない人だけである。私見では、英語その他を混交した和英混交文では、発音はクレオール化、つまり日本的に単純化し、一部の文書の表記や語彙は、多様な日本語を保存して多重化、複雑化することで、威信 prestige が高まり、魔術的魅力を増すことになる。

渡部昇一は、専門の中英語や古英語との比較から、日本語と英語とのあいだに、つぎのような平行現象を指摘する。典型的な和漢混交文である『太平記』は現代人が読んでもどうにか「意味が通る」が、純粹和文の『源氏物語』となると「なかなか意味が頭にはいかない」のは、英文学において、現代英語に直結する『カンタベリ物語』は「比較的わかりやすい」が、古英語の『ベオウルフ Beowulf』が「きわめて難しい」と同様である。これらは、「語彙における外来語の問題」であり、現代日本語も

現代英語も、「語彙の中に数十パーセントの外来語を含む」ため、古語との隔たりが大きいのである。

古日本語や古英語の特徴として、基礎語彙から派生語が根を張って増える、という現象がある。こういう「根の張り方」は、現代の日本語や英語ではまったく失われて、増殖力はなくなっている。「心の中に根を張って、そこから生えてきた」増殖力のある言葉を、渡部は「言霊がある言葉」と呼んでいる。言霊の力を最大限に発揮しているのが、大和言葉による和歌であり、日本語の宝とされる。

『源氏物語』の和文は理解しにくく、和歌によって大和言葉を維持する、と述べているのは、一貫性がないようだが、注目に値する。源氏物語は長い小説であり、ハイライトシーンをつなぐ地の文が、延々と続いている。「言霊」を学ぶには、文芸のエッセンスである詩歌に集中すればよい、日本語についていえば、大和言葉の和歌に焦点を当てればよい、という立場であり、私もまったく同感である(渡部、1974)。

和歌が漢語を避けるのは、伝統的な姿勢である。「気」「地」といった、もう漢語か和語か区別がつかないほどになった言葉以外の漢語が入ると、古典的な和歌の響きは害われる。「釈教歌」などですら、歌そのものに漢語が入るのは少数派で⁵、たとえばつぎのように、詞書には漢訳の仏教語を使いつつ、和歌は大和言葉だけで詠まれるものがほとんどである(次田校訂、1944)。

葉草喩品の心を詠ませ給うける
さまざまに 千千の草木の 程はあれど 一つ雨にぞ めぐみそめぬる
崇徳院御製

詩人のエリオット (T. S. Eliot) も、「人々の最も深い感情の最も意識的な表現が、詩以外の芸術や他国語の詩によりも、母国語の詩にある」と言っているとおり(エリオット、1971)、母語の詩によって太古以来の「情緒」の流れに参加することは、民族的・国民的な「感情教育」になるのであり、日本語話者にとって、大和言葉の和歌は、そのための最適な乗り物となる。

5. 維持コストのビジネス化——多言語併記、機械翻訳

文化とは「面倒なこと」なのであり、高度さの度合いにしたがって、面倒さが学びにもなり、ビジネスにもなる。言語も、コンテンツが魅力的であれば、強制されずとも、その面倒な言語・文化を学習し、実践しようとする人が、自発的に出てくるものである。

(1) 多言語併記のコスト

英語から遠い日本語のような言語圏において、英語と母語を切り離すことがうまくいかないのは、証明済みといってよい。たとえば2005年に設立された国際日本学会が、10年以上たっても広がりを見せていない最大の原因は、趣意書で「つぎの三点を原則」とあるうち、三つめの「学会・研究会の使用言語は英語とする」という限定にあると思われる⁶。発表者や一部の聴衆は優秀なバイリンガルでも、それを見聞きする私のような英語力の低い者には、言葉の壁によってアクセスが制限され、結果として裾野が広がらないのである。

すでに日英(+中国語、韓国語などの)併記は、もともとの多言語社会のように、日常生活のあちこちで見かけられる。出版物においても、この多言語併記の方向を部分的にでも進める試みが、平均的知性を少しずつ知的な multilingual (多言語を話す)、multiliterate (多言語を読み書きする)とするための装置となっている。手間がかかるというデメリットは、多様であるというメリットと不可分である。そのコストは、豊かさ、学びのためのコストであり、学習の日常化 (common learning) のためのコスト、とくに知的中流層の国際語(英語)の習得のためのインフラコストに他ならない。

日本人が英語を運用するための工夫として、「日本の歴史や文化を英語で勉強すること」が有効と

⁵ 漢語(外国語)が入る例として、「何もみな厭はぬ山の草木には阿耨菩提の花ぞ咲くべき」などがある(『玉葉和歌集』巻第十九「釈教歌」)。

⁶ http://www.iajs.net/about_iajs.html 2018年6月16日確認。

いう提案、「英語科」の教材のテーマとして「日本」を使うという提案は、日本を発信する基礎としても有効である。さらに言えば、教科書のキーワードを和・英その他併記にすることで、英文への接続が容易になり、英語への全文翻訳を容易に、かつ正確にし、多少とも日本化した英語 (Japanese English) の運用にも直結する (鈴木、2011、2015)。

また知的出版物 (論文、論説、思想、文学、芸術、政治) と、実用書類では、文体が異なる可能性があるが、どのような文体になるにせよ、現実的な問題は、混交の度合いが収斂していく方向である。技術的に、横書きが有利であることは、わかりやすい。その他の、原語併記、ルビ、カナ訳語などの試行錯誤の整理、そのメリット・デメリットの評価、さらなるオルタナティブの探究など、広範囲に多様な議論が起り、多少ともコストのかかる試行錯誤が繰り返されることで、スタンダードなスタイルに収斂していくことが期待される。

(2) 機械翻訳のコスト

言語のポリティックスの実現が、最も少ないコストで期待される機械翻訳については、英語公用語化のコストを論じた論説でも言及されているように (井上、2002)、現在、国内外、官民の機関で研究・開発が進められ、実用的な翻訳装置がすでに普及しつつある。

私が機械翻訳の現状を調べはじめたのは、ごく最近のことであるが、日本語や言語学を専門とする周囲の同僚の中にも、機械翻訳を研究テーマに加えている者はいなかった。現場での進歩が著しい機械翻訳は、人文社会系の研究対象となるには、開発速度があまりに急速だからであろう。そこで自らこの話題を調べ、開発の最先端の1つである NICT⁷の中の1部門、ASTREC⁸において、研究開発の現状を確認した。

センターの紹介文では、「世界の「言葉の壁」を打ち破り、グローバルで自由な交流の実現を目標として、多言語音声翻訳技術の研究開発と産学官の連携による社会実装を推進」とうたわれている⁹。この総務省主導の機械翻訳プロジェクトは、2017年度後半から「翻訳バンク」を設置し、それぞれの専門分野の「文書」の対訳データを募集しはじめている¹⁰。実用に直結する医療、特許、交通などの分野のデータはすでに蓄積され、法律、経済、金融、薬学、製造業などのデータは進行中だが、実益につながりにくい歴史、地理、哲学、思想などの人文系のデータは未着手である¹¹。われわれはまさに、そのデータ提供に貢献できる。

ただちに使用できるのは、私自らの持つ対訳データである (Casanova, 1994. カサノヴァ, 1997. Muller, 1905. ミュラー, 2003)。また翻訳しやすい拙著・拙論 (津城、1995。津城、2016) を英訳して、対訳データ化することができる。この小規模な作業をきっかけとして、内外の諸大学、諸学会からの、大規模な対訳データの提供を促したい。

その際、機械翻訳を前提として、どのような日本語を書き、どのように話すのが適切か、その作法が、改めて問われてくる。本稿の焦点である、日本語の「表記」の問題は、ここに直結する。学術用の機械翻訳との接続のよい文体・表記は、ルビや原語併記を多用した複雑な表記 ((B) 型の日本語) になるという予想は、すでに述べた。キーワードの適切な理解は、適切な異文化コミュニケーションの条件であり、キーワードが多言語で併記してあれば、誤読の恐れは低くなる。そのような文体・表記が、日本語と英語 (その他) の双方向性の翻訳に対応するものとして、標準化されていくことが期待される。

⁷ National Institute of Information and Communications Technology 情報通信研究機構。

⁸ The Advanced Speech Translation Research and Development Promotion Center 先進的音声翻訳研究開発推進センター。

⁹ <http://astrec.nict.go.jp/index.html> 2017年11月13日確認。

¹⁰ 対訳データを一文一文対応でエクセルに入力したファイルが、求められている。なお、著作権の問題は発生しないことが、同プロジェクトにおいて確認されている。

¹¹ 隅田英一郎 国立研究開発法人情報通信研究機構「AI 翻訳技術のいまと東京五輪への展望」https://www.youtube.com/watch?v=Qh8nhO7N4OE&list=PLBwwDuSrrNU2XO3dkG_13xb3a9xLQJkpU 2018年4月3日の公開講演。2018年4月29日確認。

他方で、機械翻訳のために、文章を簡単に言い換えるという、単純化した表記(A型)の提案もある(フィンチ他、2005)。どちらが効率的か、効果的かは、文書の性格による。おそらく、専門性の強い学術文書では(B)型が、それ以外では(A)型が、相性がいいのではないだろうか。

現在、私は以上の論の延長線上で、機械翻訳を組み込んだ同時通訳会議の実験を、バルセロナ自治大学(Autonomous University of Barcelona, UAB)の同僚たちと、共同で構想しつつある。同大学には、翻訳通訳学部(Faculty of Translation and Interpreting)と東アジア研究プログラム(The East Asian Studies Program)があり、ヨーロッパでも屈指の通訳会議室(Interpreting room)を備えている。国際会議でのディスカッションに後れをとることが多い日本人研究者が、言葉の壁を超えて活躍するための工夫を、ここで試みたい。

機械翻訳の普及には、副産物が予想される。多言語が使用される学術発表、熟慮を要する発話では、慌ただしい同時通訳ではなく、多少のインターバルを取ることが、プレゼンテーションの作法になると考えられる。間合いを取れば、議論は冷静になり、相手の発言をふさぐ非礼も少なくなる。機械翻訳の発展は、言語の闘技場における英語の一人勝ちを是正するので、英語を使用言語と(して強要)する一元的な制度は、とくに英語圏以外では、多言語の混在する多元的制度に取って代わられるだろう。そこでの英語の位置は、ターゲット言語ではなく、インターフェイス言語になる。

言うまでもなく、すべての発話や文書を翻訳するのは不可能であり、もちろんその必要もない。現時点では、英語化の圧力が最も強いところで、まずは英語への翻訳可能性を高め、多言語への翻訳へと拡張し、それによってより良い母語を保存するのが、将来を見据えた日本研究の一つの使命と思われる。ここではわずかな私案を示したにすぎず、そのための方法は多様であってよいのである。

参考文献

- 飯島裕治「和辻哲郎の言語哲学：「日本語で哲学する」ことの前提認識をめぐって」『哲学論文集』51号、2015
- 庵功雄、岩田一成、筒井千絵、森篤嗣、松田真希子「「やさしい日本語」を用いたユニバーサルコミュニケーション実現のための予備的考察」『一橋大学国際教育センター紀要』1、2010
- 池田和弘『旅と遊びの英単語—こうすれば速く覚えられる!』日本実業出版社、1992
- 井上ひさし『私家版 日本語文法』新潮社、1981
- 井上史雄「公用語化の必要経費」中公新書ラクレ編集部+鈴木義里編『論争・英語が公用語になる日』中公新書ラクレ、2002
- エリオット、T・S・『詩の社会的機能』『エリオット全集 3 詩論・詩劇論』中央公論社、1971 [Eliot, T. S., *The Social Function of Poetry*, 1945]
- 沖森卓也『日本語の誕生—古代の文字と表記』吉川弘文館、2003
- カサノヴァ、ホセ、津城寛文訳『近代世界の公共宗教』玉川大学出版部、1997 [Jose Casanova, *Public Religions in the Modern World*, 1994]
- 川村二郎「翻訳の日本語」『日本語の世界15 翻訳の日本語』中央公論社、1981
- 今野真二『振仮名の歴史』集英社、2009
- 坂部恵「〈ふるまい〉の詩学」岩波書店、1997
- 志賀直哉「国語問題」『志賀直哉全集』第7巻、岩波書店、1974
- ショダンソン、ロベール、田中克彦他訳『クレオール語』白水社(文庫クセジュ)、2000 [Robert Chaudenson, *Les Creoles*, 1995]
- 白川静『漢字百話』中公新書、1978
- 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』新潮社、1975
- 鈴木孝夫『あなたは英語で戦えますか—国際英語とは自分英語である』富山房インターナショナル、2011

- 鈴木孝夫『日本の感性が世界を変える一言語生態学的文明論』新潮社、2014
- 鈴木孝夫『鈴木孝夫の曼陀羅の世界—一言語生態学への歷程』富山房インターナショナル、2015
- 鈴木孝夫、田中克彦『【対論】言語学が輝いていた時代』岩波書店、2008
- 竹内整一『やまと言葉で哲学する—「おのずから」と「みずから」のあわいで』春秋社、2012
- 竹内整一『やまと言葉で〈日本〉を思想する』春秋社、2015
- 田中克彦『国家語を超えて』筑摩書房、1989
- 田中克彦『クレオール語と日本語』岩波書店、1999
- 田中克彦『漢字が日本語をほろぼす』角川マーケティング、2011
- 築島裕「日本語の文体」『岩波講座日本語 10 文体』岩波書店、1977
- 次田香澄校訂『玉葉和歌集』岩波文庫、1944
- 津城寛文『日本の深層文化序説』玉川大学出版部、1995
- 津城寛文「日オリジナルの人文社会系キーワード」『国際日本研究紀要』8号、2016
- 中村雄二郎「日本語と共通感覚」井上ひさし編『日本語の世界10 日本語を生きる』中央公論社、1985
- 原聖「言語マイノリティ—地域的少数言語を中心に」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』三元社、2013
- ハリソン、K・デイヴィッド、川島満重子訳『亡びゆく言語を話す最後の人々』原書房、2013 [K. David Harrison, *The Last Speakers: The Quest to Save The World's Most Endangered Languages*, 2010]
- 平川祐弘『西洋人の神道観—日本人のアイデンティティを求めて』河出書房新社、2013
- フィンチ、アンドリュウ、下畑光夫、隅田英一郎「機械翻訳のための文簡易化」『情報処理学会研究報告自然言語処理』1、2005
- 藤井幸之助「多言語サービス・多言語支援」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』三元社、2013
- フート、ヴェルナー、志村恵訳『原理主義—確かさへの逃避』新教出版社、2002 [Werner Huth, *Flucht in die Geweißheit: Fundamentalismus und Moderne*, 1995]
- 船山徹『仏典はどう漢訳されたか—ストラが経典になるとき』岩波書店、2013
- フルフォード、ベンジャミン『泥棒国家の完成 *The Iron Kleptocracy: The Sun Never Rises Again*』Kobunsha Paperbacks, 2004
- フルフォード、ベンジャミン『日本がアルゼンチンタンゴを踊る日 *The Day Japan Came Crushing Down*』Kobunsha Paperbacks, 2002
- フルフォード、ベンジャミン『ヤクザ・リセッション—さらに失われる10年 *The Yakuza Recession: Another Lost Decade*』Kobunsha Paperbacks, 2003
- 松岡正剛『侘び・数寄・余白—アートにひそむ負の想像力 連塾方法日本II』春秋社、2009
- 丸山真男、加藤周一『翻訳と日本の近代』岩波新書、1998
- 水村美苗『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』筑摩書房、2008
- ミュラー、マックス、津城寛文訳『人生の夕べに』春秋社、2003 [Max Muller, *Life and Religion*, 1905]
- 柳父章『翻訳を読む—異文化コミュニケーションの明暗』丸山学芸図書、1998
- 山田敏雄「和漢混淆文」『岩波講座日本語 10 文体』岩波書店、1977
- 山本有三「この本を出版するに当って—一国語に対する一つの意見—」『戦争とふたりの婦人』岩波新書、1939
- ロンゲ、ダニエル「言語接触と言語混交」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』三元社、2013
- 渡部昇一『日本語のこころ』講談社現代新書、1974
- 和辻哲郎「日本語と哲学の問題」『続日本精神史研究』『和辻哲郎全集』第4巻、岩波書店、1962

Research Note

Representing Japanese Hospitality: Takigawa Christel's¹ Speech for the 2020 Tokyo Olympics

Elisa Ivana PELLICANÒ

Hokkaido University, Graduate School of International Media, Communication and
Tourism Studies, Ph.D. Student

Abstract

Up until recently, Japan has been widely regarded as a mono-cultural/mono-racial country, populated by a single ethnic group (*tan'itsu minzoku*). Minority groups were made invisible in public discourse until as recently as the 1990s, where discourses about multiculturalism (*tabunka kyōsei*) started to surface (Willis and Murphy-Shigematsu, 2008).

Yet, in 2013, the biracial announcer Takigawa Christel was chosen as an ambassador for the 2020 Tokyo Olympics. The speech she delivered in front of the IOC (International Olympic Committee) was widely reported on Japanese media, becoming one of the most popular news items of the year and spawning the buzzword *omotenashi*.

Throughout this paper I will analyze the politics behind Takigawa's apparition in front of the IOC. By analyzing her speech, I will argue that her *hāfu* body served as the perfect vessel for an ideological stance that Japanese institutions have been trying to propagate domestically and abroad. Through the intersection of familiar discourses such as "Cool Japan," multiculturalism and nihonjinron-style cultural nationalism, the announcer's speech recreates a (self)-orientalistic (Iwabuchi, 1994) image meant to captivate the hearts of the global public. Japan as embodied by the biracial body of Takigawa Christel is a nation whose driving force is a tension between the "old" and the "new," the "oriental traditions" and "newfangled modernity". It is a nation of hybridity, much like the speaker herself. It is my intention to show the ways in which the announcer became the vessel for a new type of nationalism, one that is incredibly well matched with the desire for consumption of national images in an incredibly globalized world.

Keywords: *Hāfu*, Mixed-race, Nationalism, 2020 Tokyo Olympics, Orientalism

In the days between the 6th and the 10th of September, 2013, representatives from Japan, Spain and Turkey assembled in Buenos Aires, Argentina, for the 125th session of the International Olympics Committee (hereafter IOC). The three states were competing to host the 2020 Summer Olympics.

Among the Japanese representatives figured a well-known media figure: former Fuji Television Announcer Takigawa Christel, who was invited to participate as "Cool Tokyo" Ambassador. Viewers from Japan had the chance to see the newscaster, born from a French father and a Japanese mother, deliver her speech in perfect

¹ This manuscript uses last name-first name order for Japanese names.

French.

Takigawa's presentation received considerable media exposure, and it popularized the buzzword *omotenashi* (hospitality), which won the Buzzword award of that year (Huffington Post Japan, 2013). Not only that: the speech is also widely credited by prominent businessmen such as Sony former president Chūbachī Ryūji for helping Japan win the bid for hosting the 2020 Olympics (Nikkei Business Online, 2017; Sankei Biz, 2013).

Since she has no relation with either sports or politics, one might have found it surprising to see her on the stage. I will argue that the announcer's *hāfu* body was used as a powerful ideological tool in the race for the Olympics – one that was arguably more powerful domestically than internationally.

Nationalism, Globalization and the hybrid body

Questions of inter/nationalism have been a staple feature of Japan's post-war political discourses. In this section I will briefly summarize how nationalism (and inter-nationalism) have intersected with and participated in the construction of discourses about ethnic-racial hybridity.

Following the loss of the overseas territories in China, Korea and Taiwan, redefining the nation's boundaries was considered a major task during the period that succeeded the Second World War. It was once again necessary to find a convincing answer to the question "what is Japan", and this was logically followed by an intellectual quest to define the qualities of the Japanese people.

It is in this period that the *topoi* of Japanese insularity and Japanese mono-ethnicity started to emerge. Crafted as an antidote to the "multiethnic" (*ta-minzoku*) expansionism of the Japanese empire, the discourse of Japan as an ethnically homogeneous (*tan'itsu minzoku*) nation began to take hold on society (Kawai, 2015).

Postwar Japan wasn't, of course, an ethnically homogenous society. Many internal boundaries existed (and still do), ranging from the Ainu minorities in the northern regions of Hokkaido to the marginalized *burakumin*, and the communities of *zainichi* Koreans that decided to remain in the country well after 1945. Nevertheless, the ethnic-racial homogeneity of its inhabitants was a powerful rhetorical device during the postwar reconstruction of the national image².

It is no wonder that in the first 20 years following the war, "mixed race"³ was perceived as a pressing social issue. Up until the sixties *mixophobia* (Taguieff, 2001) characterized the discourses surrounding inter-racial mixing. The picture painted in the media was that of children born out of illicit relationships with men in the US army, if not from violence (Horiguchi and Imoto, 2014). Thus, the images of *konketsuji* (literally "mixed-blood" children) were intertwined to that of defeat in the war and of subjugation, through Japanese women's bodies, from an external enemy. "Mixed race" as a social problem was debated through questions such as the position of these children in Japanese society, as well as the (im)possibility of integration (Horiguchi and Imoto, 2014; Shimoji, 2018).

The first major shift in the perception of mixed race happened in the 1970s, with the transition from what Ifekwunigwe (2004) defines as an "Age of Pathology" to something more akin to an "Age of Celebration". It was during this period that the more positive sounding English loanword *hāfu* started to replace *konketsuji*.

Originating in media discourses, the term initially referred to individuals of white origin, most often women (Iwabuchi, 2014: 11-12), who were associated with characteristics such as beauty and desirableness⁴.

² For an overview to the individual contestations to national discourse of homogeneity, cfr. Murphy-Shigematsu 2000.

³ The question of how to refer to racial hybridity is a hotly debated one. I will here follow Ifekwunigwe (2004) and use the hyphenated term "mixed race" as an umbrella term that refers to individuals born from parents belonging to different racial groups.

⁴ These discourses are not completely new: "mixed-race" marriages with white women to better the Japanese race were advocated as a minority opinion in the pre-war eugenics debate. (See also Robertson 2002).

Hāfu is nowadays the most common way to refer to “mixed race”⁵, and is increasingly used to refer to people who, racial background notwithstanding, have a foreign parent. However, the cultural history of the term is still very much alive. With a few notable exceptions, media representation is still skewed towards people who have white origin⁶, and as the controversies surrounding Miss Universe Japan 2015 Miyamoto Ariana demonstrated, “mixed-race” people with black ancestry at times prove much more difficult to accept.

Throughout the last decade the *hāfu* body has acquired further significance as a symbol of an increasingly globalized country. “Mixed race” citizens of Japan are often represented as a bridge to the “outside world”, a precious asset to have in an age in which global interconnectivity has taken the spotlight. Paradoxically enough, this fascination with the “mixed race” body is not at all unrelated to the often self-orientalistic (Iwabuchi, 1994) insistence on particularism that characterizes most Japanese discourses on the nation. The insistence on a Japanese cultural hybridity that mixes modernity and tradition, of which some *hāfu* bodies become a complex symbol, is, as Friedman (1997) theorized, almost completely dependent on the widespread perception of essentialistic boundaries between the self and the other. White heritage becomes a symbol of modern “other” which is non-problematically fused with the Japanese “traditional” self.

Tokyo 2020 Ambassador Takigawa Christel, can be considered a suture point between the discourses of “mixed race”, nationalism and globalization. Her elite biracial body was the perfect symbol for an emerging national rhetoric that oscillates between particularism and universalism, that has also been instrumental in the ideological imagining of the upcoming Olympic tournament.

Becoming the Metropolis of Harmony: Tokyo 2020

In 2020, Tokyo will host the Olympics for the second time since 1964, becoming the first Asian city to do so. The bid for hosting the sports mega-event in 2020 was not the first: in 2009, Japan raced for hosting the 2016 Olympics. The candidacy was strongly wanted by the then mayor of Tokyo Ishihara Shintarō, who saw the event as a catalyst for tackling “the ‘adaptation to an aging and welfare society’, ‘consideration for environmental problems’ and ‘sustainable city development’ ” (Shimizu, 2014). Japan eventually lost to Brazil, but Ishihara came back to charge just two years after the proposal failed.

On June 11, 2011, just a few months after the disastrous Great Tōhoku Earthquake, Ishihara announced that Tokyo would make its bid to host the Olympics once again. On that same day, the diet passed a proposal to change the Fundamental Law on Sport: the new act emphasized a national responsibility of sport promotion. As worded by Kōno Ichirō, the director of the Japan Sport Council until September 2015, athletic disciplines were considered “an important strategic tool to show the existence of a nation” (Shimizu, 2014). Thus, the bid for the 2020 Olympics would have full governmental support, as it was now clear that it could have been used as a strategic tool to present a positive image of the country to the rest of the world (Roche, 2000).

It has been argued that mega-events such as the Olympics have an explicit political nature. Studying the development of mega-events in the 1800s and early 1900s, Roche argued that due to their “inter-national” nature they:

“helped to create a fragile space, something of an ‘international public culture’, in which ‘official’ versions of collective identities, particularly but not exclusively national identities, were asserted and recognised in an [...] international ‘world of nations’ ” (Roche, 2000: 22).

The historical situation has been deeply changed since the 1800s, and nationalism now co-exists with globalization in a relationship that is at times complicit, whilst at other times conflictual. Nevertheless, the

⁵ The term has also been the object of criticism: some members of the mixed-race community claim that since the original English word “half” implies incompleteness, the use of the word is discriminatory. Nonetheless, it still remains the most widely-used term to refer to mixed-race on the national level.

⁶ This is especially true of fashion and those sectors in the media that focus on beauty practices.

Olympics have remained a site for the display of “inter-nationalism”: it is in this light that seemingly “apolitical” mega-events such as the 1964 Tokyo Olympics have been recently re-analyzed. In his 2011 essay, Tagsold described how the event offered the opportunity to recuperate the war-tainted nationalistic symbols of the emperor and the national flag in a benign, peaceful light, thus contributing greatly to the reconstruction of a nationalistic sentiment (Tagsold, 2011). Similarly, the 2020 Olympic games are animated by a deeply self-conscious Japanese “brand nationalism” (Iwabuchi, 2007), this time centered on discourses of “western-eastern” hybridity.

The desire to show the “inter-national” aesthetic of the “Japanese national character” in the best possible way was evident in the discourse centered around the word *omotenashi*, that has been translated in the IOC speech as “hospitality”. The word *omotenashi*, popularly associated with Takigawa as it was one of the key points in her speech, has a distinctly nationalistic feel to it. It is implied to be a distinctive trait of a Japanese culture that is essentially different from its “western” counterpart. *Omotenashi* has been defined in the Japanese business world as the mindset that people in the service industry employ towards their clients – one that implies emotional tuning with the customer in order to make him or her feel at ease. Nagao and Umemuro (2012) imply in their definition a clear distinction between the strictly materially oriented “western” concept of hospitality and the feeling-oriented *omotenashi*, whose origins they trace back to tea ceremony, *ryokan* and geisha districts. The announcer’s take on hospitality, presupposes a Japanese actor and a foreign receiver, taking the mirror games of self and other to the international level, making explicit the connection between the intersecting local and the global dimensions of nationalism.

Roche also recognizes a globalist aspect of mega-events which appeal to the global, touristic consumer in three distinctive ways: the “specificity of when they occur, [...] the specificity of what uniquely dramatic and memorable activities and experiences occur when people attend them in person, and [...] the specificity of where they occur, namely the city that staged and ‘hosted’ them” (Roche, 2000: 26-27). Indeed, the potential global appeal is very highlighted in discourses surrounding the 2020 Olympics: the public is being presented with many innovations which are being developed in order to better accommodate the prospective tourists, such as foreign-language speaking robots (Nihon Keizai Shinbun, 2017), free wi-fi services (Nihon Keizai Shinbun, 2017) and so on. The citizens are also being invited to take part in the “internationalization” process of the Prefecture of Tokyo through volunteer activities such as translator or guide services (Tokyo Volunteer Navigator, n.d.).

What is surprising about the 2020 Olympic discourse is that the international discussion about it was radically different from the discussion nationally, as it was mostly focused on environmental problems and possibilities. Whereas it is not rare in Japan to hear that Takigawa’s internationalist contribution was significant in winning the race to the Olympics (Uotani, 2017), overseas commentary was more focused on prime minister Abe Shinzo’s speech about the Fukushima Nuclear Disaster and the narrative of a “safe capital city” which would not be affected in the slightest (BBC Sport, 2013; Longman, Fackler, 2013).

The national narrative surrounding the Olympic Games is consistent with Roche’s interpretation that mega-events “project the image and status of the local power elite which produced the event for the city’s public” (Roche, 2000: 10). In a time in which Japan’s elite is rushing to globalize, it is perfectly understandable that they would insist on the multiculturalism-globalism-internationalization triad, making the words “Unity in Diversity” one of the ideological pillars of the 2020 Tokyo Olympics (The Tokyo Organizing Committee of the Olympic and Paralympic Games, n.d.).

Takigawa Christel between “East” and “West”

According to Eriksen, globalization as a modern phenomenon exists in the acceleration of multiple pre-

existing processes (Eriksen 2014), among which figure communication processes, economic flows and the movement of people. This last process is of particular interest to this article, as it could be considered the main factor behind two very important concepts that form its theoretical background, namely what Eriksen dubs "mixing" and "identity politics".

Mixing has been one of the theoretical keywords of the last 30 years, gaining the spotlight in disciplines such as postcolonial studies and anthropology. Eriksen understands mixing as a complex phenomenon that can take multiple different forms whilst being able to elude strong identities and fixed boundaries. It is not a necessarily new phenomenon, as it could be said that the cultures that are being mixed now are, to a bigger or lesser degree, the products of prior cultural mixing (which might have taken place at a slower pace). However, it is undeniable that we are assisting an acceleration of these processes, which is in turn generating the reaction that Eriksen refers to as identity politics. Identity politics seek to fix identities and re-establish often nationalistic boundaries, whose erasure are perceived by the members of the group as a threat (Eriksen 2014: 158-160).

Japan might be seen as a case in point for Eriksen's argument that "globalization does not create global people" (Eriksen 2014: 154). As Iwabuchi (1994) has pointed out in one of his earlier articles, the increase of international exchanges mostly had the effect of reinforcing the images of a particularistic national identity constructed through dialectical relations with the "Western" and the Asian other. Iwabuchi's main argument consists in the fact that Japan's self-image is not, as one might think, a tool in the battle against Western cultural imperialism. It is in fact complicit with western ideologies of domination (thus the term "self-orientalism") and it has been employed as a strategy to suppress the country's minorities as well as to ideologically ground the country's culturally imperialistic expansionist tactics in Asia. In other words, Japan's complicit self-orientalism is often utilized as an ideological tool, especially in those arenas in which the warfare tools of soft power take center stage.

Discourses of Japanese self-orientalist cultural nationalism, often based on the presupposition of uniqueness, have been significantly challenged by the narratives of internal diversity and multiculturalism which have emerged in the last 30 years. Furthermore, figures such as the *kikoku shijo* and *hāfu* have made visible the presence of individuals who cannot easily be labeled as either Japanese or "foreign". However, some of these identities have been subsumed into a newly emerging national ideology, who found in them a powerful tool to reimagine the nation as a hybrid between "western" modernity and "Japanese" tradition. Paradoxically, this ideological construction is reminiscent of the two orientalist gazes of traditionalism (here understood as the condition of being "stuck" in a pre-modern past) and the often dehumanizing hyper-futurism (Wagenaar 2016). In this, we can see a continuity with the mirror-games of self-image construction that Iwabuchi refers to.

This newly emerging discourse surrounding the nation is embodied in the selection of the *hāfu* newscaster Takigawa Christel as Olympic ambassador – an ambassador to the nation in an extremely inter-national context. Takigawa stands out among the 10 Olympic ambassadors as the only one who has no direct relations to the sports event. There is an undeniably globalist reasoning behind her selection, that would arguably be based on her status as an individual who is "global" in virtue of her "mixed-race". Her proficiency in French is further proof of this "international" status.

Takigawa Christel became famous as a female newscaster for Fuji Television, where she worked until 2013 (Suzuki, 2013)⁷. Viewers of Japanese television might also be familiar with her presence in commercials. Her line of work blurs the boundaries between journalist and that of the celebrity; she could be considered as a *tarento* (TV personality) that is endowed with a high cultural capital. Thus, their image, consumable in various merchandising such as yearly released calendars, puts together physical beauty with the added element of intelligence and social status.

⁷ Takigawa is now an independent newscaster and animal-rights activist.

Takigawa nowadays is perhaps more famous for her persona than her work as a broadcast. Her image, which is built around her *hāfu* identity, her high education⁸ and prestigious line of work, are tied to her multicultural background. Japanese individuals with white mixed-race backgrounds became increasingly well represented in the media since the 1970s. The word *hāfu* started being associated with characteristics such as beauty and cosmopolitanism (Iwabuchi, 2014). Contemporary discourses about *hāfu* are heavily influenced by discourses about globalization; Iwabuchi ironically remarks on how they are perceived “global not only in their looks but also in their way of thought” (Iwabuchi, 2014: 12).

Especially relevant to the construction of her persona is her father’s country of birth, France, often idealized and imbued with a high symbolic capital (Wyatt, 2017) and thus occupying a very special place in the network of shared meanings of the Japanese⁹. These elite connotations have landed her roles in commercials for high-end products such as Ebisu Beer and Shiseido make-up products, and at the same time her appearance in such advertisements are further reinforcing her image of prestige.

Takigawa’s multiculturalism plays its role into positioning her among the cultured, highly sophisticated upper-middle class, she is a perfect example of the ideal *global jinzai* (global human resource)¹⁰. Physically, with her black hair and very light-coloured skin, she is the ideal proxy for an elite class who is nationalistically looking outwards, who aspires to be modern (and thus “westernized”) while retaining some kind of “traditional Japaneseness”.

This perfectly balanced mixture between “Japanese” and foreign that allows her to be chosen as the proxy for a “new Japaneseness” is only possible because the physical characteristics inherited from the white side of her family are tame enough to allow her to exist in the middle ground of a spectrum that goes from “*jun-nihonjin*” to foreigner. As Iwabuchi pointed out (2014), advancement in plastic surgery and make-up techniques has made it possible for non-mixed Japanese to obtain the semblance of a facial structure that is racially ambiguous. It is hard to imagine an ambassador with no relation to sports and whose foreign looks were more visible than Takigawa taking center stage to culturally represent Japan as she did¹¹. Her white heritage, upper socio-economical status and gender made her the perfect candidate.

Because of her inherently “global” *hāfu* status and her linguistic proficiency, Takigawa is perceived as a “bridge” between the all-Japanese panel speakers and the international audience of the IOC. She assumes the role of the “internationally-oriented national economic power elite” that serves to “internationalize” the nationalistic endeavor of bidding to host the 2020 Olympics (Roche, 2000); her elite status granted in virtue of both her profession and her biracialism. These tensions between national and international clearly emerge from her ambassador speech, that I will analyze in the following section.

⁸ Takigawa has a bachelor’s degree in French literature from Aoyama Gakuin University.

⁹ For the self-orientalistic construction of the European “West” see MIYAKE, Toshio, *Occidentalismi, Venezia, Cafoscarina*, 2010, pp.103-107 (in Italian).

¹⁰ Chapple translates as following the definition of the term given by the MEXT and the METI:

“people who, in today’s competitive and cooperative world, can—while maintaining their sense of Japanese identity—possess a broad worldview based on both general and specialized education, have communicative and cooperative abilities to build relationships which go beyond values, cultures and different languages, and that have the ability to create new values and the desire to contribute to society now and in future generations” (Chapple, 2014. Cursive in original.)

As it can be inferred from the institutional definition, *global jinzai* are expected to be the agent of globalization in Japanese companies.

¹¹ A comparison with the media coverage that former Miss Universe Japan Ariana Miyamoto got two years later might be useful to illustrate this point. Her selection prompted an immediate reaction from the ultra-conservative population of the 2chan boards, widely considered to be the underbelly of Japan. Although the extreme stance taken by these netizens is definitely a minority opinion, the reportages of her victory mostly focused on racial discrimination. One could see a faint continuity between the framing of (especially black) *konketsuji* as social problem and Miyamoto’s media presence.

Takigawa Christel's speech: the "magic word" *omotenashi*

Takigawa's presentation in front of the IOC was conducted in French and lasted approximately five minutes long. She was preceded by former Tokyo governor Inose Naoki, who introduced her as "the one who would communicate to the audience how will Tokyo welcome people from all the world" (Huffington Post Japan, 2013). The announcer began her speech in the following way:

Tokyo will welcome you uniquely. In Japanese, we can express [the way in which Tokyo will welcome you] as omotenashi (Huffington Post Japan, 2013).

Since the beginning of her speech, Tokyo, in virtue of being the capital city of Japan, is positioned as "unique". This references the cultural nationalist Nihonjinron discourse, that in the 70s aimed to construct a Japanese identity defined by its alterity from the "West". Similarly, *omotenashi* is constructed as a traditional (and thus exclusive to Japan) concept, unable to be rendered in foreign words. The alien quality of this concept is further emphasized by Takigawa's gestures; she spells out every syllable with a peculiar gesture of the hands, and then repeats the word once again, bowing with her hands held together as if she was praying¹². Overall the first part of the speech is the most popular one, and it is the reason why the word *omotenashi* was premiated with the "Buzzword of the Year" award (Osumi, 2013).

That is the spirit of hospitality without expecting anything in exchange, that has been transmitted to us from our ancestors and is deeply rooted in our hyper-modern culture. The word omotenashi expresses why Japanese people help each other and why they think that the guests they are welcoming are important.

Here, Takigawa makes a first reference to the hybrid cultural nationalist discourse which sees Japan as a hyper-technological, hyper-modern society that is nonetheless spiritually connected to its traditionalist roots. Once again, the apparently deep links between *omotenashi* and "Japaneseness" are highlighted.

Takigawa then proceeds to give examples of *omotenashi*.

Here is a simple example. If by any chance you lost anything in Tokyo, you would almost certainly find it back. Even money. In fact, last year more than 30 million dollars were brought back to the Tokyo Police Bureau as a lost item. According to a recent survey conducted on 75,000 people who travel the world, Tokyo is the safest city in the world. Also, according to this survey, Tokyo ranked first even in the following categories: traffic safety, cleanliness, and the kindness of the taxi drivers.

Safety is a priority concern when organizing mega-events, and they can even become catalysts to pass new security laws. Here Takigawa is appealing to this, describing Japan's safe environment as directly related to its unique culture. In what could be presented as a twist on the "futuristic" variant of Japanese nationalism, the country is presented as an unbelievably hyper-safe environment. She then goes on to describe what in the *nihonjinron* discourse is presented as the reason behind Japan's uniqueness.

*You can observe these resources in every neighborhood. The traditional **oriental** culture. Together with top class **occidental** shopping and restaurants they are in this town, who has the most Michelin stars in the*

¹² A video of the speech is available on ANN news's Youtube channel at the following link. <https://www.youtube.com/watch?v=6hgggygKWwhg> (accessed on ??, ??, 201?)

world; everything is incorporated in the landscape of this futuristic city. (my emphasis).

Here Takigawa slightly changes the topic, going back to the motif of hybridity. In a (self)orientalist twist, Japan is presented as being the perfect union between “oriental” and “occidental” cultures, providing to the visiting tourist exotic Japanese entertainment while at the same time offering them the safety of the already known. Following the reasoning behind her presentation, it is this co-existence of exotic “oriental tradition” and “foreign innovation” that makes Tokyo “futuristic”. It can be argued that these words have an even more powerful impact when pronounced by someone that is *herself* the union between the “oriental” and the “occidental”.

Takigawa’s hybrid, biracial image resonates with the nationalistic ideology as she is conflated to what is being constructed as the idealized “futuristic Japan”: the biracial body becomes the flesh for the multicultural, hybrid nationalist ideology tailor-made for the age of globalization. In the international space of competition that is the Olympic bid, the physical thus becomes a mirroring representation of the ideological.

The Elite Biracial Body as Proxy for “Future Japanese-ness”

Being frequently featured in television, both as a newscaster and as a *tarento* featured in commercials, Takigawa is very well known to the audience of Japanese television. Her multicultural background, high profile announcer career and her endorsement of high-end products mutually reinforce themselves, creating the image of an elite superwoman. By choosing her as the ambassador for the 2020 Olympics, the Japanese Olympics Committee, backed by the government, has chosen the “face” of Japan that it wanted to show on an international arena. Takigawa Christel’s biracialism, far from being subversive, becomes the embodiment of the cultural strategy of blending new and old, “oriental” and “occidental”, and constructing it into a new national(istic) self-identity. Takigawa’s presentation was incredibly successful nation-wide; it could be assumed that part of this success derives from the fact that she herself is constructed as the perfect mirror for the nationalist discourse in the subtext of the words she was addressing to the IOC.

References

- Chapple, Julian “ ‘Global Jinzai,’ Japanese Higher Education, and the Path to Multiculturalism: Imperative, Imposter, or Immature?”, in Shimizu, K et. al.(eds.). *Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific*. (London: Palgrave Macmillan, 2014)
- Eriksen, Thomas Hylland. 2014. *Globalization : The Key Concepts*. Second. London: Bloomsbury.
- Friedman, Jonathan, “Global Crises, the Struggle for Cultural Identity and Intellectual Porkbarrelling: Cosmopolitans versus Locals, Ethnic and Nationals in an Era of De-hegemonisation”, in Werbner, Pnina, Modood, Tariq, *Debating Cultural Hybridity: Multicultural Identities and the Politics of Anti-Racism*, London, ZED Books, 1997.
- “*Gaikokujin ni tsutaeteokitai ‘omotenashi’ no kokoro*” (The spirit of *omotenashi* we should convey to foreigners), *Nikkei Business Online*, [accessed on 2017/12/18].
- “Games Vision”, in *The Tokyo Organizing Committee of the Olympic and Paralympic Games*, <https://tokyo2020.jp/en/games/vision/>. [accessed on 2017/12/18].
- Horiguchi, Sachiko and Imoto Yuki, “*Mikkusu rēsu wa dou kataretakita ka – “hāfu” ni itaru made no gensetsu wo tadotte*” (How has mixed race been spoken about – retracing the discourse up until “hāfu”), in Iwabuchi, Kōichi (ed.), «*Hāfu*» to wa dare ka: jinshū konkō, media hyōshō, kōshō jissen» (Who are “Hāfu”: racial mixing, media representation, negotiation practices), Seikyūsha, Tokyo, 2014.

- Kawai, Yūko, "Deracialised Race, Obscured Racism: Japaneseness, Western and Japanese Concepts of Race, and Modalities of Racism", *Japanese Studies*, 35 (1), 2015.
- Ifekwunigwe, Jayne O, 'Mixed Race' Studies: A Reader, London, Routledge, 2004.
- Iwabuchi, Kōichi. *Bunka no Taiwaryoku – Softo Pawā to Burando Nashonarizumu wo Koete* (Cultural Dialogue – Beyond Soft Power and Brand Nationalism) (Tokyo: Nihon Keizai Shinbun Shuppansha, 2007)
- Iwabuchi, Kōichi. 'Complicit Exoticism: Japan and its other'. *Continuum*, 8:2, 1994.
- Iwabuchi, Kōichi, "Introduction: «Hāfu» kara terashidasu jinshū konkō no bunka seiji", in Iwabuchi, Kōichi ed. *«Hāfu» to wa dare ka: jinshū konkō, media hyōshō, kōshō jissen»* (Tokyo: Seikyūsha, 2014).
- Longman, Jeré and Fackler, Martin. "For 2020 Olympics, I.O.C. Picks Tokyo, Considered Safe Choice". *The New York Times*, <http://www.nytimes.com/2013/09/08/sports/olympics/tokyo-wins-bid-for-2020-olympics.html>, 2013/09/07. [accessed on 2017/12/18].
- Suzuki, Masahisa, "Mr. Sandē kōban no Takigawa Christel Genba no hihan wa saiaku... 'Kyasutā shikkaku' 'CM Dake yattete'" (Takigawa Christel leaves Mr. Sunday, the criticism from the stage was the worst... "You're a failure as a newscaster" "Just stick to commercials") *Excite news*, http://www.excite.co.jp/News/entertainment_g/20130123/Cyzo_201301_cm_7.html, 2013/01/31. [accessed on 2017/01/15].
- Murphy-Shigematsu, Stephen. 2000. "Identities of Multiethnic People in Japan.", in Mike Douglass and Glenda S. Roberts (eds.) *Japan and Global Migration: Foreign Workers and the Advent of a Multicultural Society*, Honolulu, University of Hawaii Press.
- Nagao, Yuki, and Hiroyuki Umemuro. 2012. "Elements Constructing Omotenashi and Development of Omotenashi Evaluation Tool." *Journal of Japan Industrial Management Association* 63: 126–37.
- "Olympics 2020: Tokyo wins race to host Games". *BBC Sport*, <http://www.bbc.com/sport/olympics/24002795>, 2013/09/07. [accessed on 2017/12/18].
- "Orinpikku Tōkyō purezen zenbun, Abe shushō ya Inose chiji wa nani wo hanashita? (IOC sōkai-purezen naiyō)" (The complete text from the Tokyo Olympic speeches, what did Prime Minister Abe and Mayor of Tokyo Inose say? (IOC conference presentation contents). *Huffington Post Japan*, http://www.huffingtonpost.jp/2013/09/07/olympic_candidate_tokyo_presentation_n_3886260.html, 2013/09/07. [accessed on 2017/12/19].
- Osumi, Magdalena. "Year's top buzzwords run the gamut from hospitality to revenge to shock". *Japan Times*, <https://www.japantimes.co.jp/news/2013/12/03/national/social-issues/years-top-buzzwords-run-the-gamut-from-hospitality-to-revenge-to-shock/#.WgcCDMZl9dg>, 2013/12/03. [accessed on 2017/12/18].
- "Puromōshon >> TOKYO 2020" (Promotion >> TOKYO 2020), in
- "2020nen, Orinpikku-Pararinpikku wo nihon de!" (2020, the Olympics-Paralympics in Japan!), <http://www.tokyo2020.jp/jp/promotion/ambassador/index.html>. [accessed on 2017/12/19 through the Wayback Machine].
- Robertson, Jennifer. 2002. "Blood Talks: Eugenic Modernity and the Creation of New Japanese." *History and Anthropology* 13 (3): 191–216.
- Roche, Maurice. *Mega-events and Modernity: Olympics and expos in the growth of global culture*. (London: Routledge, 2000)
- "Ryūkōgo taishou wa shijō saita no yottsu "jie jie jie" "baigaeshi" "ima deshō!" "o-mo-te-na-shi" (Buzzword Prize went to four words, the most buzzwords selected in a single year "jie jie jie" "baigaeshi" "ima deshō" "omotenashi"). *Huffington Post Japan*, http://www.huffingtonpost.jp/2013/12/02/buzzword-2013-japan_n_4370446.html, 2013/12/02. [accessed on 2017/12/18].
- "Sanka suru" (Participate), in "Tokyo borantia nabi – Tokyo 2020 taikai ni mukete borantia webu saito" (Tokyo volunteer navigator – volunteer website in preparation of Tokyo 2020). <http://www.city-volunteer.metro.tokyo.jp/jp/join/index.html>. [accessed on 2017/12/18].
- Shimizu, Satoshi. "Tokyo - Bidding for the Olympics and the Discrepancies of Nationalism". *The International*

- Journal of the History of Sport*, 31:6, 2014.
- Shimoji, Yoshitaka Laurence. 2018. “*Konketsu*” to “*Nihonjin*” - *Hāfu, Daburu, Mikkusu No Shakaiishi* – (“*Konketsu*” and “Japanese” – a social history of *Hāfu, Daburu, Mikkusu*). Tokyo: Seidosha.
- Tagsold, Christian. “The Tokyo Olympics: Politics and Aftermath”, in Kelly, William W., Brownell, Susan (ed.). *The Olympics in East Asia: Nationalism, Regionalism, and Globalism on the Center Stage of World Sports*. (Yale Ceas Occasional Publications, Vol. 3, 2011).
- Taguieff, Pierre-André, *The Force of Prejudice: On Racism and its Doubles*, Minneapolis, University of Minnesota Press, 2001.
- “*Tochō ni tagengo annai robotto Tokyo gorin e no jishhō jikken*” (Multilingual guide robots in the Tokyo Metropolitan Office – experimental implementation before the Tokyo Olympics). *Nihon Keizai Shinbun*, <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO23324890Z01C17A1CC1000/>, 2017/11/09. [accessed on 2017/12/18].
- “*Tōkyō Metro, 2020nen made ni zensharyō ni shanai Wi-Fi dōnyū*” (Tokyo Metro will have Wi-fi in all carriage before 2020). *Nihon Keizai Shinbun*, <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO22624400U7A021C1000000/>, 2017/10/24. [accessed on 2017/12/18].
- Uotani, Masahiko. “‘*Omotenashi*’ *māketingu to purezen ga shōchi seikō no kimete. Daga shin no shōsha wa*”(“*Omotenashi*” marketing and the presentation were the decisive factor in winning the Olympic invitation. However, the true winner is). *Nikkei Business Review*, <http://business.nikkeibp.co.jp/article/opinion/20131002/254123/>, 2017/10/03. [accessed on 2017/12/18].
- Wagenaar, Wester. 2016. “Wacky Japan : A New Face of Orientalism.” *Asia In Focus* 3: 46–54.
- “*[Wasurenagusa] Tōkyō Gorin kettei no shōin wa ‘o-mo-te-na-shi’ Nihonjin no biten*” ([Forget-me-not] The reason behind the Tokyo Olympics win was “*o-mo-te-na-shi*”. The good points of the Japanese). *SankeiBiz*, <http://www.sankeibiz.jp/express/news/130909/exe1309091135003-n1.htm>, 2013/09/09/. [accessed on 2017/12/18]
- Willis, David Blake, and Murphy-Shigematsu Stephen, *Transcultural Japan: At the borderlands of race, gender, and identity* (New York: Routledge, 2008)
- Wyatt, Caroline. “‘Paris Syndrome’ strikes Japanese”. *BBC News*, <http://news.bbc.co.uk/2/hi/6197921.stm>, 2006/12/20. [accessed on 2017/12/18].

University of Tsukuba
Journal of
International and Advanced
JAPANESE STUDIES
Volume 11 / February 2019

Contents

Articles

- Almas DISSYUKOV 1
“Central Asia Plus Japan” Dialogue: From Idea to Implementation
- Ayaka WATANABE 23
National Identity in Taiwan: How “Taiwan” Emerged under Japanese Occupation
- Teruo HIRASAWA 45
Spin-out and Business Development of Local Electric Lamp Companies:
A Case Study of SKY and AFC Co., Limited in Akita, Japan
- Dariyagul SHORINA 61
On the Role of Japanese Language Education in a Limited-use Environment:
An Analysis of Life Stories of University Teachers

Research Notes

- Hirofumi TSUSHIRO 73
For the Translation and Presentation of the Japanese Language in an Evolving Multilingual World
- Elisa Ivana PELLICANÒ 89
Representing Japanese Hospitality: Takigawa Christel’s Speech for the 2020 Tokyo Olympics

Online Edition (ISSN 2189-2598)

Please refer to the following web-page:

<http://japan.tsukuba.ac.jp/research>

Research Notes

- Bakhrom RADJABOV 99
A Critical Analysis of UNDP-Supported “Social Innovation”
Projects in Local Governance in Armenia, Ukraine and Uzbekistan
- Elyor A. MAKHMUDOV and Elmira A. ASHIROVA 121
Japan’s Practice in the Tourism Development of Uzbekistan:
Tourism Strategy in the Japanese and Uzbek Economies

Review Essay

- Liliana MORAIS 139
Traditional Japanese Arts and Crafts:
Historical and Political Trajectories from the Meiji Period until Today

The *Journal of International and Advanced Japanese Studies* is published by the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. The journal aims to promote open debate through publishing the results of leading research in Japanese Studies and welcomes submissions from the perspectives of cross-national and international studies (encompassing politics, economy, society, media and information studies, culture, linguistics and pedagogy, fine arts, and literature).

The *Journal of International and Advanced Japanese Studies* aims at contributing to the development of research involving Japanese Studies, Japanese Linguistics, International Comparative Studies, and International Studies.

Notice Regarding Copyright

The copyright for the content of each submission rests with its respective author(s), and they take full responsibility for the content of their submission, including quotations and usage permission. Except where copyright privileges are explicitly indicated to be held by the author(s), the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba, holds the copyright for this *Journal* and its related content posted on the Program's website (<http://japan.tsukuba.ac.jp/research>).

J *Journal of International and Advanced Japanese Studies*, Volume 11

[Editorial Committee]

Leslie TKACH-KAWASAKI (Editor-in-Chief)

Masako IKEFUJI

Ruth VANBAELEN

Katsunori SEKI

Hiroyuki TAGAWA

.....
Published on February 8, 2019

Edited and Published by

Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies,
Graduate School of Humanities and Social Sciences
University of Tsukuba

Printed by:

Inamoto Printing Co., Ltd.

Telephone: 029-826-1221

Copyright © 2019 by the Master's and Doctoral Programs in International and Advanced Japanese Studies, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba. All rights reserved.

Journal of International and Advanced JAPANESE STUDIES

Volume 11 / February 2019

Articles

- Almas DISSYUKOV
“Central Asia Plus Japan” Dialogue: From Idea to Implementation
- Ayaka WATANABE
National Identity in Taiwan: How “Taiwan” Emerged under Japanese Occupation
- Teruo HIRASAWA
Spin-out and Business Development of Local Electric Lamp Companies:
A Case Study of SKY and AFC Co., Limited in Akita, Japan
- Dariyagul SHORINA
On the Role of Japanese Language Education in a Limited-use Environment:
An Analysis of Life Stories of University Teachers

Research Notes

- Hirofumi TSUSHIRO
For the Translation and Presentation of the Japanese Language in an Evolving Multilingual World
- Elisa Ivana PELLICANÒ
Representing Japanese Hospitality: Takigawa Christel’s Speech for the 2020 Tokyo Olympics